

べきものなり、然るに今己れを禁ずるは、是れ夫婦の宜しき所を失ふなり、故に婦人夫の必ず己れを棄てんことを知り、之れと訣れて去る、曰はく、此の邦の人、己に我れを遇すること此くの如く、肯て我れを善しとせず、我れも亦旋り歸りて、我が國の宗族に復らんとなり、

黄鳥黄鳥。無集于桑。無啄我粟。此邦之人。不可與明。言旋言歸。復我諸兄。

梁はあはなり、不可與明とは、夫婦の道を明かにす可らざるなり、諸兄は兄なり、婦人父母の没後は、兄の家に復るを謂ふなり、詩の意、前章に同じ、

黄鳥黄鳥。無集于栩。無啄我黍。此邦之人。不可與明。言旋言歸。復我諸父。

栩黍の解、前に見ゆ、諸父は猶諸兄と曰ふがごとし、目上の人を指すなり、詩の意、前章に同じ、

我行其野

我行其野。蔽芾其樛。昏姻之故。言就爾宿。爾不我畜。復我邦家。○我行。

其野言采其蔎。昏姻之故。言就爾宿。爾不我畜。言歸思復。○我行其野。言采其蔎。不思舊姻。求爾新特。成不以富。亦祇以異。

此の詩古序に刺宣王也とありて、嫁娶の數を正すこと能はざるを刺るなり、宣王の末妻、七出の罪なきに、其の夫、之れを去り、更に娶るものあり、王、之れを制すること能はざればなり、

我行其野。蔽芾其樛。昏姻之故。言就爾宿。爾不我畜。復我邦家。

蔽芾は枝葉の始めて生ずるを謂ふ、樛は惡木の名、婿の父を姻と曰ひ、婦の父を昏と曰ふ、畜は養なり、言ふこゝろは、我れ野に行きて、食ふ可き菜を采らんとするに、唯よからざる樛の枝葉のみ、蔽芾として生ずるあり、蓋し仲春は嫁娶の月にして、樛の初めて生ずるときなり、我が嫁するや、我が父と爾の父と、約束して定めしに依り、其の命を以て、爾の家に就きて居る、我れ禮なくして來るものに非ず、樛は惡木と雖も、猶其の蔭に依るべし、况んや昏姻の故、豈就きて居る可らざること有らんや、然るに爾我れを棄て、畜はず、我れ當に我が本國の家に歸るべきなりと、

我行其野。言采其蔎。昏姻之故。言就爾宿。爾不我畜。言歸思復。

蕞は惡菜の名、和名きしぎしと曰ふ、亦仲春に生ずるものなり、惡菜と雖も、猶采るべきを謂ふ、復は反なり、詩の意、前章に同じ。

我行其野。言采其菑。不思舊姻。求爾新特。成不以富。亦祇以異。

菑も亦惡菜の名、和名やまごぼうと曰ふ、舊姻は初めの妻を謂ひ、新特は外より新たに來る妻を謂ふ、成は誠字の假借なり、言ふこゝろは、我れ菑を采るの時、禮を以て來り嫁す、爾何ぞ老父の命を思はずして、反て我れを棄て、新昏特來の女を求むるや、汝是くの如く、禮を以て室家を爲さざれば、誠は是れを以て富を得べきに非ず、人は一たび娶りては、借老の契りを爲すことなるに、爾は人に異なる行ひを爲すととなり、

斯干

秩秩斯干。幽幽南山。如竹苞矣。如松茂矣。兄及弟矣。式相好矣。無相猶矣。○似續妣祖。築室百堵。西南其戶。爰居爰處。爰笑爰語。○約之閣閣。椽之橐橐。風雨攸除。鳥鼠攸去。君子攸芋。○如跂斯翼。如矢斯棘。如鳥斯革。如翬斯飛。君子攸躋。○殖殖其庭。有覺其楹。噲噲其正。嘖嘖其冥。

君子攸寧。○下莞上簟。乃安斯寢。乃寢乃興。乃占我夢。吉夢維何。維熊維羆。維虺維蛇。○大人占之。維熊維羆。男子之祥。維虺維蛇。女子之祥。○乃生男子。載寢之牀。載衣之裳。載弄之璋。其泣喤喤。朱芾斯皇。室家君王。○乃生女子。載寢之地。載衣之裼。載弄之瓦。無非無儀。唯酒食是議。無父母詒罹。

此の詩、古序に宣王考室也とあり、考は成なり、禮に廟成れば、羊を殺して、之れに暨り、路寢成れば、盛食を設けて、之れを落すとあり、落は始なり、始めて新たに作ること故、祝願の辭多きなり、

秩秩斯干。幽幽南山。如竹苞矣。如松茂矣。兄及弟矣。式相好矣。無相猶矣。

秩々は水の流れ行く貌、干は潤なり、山間の谷水を謂ふ、幽々は深く遠きなり、南山は終南山なり、苞は本なり、竹の根の群がり生ずるを謂ふ、猶は道なり、道を以て相正すの義なり、言ふこゝろは、宣王の徳は、潤水の流れ出づるが如く、秩々と續き出で、極まり止むことなく、又其の民の器に富めること、幽々たる深山の材木に富

めるが如し、人民の衆多なることは、竹の根の多きが如く、松の冬夏に其の色を改めずして常に茂れるが如し、而して兄弟互に睦しく、相好みして、道を以て其の非を責むるが如きことなからんとなり、

似續妣祖。築室百堵。西南其戶。爰居爰處。爰笑爰語。

似は嗣なり、妣は死したる母を謂ふ、生けるに父と曰ひ、母と曰ひ、死せるに考と曰ひ、妣と曰ふなり、祖は先祖なり、祖妣と曰ふべきなれども、韻に叶へんため、妣祖と曰ふなり、堵の義、鴻雁の篇に見ゆ、爰は於なり、言ふことろは、宣王既に先祖先妣の功業を繼ぎて、其の宮室を作り、先祖の宮室の壞れたるを再興し、百堵の營造を爲し、或は其の戸を西にし、或は其の戸を南にす、各其の宜しきに適ふなり、宮室宗廟已に成りて、爰に居り、笑ひ語りて、安んじ樂まんとなり、

約之閣閣。椽之橐橐。風雨攸除。鳥鼠攸去。君子攸芋。

約は束なり、築き板を結び附くることなり、閣々は重ぬることなり、椽は杵にて土を打ち堅むることなり、橐々は力を用ゐる貌なり、除去は遠ざかりて侵さるるなり、芋は大なり、言ふことろは、宮室を作るに、築き板を結びつくること、閣々と次第

に之れを重ね、土を打ち堅むること、橐々と力を用ゐる、風雨も壞らず、鳥鼠も侵さざるは、是れ君子の光大なる所なりと、皇居を指して美するなり、

如跂斯翼。如矢斯棘。如鳥斯革。如翬斯飛。君子攸躋。

跂は足をつまみだつるなり、翼は敬なり、牆壁の正直なること、人の足をつまみだて、敬ふが如きを謂ふ、棘は矢じりの角なり、革は翼なり、翬は五采の備はりたる雉なり、躋は升なり、言ふことろは、宮室の制、其の規模の嚴正なること、人の足をつまみだて、竦つが如く、鏃の稜角あるが如く、鳥の翼を飾るが如く、雉の此に奮飛するが如し、屋壁の上下、四隅廉正にして、簷阿の制、鳥の飛ぶに似たり、是れ天子の升りて大政を執り、上に居て下に臨む所のものなりと、

殖殖其庭。有覺其楹。噲噲其正。噦噦其冥。君子攸寧。

殖々は平正の貌、覺は高大なり、楹はひさしの下に立つる柱なり、正は長なり、噲々は寛大の貌、冥は幼なり、噦々はものなれたる貌、言ふことろは、殖々然として平正なるものは、寢室の前庭、高下なきなり、覺然として高大なるものは、其の前楹なり、而して其の此に集る所、皆禮あるの士、噲々として寛大なるは、其の群臣の長、噲々

として閑習せるは、其の群臣の幼なる者なり、此の長幼の臣下を従がへらるゝは、天子の安んぜらるゝ所なりと、

下莞上簟。乃安斯寢。乃寢乃興。乃占我夢。吉夢維何。維熊維罴。維虺維蛇。

莞は蒲にて織りたる席なり、簟は竹葦等にて織りたる席なり、皆牀の上に敷くものなり、莞はふとき故下に敷き、簟は細き故上に敷くなり、罴は熊に似て、頭長く、足高く、力強し、虺はまむしなり、言ふこゝろは、寢室既に成り、莞を下にし、簟を上にして、其の中に寝ぬ、晨に至り、夢みしことあれば、乃ち人に命じて、之れを占はしむ、夢は善惡の徴あるものなればなり、而して吉夢は何ぞと云ふに、或は熊罴を夢み、或は虺蛇を夢みたるなり、

大人占之。維熊維罴。男子之祥。維虺維蛇。女子之祥。

乃ち此の夢を以て、老成博識の大人に問ひたりしに、曰はく、熊罴は山に在り、陽の祥なり、虺蛇は穴に居る、陰の祥なり、陽は男にして、陰は女なり、熊罴を見るは、男子生まるゝの祥、虺蛇を見るは、女子生まるゝの祥なり、祥は男女福徳の備はるを謂

ふなり、

乃生男子。載寢之牀。載衣之裳。載弄之璋。其泣喞喞。朱芾斯皇。室家君王。

璋は半圭なり、祭享に用ゐる器なり、喞は啼く聲なり、小兒の産ぶ聲の長く大なるは、福壽の徴とするなり、朱芾は天子の膝おほひ、皇は煌なり、かゝやくなり、言ふこゝろは、大人の言ふ所に違はずして、男子を生みしならば、之れを尊みて、牀の上に寝ぬしめ、衣服の盛んなる所の裳をさせ、將來外事を掌とるべきことを明かにし、其の徳を祝ひて、璋を弄はしめ、其の徳、玉の如くならんことを願ふなり、而して其の啼く聲は喞々と大にして、一家の内、後日或は諸侯と爲り、或は天子と爲り、皆將に朱芾を着け、皇々と輝かんとなり、

乃生女子。載寢之地。載衣之裼。載弄之瓦。無非無儀。唯酒食是議。無父母詒羅。

裼は夜衣と注す、寢衣の類なり、瓦は絲をつむぐもの、女功の事を習はすこゝろなり、非儀は皆朝廷議する所の政事、羅は憂なり、言ふこゝろは、若し女子を生みしな

らば之れを卑めて、地に寝ねしめ、之れに褌を衣せ、瓦を弄ばしめ、其の長ずるに及びても、朝廷の政事等に於て、非儀するとなく、唯常に酒食の事のみを議り、謹慎せずして、夫の家に居ること能はず、父母に憂を貽すが如きこと勿らしめんとなり。

無羊

誰謂爾無羊。三百維群。誰謂爾無牛。九十其犝。爾羊來思。其角濺濺。爾牛來思。其耳濕濕。○或降于阿。或飲于池。或寢或訛。爾牧來思。何蓑何笠。或負其餼。三十維物。爾牲則具。○爾牧來思。以薪以蒸。以雌以雄。爾羊來思。矜矜兢兢。不騫不崩。靡之以臑。畢來既升。○牧人乃夢。衆維魚矣。旒維旒矣。大人占之。衆維魚矣。實維豐年。旒維旒矣。室家溱溱。

此の詩、古序に宣王考牧也とあり、厲王の時古へより定め置かれたる牧人の職廢たれたるを、宣王に至りて、之れを復し、牛羊も多く蕃息したるを謂ふなり、牧人は、牛羊を畜ふことを掌とるものなり。

誰謂爾無羊。三百維群。誰謂爾無牛。九十其犝。爾羊來思。其角濺濺。爾牛來思。其耳濕濕。

毛

爾は宣王を指して言ふ、犝はあめうしの唇黒きを謂ふ、思は語辭なり、濺々は角を聚めて息ふ貌、濕々は食物を吐きて、再ひ噛みながら耳を動かし、相聚まるの貌なり、凡そ獸の物を噛む、頰車にて力を用ふる故、耳を動かすなり、言ふことゝるは、誰か亂に離るの後、爾に羊なしと謂ふや、其の群を計ふるに、凡そ三百あり、每群其の幾頭なるを知らず、犝牛の一色を擧ぐるも、其の數九十あれば、他の色は勝げて數ふ可らざるなり、爾か羊の來る、角多くして、濺々と和き集まり、爾か牛の來る、濕々と草を噛み、耳を動かし、集まるなりと。

或降于阿。或飲于池。或寢或訛。爾牧來思。何蓑何笠。或負其餼。三十維物。爾牲則具。

訛は動なり、牧は牧人、即ち牛羊を畜ふことを掌る者なり、蓑は雨を防ぐもの、笠は暑を禦ぐもの、餼は食物なり、物は毛色なり、言ふことゝるは、牛羊の牧場より歸る、道すがら或は山より阿に降り、或は池に來りて水を飲み、或は臥して寝ねるあり、或は行きて動くあり、又牛羊に隨ひて來る所の牧人は、蓑を何ひ、笠を何ひ、或は食糧を負ひて、寒暑風雨にも怠らず、故に牛羊能く蕃息し、其の毛色を分つときは、多き

詩

こと三十に至る、此くの如くなれば祭祀宴享等に用ゐる所の牲具はりて不足なしとなり、祭祀には青黄赤白黒の五色を用ゐ、其の他は宴享に用ゐるなり、爾牧來思、以薪以蒸、以雌以雄、爾羊來思、矜矜兢兢、不騫不崩、靡之以肱、畢來既升。

薪蒸は薪を采ることなり、鹿なるを薪と曰ひ、細きを蒸と曰ふ、雌雄は鳥獸の雌雄を取るなり、矜々兢兢は、堅く強き貌、騫は羊の肥えざるなり、崩は羊の疾あるなり、肱は臂なり、靡は手にて招くなり、升は升りて牢に入るなり、言ふことゝろは、牧人暇あれば薪蒸を採り、或は鳥獸を取りて歸る、爾か羊の來るや、瘠せ羸るゝものなく、又疾むものなし、羊能く牧人に馴れたれば、牧人臂を以て之れを招くときは、畢く升りて、其の牢に入るとなり。

牧人乃夢、衆維魚矣、旒維旗矣、大人占之、衆維魚矣、實維豐年、旒維旗矣、室家溱溱。

維の字、或は有と爲し、或は與と爲す、衆維魚は、猶多く魚ありと云ふかことし、又旒維旗は、旒と旗との意なり、旒旗の解、前に見ゆ、溱々は衆多なり、言ふことゝろは、牧人の夢に、多く魚あるを見、又旒と旗とを見る、占夢の官、此の夢を宣王に上り、以て國事を占はんことを請ふ、老成の大人之れを占ひて曰はく、衆く魚あるは、豊年の兆、陰陽和すれば、魚多ければなり、又旒と旗とは、衆人を聚むるものなれば、夫婦室家の道、治ぬく溱溱として、子孫繁盛ならんとなり。

節南山

節彼南山、維石巖巖、赫赫師尹、民具爾瞻、憂心如惓、不敢戲談、國既卒斬、何用不監、○節彼南山、有實其猗、赫赫師尹、不平謂何、天方薦瘥、喪亂弘多、民言無嘉、憯莫懲嗟、○尹氏大師、維周之氏、秉國之均、四方是維、天子是毗、俾民不迷、不弔昊天、不宜空我師、○弗躬弗親、庶民弗信、弗問弗仕、勿罔君子、式夷式已、無小人殆、瑣瑣姻亞、則無應仕、○昊天不備、降此鞠訥、昊天不惠、降此大戾、君子如屆、俾民心闕、君子如夷、惡怒是違、○不弔昊天、亂靡有定、式月斯生、俾民不寧、憂心如醒、誰秉國成、不自爲政、卒勞百姓、○駕彼四牡、四牡項領、我瞻四方、蹙蹙靡所騁、○方茂爾惡、相爾矛矣、既夷既釋、如相隣矣、○昊天不平、我王不寧、不

懲其心。覆怨其正。○家父作誦。以究王誦。式詭爾心。以畜萬邦。

是れより以下、巷伯に至るまで十篇を節南山之什と曰ふ。此の詩、古序に、家父刺幽王也とあり、周の幽王、尹氏を以て太師と爲し、以て亂を致す、故に家父此の詩を賦して、之れを刺りしなり。

節彼南山。維石巖巖。赫赫師尹。民具爾瞻。憂心如惓。不敢戲談。國既卒斬。何用不監。

節は高く峻しき貌、巖々は石を積みたる貌、赫々は顯かに盛んなる貌、師は太師、周の三公なり、尹は尹氏なり、具は俱なり、瞻は視なり、惓は熾なり、卒は盡なり、斬は斷なり、監は視なり、其の亂の生する所を視察すべきを謂ふなり、言ふこゝろは、終南の山、節然と高峻にして、積石巖々たり、民の共に仰ぎ見る所とす、今尹氏、官太師と爲り、其の勢、赫々として、天下の民望を屬して、具に瞻る所、猶高山を仰ぎ見るがごとし、然るに、尹氏之行ふ所、善からず、人をして憂苦の心、焚け爛るゝが如くならしむ、然れども、又汝の威を畏れ、敢て戯れにも其の惡しきことを言はず、此くの如くなれば、國運も亦盡く斷絶すへし、天何ぞ之れを察せざるやとなり、人は皆尹氏の

詩

毛

威を畏れて、言はざれども、此の危急の日に當り、家父に在りては、正しく言はざることを得ず、此の章、此の詩を作るの由を叙ぶるなり。

毛

節彼南山。有實其猗。赫赫師尹。不平謂何。天方薦瘥。喪亂弘多。民言無嘉。憯莫懲嗟。

實は滿なり、猗は長なり、南山の草木の實ちて長きを以て、尹氏が位の高きに比するなり、薦は重なり、瘥は病なり、弘は大なり、憯は曾なり、此の章、政を爲すこと平かならずして、天怒民怨を顧みざることを謂ふなり、言ふこゝろは、節然として高峻なるは、彼の南山なり、既に高峻なる上に、又之れを滿たして、平均ならしむるものは、其の草木の長く茂れるなり、彼の赫々として盛んなる者は、太師の尹氏なり、太師既に尊く盛んにして、又之れを益して、平均ならしむるものは、衆士の知能を用ゐればなり、然るに尹氏は、己れの爲す所を専らにし、肯て人を用ゐざれば、政を爲すこと平かならず、天も亦災を民に下し、重ねるに疫病を以てし、長幼をして相亂れて死せしむ、其の禍亂、甚だ大なり、下民の言ふ所、一も嘉みし喜ぶべきものなし、然るに曾て恩徳を以て、之れを止むることなきは、嗟々何にとしたることぞと、悲

詩

尹氏大師。維周之氏。秉國之均。四方是維。天子維毗。俾民不迷。不弔。昊天不宜。空我師。

氏は本なり、根柢の臣の義なり、均は平なり、毗は毗益の義にて、厚と訓ず、弔は至なり、空は窮なり、此の章、大師は國の根本たれば、政事を爲すこと、均平なるべくして、任の重きを謂ふなり、言ふこゝろは尹氏は太師の官に居れば、一國の根柢と爲り、國政を執ること、平かにして、宜く四方を維持し、上、天子を輔佐して、其の徳を厚くし、下、億兆を教化し、民をして迷惑の憂なからしむべく、其の任至りて重し、然るに何ぞ専ら虐政を行ひて、下を苦しむるや、尹氏の政を爲すこと、既に不善なれば、昊天宜しく此の人をして、位に居き、衆民を困窮せしむべからずと、天に訴ふるなり。

弗躬弗親。庶民弗信。弗問弗仕。勿罔君子。式夷式已。無小人殄瑣瑣姻。亞則無應仕。

仕は察なり、式は用なり、夷は平なり、瑣々は小なる貌、姻は婿の父を謂ひ、亞はあひむことを謂ふ、應は厚なり、此の章、小人を任用し、私黨を引くこと、不可なるを言ふ

なり、言ふこゝろは、尹氏は職に任ずべからざるの人なり、王、政事を躬らして、親しく事を執り行はざれば、庶民の言ふ所、信ず可らず、又庶民を責めて曰はく、王の政を爲す、之れを監み問はず、之れを察せずと雖も、人民に在りて、上の人を欺罔すること、自らことなかるべし、王、唯平正の人を用ゐて、官に任ずれば、民の欺き罔ふること、自ら已まん、王、必ず賢人を用ふべし、小人の言を用ゐて、以て危きに至ること、勿るべし、又疏遠の小人を用ふ可らざるのみならず、瑣々たる親屬の小人に重き祿を與へて、厚く仕へしむる等、其の才に非ざる者を擧げ用ふ可らずとなり。

昊天不備。降此鞠訥。昊天不惠。降此大戾。君子如届。俾民心闕。君子如夷。惡怒是違。

備は均なり、鞠は盈なり、訥は訟なり、戾は乖なり、届は極なり、闕は息なり、夷は易なり、違は去なり、此の章、君子天變を消すべきを言ひ、尹氏の惡しきことを天に訴ふるなり、言ふこゝろは、昊天よ、尹氏の政を爲すこと、均しからず、乃ち此の訟へ多き風俗を降せり、昊天よ、尹氏の行ひ和順ならず、乃ち此の大に乖き争ふの化を降せり、民の爲すことは、皆上の爲す所に化するなり、民既に上に化す、故に上の人惡

を爲せば、下亦上に效ひて悪を爲すべく、上の人善を爲せば、下亦上に效ひて善を爲すべし、汝位に在るの君子、若し至誠の道を行はば、民訟へ多き心をして息ましめん、君子若し平易の政を行はば、民の悪怒の情をして去らしめんとなり、

不弔昊天。亂靡有定。式月斯生。俾民不寧。憂心如醒。誰秉國成。不自爲政。卒勞百姓。

醒は酒に病むなり、酔ひて醒めたるに、又酒を進むるを謂ふ、此の章、上章を承け、尹氏但天變を弭むること能はざるのみならずして、且禍亂を生ずることを言ひ、下の四句は第四章に應ずるなり、言ふこゝろは、昊天に善みせられざるに由り、天下の亂定まることなく、月々に愈生じ、民をして安寧なることを得ざらしむ、今之れを憂ひて、其の心酒に病み、醒むることなきが如し、而して當時の君臣を見るに、誰れか能く國を平かにすべきの道を持するものありや、王、親ら政を爲さずして、尹氏に一任するに由り、終に萬民を困苦せしむるに至るとなり、

駕彼四牡。四牡項領。我瞻四方。蹙蹙靡所騁。

項は大なり、領は首なり、蹙々は縮小の貌、しゝまりせまるこゝろなり、言ふこゝろ

は、四牡は人君の車に駕する所、之れを養ひて、其の首を大にすれども、今は其の用を爲さず、大臣自ら恣まゝにして、王、之れを使ふこと能はず、即ち天子威力の薄弱なるを見るに喩ふ、故に我れ四方を見るに、土地は日に夷狄の爲めに削られ、蹙々としゝまりて、馳騁せんと欲すれども、復之く所なきなりと、

方茂爾惡。相爾矛矣。既夷既憚。如相齟矣。

茂は勉なり、相は視なり、夷は説なり、憚は服なり、酬は酢なり、此の章、小人の情狀を言ふ、言ふこゝろは、大臣定まりたる讒見なく、互に争訟して、其の凶惡を勉むるときは、矛を用ひて相殺さんとするが如し、然るに其の怒り解けて、既に説び、既に服するときは、賓主の盃を取りて、相酬ゆるが如く、喜怒の常なきこと此くの如し、故に政教も隨ひて亂るゝことを謂ふなり、

昊天不平。我王不寧。不懲其心。覆怨其正。

正は長なり、此の章、尹氏の縦まゝに自ら用ゐることを言ふ、言ふこゝろは、昊天よ、尹氏が政を爲すこと平かならず、我が王をして寧かざらしむ、尹氏が其の邪なる心を懲らし止めずして、却りて君長たる者を怨み憎むやとなり、

家父作誦以究王誦式訛爾心以畜萬邦

家父は大夫なり爾は尹氏を指す言ふこゝろは大夫の家父此の詩を作りて王の爲めに之れを誦し王の政を爲すに訟への多き根本は此くの如くなりとの意を究め爾の心を改めかへ賢者に任じて國の治まらんことを求め以て万邦の民を撫育せよとなり

此の詩首章に民具爾瞻と云ひ此の章に式訛爾心と云ふ起結爾の爾の字相應ず皆尹氏を指して言ふなり又詩を作る者其の名を隠して諷諭し又は陽はに定めずして云ふもあれども此の家父は名を匿さずして言ふものは身を以て尹氏の怒りに觸れ誅罰を避けずして上の悔悟あらんことを冀ふなり

正月

正月繁霜我心憂傷民之訛言亦孔之將念我獨兮憂心京京哀我小心癡憂以痒○父母生我胡俾我瘵不自我後好言自口莠言自口憂心愈愈是以有悔○憂心惓惓念我無祿民之無辜并其臣僕哀我人斯于何從蘇瞻鳥爰止于誰之屋○瞻彼中林侯薪侯蒸民

毛

詩

今方殆視天夢夢既克有定靡入弗勝有皇上帝伊誰云憎○謂山蓋卑爲岡爲陵民之訛言寧莫之懲召彼故老訊之占夢具曰予聖誰知鳥之雌雄○謂天蓋高不敢不局謂地蓋厚不敢不踏維號斯言有倫有脊哀今之人胡爲虺蜴○瞻彼阪田有苑其特天之扞我如不我克彼求我則如不我得執我仇仇亦不我力○心之憂矣如或結之今茲之正胡爲厲矣燎之方揚寧或滅之赫赫宗周褒姒威之○終其永懷又窘陰雨其車既載乃棄爾輔載輪爾載將伯助予○無棄爾輔員于爾輻屢顧爾僕不輸爾載終踰絕險曾是不意○魚在于沼亦匪克樂潛雖伏矣亦孔之炤憂心慘慘念國之爲虐○彼有旨酒又有嘉穀洽比其鄰昏姻孔云念我獨兮憂心慙慙○此彼有屋蔌蔌方有穀民今之無祿天天是楛哥矣富人哀此惓獨

此の詩古序に大夫刺幽王也とあり幽王の時大夫天變あるを見て政教の亂れたるを憂ひ傷みて作れるなり

正月繁霜我心憂傷民之訛言亦孔之將念我獨兮憂心京京哀我小

心。癩憂以痒。

正月は夏正の四月なり、四月は純陽にして、正陽の月なるを以て、正月と曰ふ繁は多なり、訛は偽なり、將は大なり、京々は憂の去らざるなり、癩は鼠の病みて穴に在るなり、痒も病なり、言ふこゝろは、四月は純陽の月なるに、時ならずして、多く霜ふるは、災害の甚だしからんことを憂ふるなり、書の洪範に、急恒寒若とあり、君の行ひ急促なれば、寒氣の強きを謂ふなり、故に此の天災あるものは、王の嚴刑重罰を用ゐるに由り、天變之れに應じて、万物を傷害するなり、而して王の刑罰を嚴にするものは、下民の訛言を信ずるに由る、民の訛言、善を爲すこと亦甚だ大なり、人皆危きことを忘るゝと雖も、我れ獨り災の宗廟社稷に及ぼんことを畏れ、之れを憂ふるの心、京々として去ること能はず、又哀むべきことには、我れ此の事を痛み憂ひ、小心畏懼して、鼠の病みて穴に在るが如く、愁ひ歸きて病めりとなり、

父母生我。胡俾我癩。不自我先。不自我後。好言自口。莠言自口。憂心愈。是以有悔。

癩は病なり、莠言は正しきを害するの言なり、愈々は憂懼の意なり、言ふこゝろは、

父母我れを生む、何ぞ我れをして此の暴虐の政に遇はしめ、かくまで病ましむるや、此の亂我れより前世に非ず、又我が死後にも非ず、現今に在りて、之れを免るゝこと能はず、此の暴虐の政あるは、民の偽りを言ふに興る、故に之れを惡みて曰はく、美好の言も爾の口より出で、又正しきを害するの言も爾の口より出づ、爾の口は一にして、善惡同じく出で、是非を變亂するは、甚だ賤しみ憎むべきなり、我が心、政事の惡しきことを憂ひ、愈々として懼る、我れは此の訛言を爲す者と異なれば、却て小人の爲めに、侵し侮らるゝとなり、

憂心惇惇。念我無祿。民之無辜。并其臣僕。哀我人斯。于何從祿。瞻烏爰止。于誰之屋。

惇々も憂ふる意なり、無祿とは、天より賜はる所の祿なきを謂ふ、即ち不幸の意なり、辜は罪なり、古へ罪ありて死刑に當らざる者は、獄中に入れ、晝は夫役に使ひしなり、言ふこゝろは、我が惇々と憂ふるものは、今天下の人、天祿なく、不幸にして、明君に遭はず、此の虐政に遇ひ、辜なき者も、亦遂に罪を得て、其の身を臣とし、僕とし、夫役に使はるゝに至らん、哀いかな、衆くの人、當に何れの所に從ひて、天祿を得、

毛

此の艱難を免るべきや、而して人を祿する者は、必ず權門に在り、故に之れに繼ぎて曰はく、試みに群がる鳥の飛ぶを見るに、果して誰れの屋に集るや、鳥は多く富める人の屋に止まりて、食を求むる者なれば、權門に趨き勢に附く、小人に比するなり、此の章、誰れの屋は、即ち末章、誰れをたる者有する所の屋、富人は、即ち末章、胥矣の富人と對して見るべきなり、

瞻彼中林。侯薪侯蒸。民今方殆。視天夢夢。既克有定。靡人弗勝。有皇上帝。伊誰云憎。

中林は林中なり、繼なるを薪と曰ひ、細きを蒸と曰ふ、夢々は亂なり、勝は乘なり、皇は君なり、言ふこゝろは、彼の林中を見れば、大木あるの處なるに、薪蒸の小木あるは、猶小人の朝廷に在り、賢者に似て非なるがごとし、朝廷の上、皆小人のみにして、王を助けて、虐政を爲す、故に民之れを怨むこと久し、然れども、今危殆の時にして、王の爲す所を見れば、夢々として昏亂し、此の小人を如何ともすることなし、若し其の既に定まるや、人として起ちて其の敵に乘し、小人を去らざるものなし、かく云ひて、小人を戒め、其の必ず敗るべきを言ひて、之れを畏れしむるなり、上帝、小人

を憎まずして、誰をか憎まんやとなり、

謂山蓋卑。爲岡爲陵。民之訛言。寧莫之懲。召彼故老。訊之占夢。具曰予聖。誰知鳥之雌雄。

訊は問なり、此の章、王の訛言を信じて、老成の人を棄るを謂ふ、言ふこゝろは、山は高からざるに非ず、然るに之れを謂ひて卑しと爲し、却て岡陵の如きものを求む、猶舊來の賢人を以て用ゐるに足らずと爲し、新たに進む所の小人を用ひて、賢人なりと爲すがごとし、小人位に在れば、好みて詐偽の言を爲す、而して王之れを禁止することなし、若し故老の人あれば、政事を訊はずして、問ふに夢を占ふの事を以てす、其の實、君臣自ら以て聖と爲し、共に其の非を知らず、小人媚を呈し、王の寵を得んと欲し、王を以て神聖なりと稱し、小人も亦自ら以て知と爲す、是れ皆上章屋に集るの鳥利の爲めに來る者のみ、誰れか其の雌雄を辨せん、讒見の齊しくして、別つことなきを鄙むなり、

謂天蓋高。不敢不局。謂地蓋厚。不敢不躋。維號斯言。有倫有脊。哀今之人。胡爲虺蜴。

詩

毛

詩

局は曲なり、かゝまるを謂ふ、躡は足を緊ぬるなり、ぬきあしするを謂ふ、倫は道なり、脊は理なり、應はまむし、蜷はどかげなり、言ふことろは、天は高けれども、雷霆あり、身をかゝめて畏るべし、地は厚けれども、陥ることあり、ぬきあしして心を用ふべし、當時政事亂れて、罪なき者も刑罰に陥るが故に、人皆之れを恐れ、政事を指して言はず、天地を假りて言ふなり、作者其の言を善しとして曰はく、我が號びて此の言を發する、實に道理あり、妄りに言ふことに非ず、上下の畏るべき、實に此くの如し、應蜷の性、人を見れば、則ち走り匿る、民の王政を聞く者皆逃れ避けざるなし、衰いかな、今の人、何ぞ應蜷の行ひを爲すやとなり、

瞻彼阪田。有薺其特。天之玃我。如不我克。彼求我則。如不我得。執我仇。仇亦不我力。

阪田は地さかしく、土のやせたる田なり、薺は茂り盛んなる貌、特は苗の抽んで、生ひ出でたるを謂ふ、抗は動なり、我は特苗を指して言ふ、彼は王を指すなり、執は猶ほ待と曰ふがごとし、仇々は傲慢の意なり、言ふことろは、彼の阪田の瘠せたる地を見るに、茫然として、獨り生ひ出でたる苗ありと、蓋し特異の賢者、山間幽僻の

地に隠れ居るに喩ふ、而して天は萬物を生育するものなるに、風雨を以て我れ特苗を動搖し、我れに勝へざらしむるが如し、王の始め我れを召び求められしとき、は、我れを以て法則と爲さんとし、我が召しに、應せざるを恐るゝが如く、禮命繁多なりしに、今既に我れを得れば、我れを待つこと、仇々と傲慢にして、復我が勤務する所の功力を問はず、唯賢者を招くと云ふのみにして、其の實之れを用ふるに非ざるなり、

心之憂矣。如或結之。今茲之正。胡然厲矣。燎之方揚。寧或滅之。赫赫宗周。褒姒威之。

茲は此なり、長は正なり、厲は惡なり、燎は草木を焚きて田獵するなり、褒は國の名、姒は姓なり、幽王褒國の女を寵して后と爲す、是れを褒姒と曰ふ、褒姒淫にして、醜を好みたり、威は滅なり、言ふことろは、我が心の憂ひ、解け去らざること、結ひとめたるが如し、然る所以のものは、今此の君臣、人の長と爲りて政を爲す、何ぞ其れ暴厲なるや、君臣惡極まれば、國將に亡びんとす、夫の燎火の熾んに燃え立つ、誰か能く之れを撲ち滅すものあらんや、唯水能く之れを滅すのみ、赫々と盛んなる宗周、

王業深固にして、誰か之れを滅さんや、然れども彼の褒姒遂に之れを滅さんとなり、

終其永懷。又窘陰雨。其車既載。乃棄爾輔。載輸爾載。將伯助予。

窘は困なり、輔は車の輻に杖を結ひつけ、輪の力を助くるものなり、輻は輪中の直木なり、輸は墮なり、將は請なり、伯は長なり、此の章及び下章、商人の貨物を車に載するに喩へて言ふなり、言ふころは、王の惡を爲す、之れを改むるの心なきときは、其の終りを永く懷ふに、猶商人の路を行きて疲勞し、又陰雨に苦めらるゝがごとくならん、商人の陰雨に遇ふときは、道路泥深くして、車陥り、難みあらん、王の行ひ惡しければ、必ず國を亡すの憂ひあり、商人にして陰雨あらんことを慮れば、宜く車に輔を用ゐて車を佐くべし、今載する所既に重し、然るに又輔を棄て、用ゐず、車をして泥中に陥らしむ、王、政事に危ふきことあらば、宜く賢者を用ゐて國を治むべきに、今賢者を遠ざけ、政事をして亂れしむ、車既に輔を棄て、又陰雨に遇はば、則ち車を敗り、載せたる貨物を路に墮し、然る後長者を呼びて、我れを助けよと言はば、已に晚し、王、賢人を棄て、用ゐず、國家將に亡びんとするに及び、賢人を求

毛

詩

め、已れを佐けしめんとするも亦晚し、王何ぞ其未だ危ふからざるに及び、賢者を用ゐて自ら輔けざるやとの意なり、

輔の字、毛氏鄭氏皆明解なし、考工記に車を作るの制を言ふこと甚だ詳かなれども、輔に及ばず、按ずるに、輔は人を謂ふことにして、物に非ず、僕なるべし、次章無棄爾輔云々を見て、其の意自ら明かなり、

無棄爾輔。員于爾輻。屢顧爾僕。不輸爾載。終踰絕險。曾是不意。

員は益なり、僕は御なり、言ふころは、爾の車に於て、輔を棄つることなく、其の輻を増し、屢御者を顧みて、注意せしならば、爾の載せものを墮さずして、終に險難の地を踰ゆることを得ん、曾て此の輔と御者とを以て意に留めざるや、王、能く賢者を用ゐて、國事に裨益せしめ、又善く執政の人を禮遇して、其の職に居らしめば、王業を墮さずして、禍害を免るゝことを得ん、王、何ぞ是れを以て意に留めざるやとの意なり、

魚在于沼。亦匪克樂。潛雖伏矣。亦孔之炤。憂心慘慘。念國之爲虐。

沼は池なり、炤は見易きなり、慘々は困むなり、上章は王に賢人を用ふべきことを

毛

詩

教ふれども、王之用ゐること能はざるなり、此の章は、賢者其の所を得ざることを言ふなり、言ふこゝろは、魚の沼池に在り、人の爲めに驚かされて、快く遊ぶことを得ざれば、亦其の樂みあるに非ず、又退きて深き淵に潜みたりとも、亦焔々として見易く、以て罔罟の害を避くるに足らず、逃るゝ所を知ることなし、君子衰亂の朝廷に在りて、道を行ふことを得ざれば、其の心樂しきことあるに非ず、又退きて山林に通るゝとも、其の名遠く聞えて、逃るゝ處なく、終に虐政を免る可らず、我が身は憂ふるに足らざれども、國政の暴虐なるは、禍の社稷に及ばんことを憂ひ、其の心慘々として忘るゝこと能はずとなり、

彼有旨酒。又有嘉穀。洽比其鄰。昏姻孔云。念我獨兮。憂心慙慙。

彼は王を指して言ふ、洽は合なり、鄰は近なり、云は旋なり、慙々は傷なり、言ふこゝろは、王に美酒あり、又嘉肴あり、禮物甚だ備ると雖も、鄰近の左右と、妻の親族とを合せて、之れを樂ましめ、遠人に及ぶこと能はず、國家將に危亡に至らんとす、我れ獨り慙々として、之れを憂ひ傷むとなり、

岷岷彼有屋。蔌蔌方有穀。民今之無祿。天天是慄。哿矣富人。哀此惇獨。

岷々は小なり、蔌々は陋なり、穀は祿なり、天は禍なり、哿は讒言して人を毀ふなり、哿は可なり、獨は單なり、言ふこゝろは、岷々然たるの小人、已に室屋の富あり、蔌々として賤しき者、方に爵祿の貴きあり、王、今小人を寵して、之れを富貴にすれども、此の下民、不幸にして家なく食なし、是れ王之れに禍し、又彼の屋あり穀あるの小人、讒言を以て之れを害す、其の困苦尤も甚だし、富人猶財貨ありて之れに供すべし、哀いかな、此の單獨の民、窮して告ぐる所なしとなり、

十月之交

十月之交。朔日辛卯。日有食之。亦孔之醜。彼月而微。此日而微。今此下民。亦孔之哀。○日月告凶。不用其行。四國無政。不用其良。彼月而食。則維其常。此日而食。于何不臧。○燂燂震電。不寧不令。百川沸騰。山冢率崩。高岸爲谷。深谷爲陵。哀今之人。胡憯莫懲。○皇父卿士。番維司徒。家伯冢宰。仲尹膳夫。栗子內史。蹶維趣馬。楛維師氏。豔妻煽方處。○抑此皇父。豈曰不時。胡爲我作。不即我謀。徹我牆屋。田卒汙萊。曰我不戕。禮則然矣。○皇父孔聖。作都于向。擇三有事。亶侯多藏。不愆遺一老。俾

我王擇有車馬以居徂向。○黽勉從事不敢告勞無罪無辜讒口豎豎。下民之孽匪降自天噂沓背憎職競由人。○悠悠我里亦孔之痗四方有羨我獨居憂民莫不逸我獨不敢休天命不徹我不敢傲我友自逸。

此の詩古序に大夫刺幽王也とあり幽王の時天變の見はるゝを見て人災之れに應し政事の亂るゝことを刺るなり。

十月之交朔日辛卯日有食之亦孔之醜彼月而微此日而微今此下民亦孔之哀。

十月は周正の十月にして夏正の八月なり交とは日月の交はり會ふ時を謂ふ日は一年に一周年し月は一月に一周年し日と月と會すること一年に十二次其の交會するとき或は日食の變あり交會は必ず月朔に於てす故に日食は必ず月朔に在るものなり朔日は當に朔月に作るべし朔望の字皆月に从ふ説文に朔月一日始蘇也望月滿與日相望以朝君也と見え儀禮禮記皆朔月の文あり尙書に或は元日上日と稱すれども朔日と日は望も亦既望或は月幾望と日ひて望日と日は故に朔日は朔月の誤りなるべし日有食之とは月之れを食するなり然れど

と月之れを食すと云はざるものは其の形見えざればなり醜は惡なり微は明かならざるなり言ふところは十月朔辛卯此の時に於て日食の變あり亦甚だ悪しきことなり夫れ天地の氣は陽のみ陽氣の消するは即ち陰なり陽は實して餘りあり故に日光常に滿つ陰は虚にして足らず故に月の形常に缺く月の缺くる處必ず日に背く其の光り必ず陽を承く陽光の及はざる處は即ち陰形の暗き處なり故に十五日以後下弦にして晦に至り漸く日に近ければ則ち陰漸く消して形漸く缺け朔より以後上弦より望に至り漸く日に遠ければ則ち陰漸く長じて光り漸く生ず晦は極めて日に近し故に月死し望は極めて遠し故に月盈つ猶諸侯の天子に覲するときは禮卑く本國に在りては亦一君なるかごとし此れ陰陽の分段なり朔には則ち日月の行度を同じくし道を同じくす日の行くこと高くして月の行くこと低し内外疊合して日月の爲めに揜はれ男女合うて陽其の侵着を受くるが如く臣子君父に逼りて其の威權を竊むが如し有餘を以て不足を成す是れを日食と爲す望には則ち日月東西相對し亦度を同じくし行を同じくす然れども日の行くこと速かにして月の行くこと遅し相望みて或は少しく參差

し不正にして相對すれば、則ち月光日の偏する處に隨ひて虧く、蓋し日低く地底
 を行き、陰反りて其の上に抗出す、猶女の男を弄し、臣君の柄を竊むがごとく、不足
 を以て有餘に居り、反りて其の殃を受く、是れを月食と爲す、日食は陽光蔽を受く、
 陽の不善なり、月食は陰過ぎて削らる、陰の固より然るべきなり、故に日食を變と
 爲し、月食を常と爲す、春秋月食を書せずして、日食を書するものは、是れが爲めな
 り、夫れ日月の交會して食する、推歩して知るべく、數の當に然るべきものと雖も、
 云ひて異と爲すものは、人君志意の怠り易きを恐れ、神靈を假りて鑒戒を爲すな
 り、夫の昭々たる大明を以て、下土を照臨するも、忽にして殞亡し、晝をして夜と爲
 さしむ、其の怪異たる、此れより甚だしきはなし、故に天變を重んじ、人君を警むる
 なり、月は臣の道、日は君の道なり、月は當に微細の時あるべし、日は當に微細の事
 あるべからず、然るに日月共に虧くることあるは、君臣其の道を失ひ、災害將に起
 らんとするの兆なれば、此の下民も亦甚だ哀むとなり、
 日月告凶。不用其行。四國無政。不用其良。彼月而食。則維其常。此日而
 食。于何不臧。

彼月而食、則維其常とは、日食の前後には、必ず月食あるものなれば、當時又月食あ
 りしなるべく、常事に非ざれども、之れを日食に比すれば、猶常のごとしとの意に
 して、詩人時を刺るの辭、月食を以て常とするに非ざるなり、臧は善なり、言ふこゝ
 ろは、日月の食するは、天下の人に國家凶亡の兆あることを示さんが爲めにして、
 其の行道を用るず、之れに違ひて變を見はずなり、然るものは、四方の國、善政なき
 所以にして、是れ王の善人を舉げ用ゐざるが故なり、月は陰にして臣の道なれば、
 其の陽に食せらるゝは、未だ怪むに足らざれども、日は陽にして君の道なるに、其
 の陰に食せらるゝは、何ぞ善からざるや、不善の大なるもの、是れ國家亡滅の兆な
 りと云ふなり、

燁燁震電。不寧不令。百川沸騰。山冢峯崩。高岸爲谷。深谷爲陵。哀今之
 人。胡惜莫懲。

燁々は震電の貌、震は雷なり、電は電光なり、沸は出なり、騰は乘なり、冢は山の頂な
 り、峯は土山の石を戴くを謂ふ、惜は曾なり、懲は止なり、此の章、災異交々至りて、獨
 り日月の食のみならず、ざるを謂ふ、言ふこゝろは、燁々たる大雷電あり、又百川の水

皆溢れ出で、相乗る、是れ小人上に在るの象、又山の頂崖、麓たるもの崩れ落つるは、是れ君の道壞るゝの象、高大の岸は陥りて深谷と爲り、深下の谷は進み出で、丘陵と爲る、小人上に居り、君子下に處るの象に非ずして何ぞや、夫れ國家道を失ふときは、天、先づ災異を出して之れを警む、哀いかな、位に在るの人、此の災異を見ても、曾て道徳を行ひ、之れを消し止めんとする者なし、若し徳を尙ひ、刑を省き、小人を退け、君子を進めば、則ち天變止むべしとの意なり、

皇父卿士。番維司徒。家伯維宰。仲允膳夫。棗子内史。蹶維趣馬。橋維師氏。豔妻煽方處。

皇父、家伯、仲允は皆臣の字、番、棗、蹶、橋は皆臣の氏なり、豔妻は褒姒を指して言ふ、美色を飽と曰ふ、褒姒の事は前篇に見えたり、煽は熾なり、卿士は六卿中政を執る者、指して言ふ、左傳に鄭武公、莊公爲平王、卿士とあり、杜注に王卿之執政者、と記せる見るべし、司徒は地官にして、天下土地の圖、人民の數を掌どる、宰は冢宰、天官にして、邦の六典を建つることを掌どる、皆卿なり、膳夫は上士にして、王の飲食の膳を掌どる、内史は中大夫にして、爵祿廢置殺生予奪の法を掌どる、趣馬は下士に

して、馬官なり、師氏は中大夫にして、朝廷の得失を告げ記すことを掌どる、言ふところは、天災の至るは、小人事を用ふるに由る、皇父の如き者、卿士と爲りて、政權を握り、以下の者、皆王の美妻褒姒に媚ひ、各極要の位地に居り、朋黨を爲して、氣節の盛んなる、容易に動く可らずとなり、此の詩、卿士司徒冢宰の尊き者と、膳夫趣馬等の卑き者とを一處に並べ叙するは、皇父の宮禁に出入する、必ず膳夫趣馬等一輩の人、之れが爲めに交關することあるを見るべし、又七人を歴叙して、終りに豔妻を言ふものは、七人皆豔妻に由りて進むことを見るべきなり、

抑此皇父。豈曰不時。胡爲我作。不即我謀。徹我牆屋。田卒汙萊。曰予不戕。禮則然矣。

抑は噫なり、歎ずる詞、時は是なり、汙はくばみて水たまるなり、萊は荒れて草深きなり、戕は殘なり、皇父王の寵を得て、畿内に封ぜられ、乃ち都を築き、邑人をして之れに居らしむ、先づ牆屋を毀ちて、邑人を遷し、其の業を廢せしむ、故に邑人之れを怨みて曰はく、噫、此の皇父、肯て自ら是ならずと爲さんや、其の惡しきことを知す、已れの爲す所を以て是なりと云ふなり、汝何ぞ我れをして役作せしめ、先づ我

れに就きて謀ることも爲さず、我れに移轉の期限をも告げず、我が牆屋を毀ちて園囿を爲し、我れをして農業を務むること能はざらしめ、田をして悉く汚萊と爲らしむるや、民を虐すること此くの如くにして、猶反省することなく、其の言に曰はく、我れ汝を殘害せず、下として上の役に供するは、禮法の當に然るべき所なりと云ふとなり、

皇父孔聖。作都于向。擇三有事。亶侯多藏。不愆遺一老。俾守我王。擇有車馬。以居徂向。

向は地名なり、三有事は三人の卿なり、三卿を置くことは、列國の諸侯に非ざれば爲さざることなり、畿内に封ぜられたるものは、卿二人を置くことなり、然るに三卿を置くは、列國の諸侯に比することにして、僭上と謂ふべし、亶は信なり、愆は心に欲せずして強ひて爲すことなり、一老は一人の老成人といふことなり、言ふころは、皇父の心、己れの爲す所を以て悉く聖なりとし、未だ嘗て賢者を求めて君を輔けず、都を向に作るの時、三人の卿を擇みたり、是れ皆財を貪るの人なれば、益と民を虐げ、聚斂して己れを利せんとするなり、皇父自ら願はずとも、務めて一人

の老成なる者を殘し置きて、我が王の守衛と爲さしむべきに、是れをも爲さず、年久しく位に在る者を率ゐて俱に去り、又車馬ある富有の人を擇み、向に徂きて居らしむとなり、皇父の惡、此くの如しと雖も、其の己れが爲めに謀ることは甚だ明かなり、封邑を擇みて、身を向に作るは、其の身を託すべきか爲めなり、三卿を擇みて多藏を取るは、其の資りて衣食に供すべきが爲めなり、又國中の車馬ある者を擇みて向に居らしめ、一人を留めて王を守らしめざるは、禍亂の將に興らんとするを知りて、王の守衛を去り、以て自ら衛るなり、臣の不忠なる、未だ此れより甚だしきものあらすと謂ふべし、

黽勉從事。不敢告勞。無罪無辜。讒口囂囂。下民之孽。匪降自天。噂沓背憎。職競由人。

囂々は衆多の貌、孽は災害なり、噂沓は相聚りて談話し、口々に重ねて言ふことなり、職は主なり、言ふころは、當時の大夫、黽勉して王事に従ひ、苦勞すと雖も、敢て自ら訴へず、罪なき者と雖も、猶且つ囂々たる讒言の多きに遭ふ、况んや敢て勞を告げんや、苟も勞苦を訴ふれば、其の罪を得ること知るべし、下民の災害、天より降

るに非ず、衆人皆噂々として聚り語り、沓々として重複し、相對するときは諂ひ、相背くときは誇り憎む、此くの如きものは、位に在る人、讒言を信するより、人皆諛ひて之れを爲す、此の災害は天に非ず、人に由るなりと、

悠悠我里。亦孔之瘁。四方有羨。我獨居憂。民莫不逸。我獨不敢休。天命不徹。我不敢傲。我友自逸。

悠悠は憂ふる貌、里海皆病なり、羨は餘なり、徹は道なり、言ふこゝろは、悠悠として我れ病む、亦甚た瘁ましきことなり、四方の人々は、財寶餘りありて、裕かなれども、我れ獨り困窮して、憂に居るなり、四方の民、皆逸樂を享くれども、我れ獨り間暇を得て休息することあらず、王の教命、天の道に従はず、故に諸臣離散する者あれども、我れは我が友の放逸して去るに倣はず、我が友は王の親屬に非ざれば、王を舍つれども、我れは親屬なるが故に、敢て之れに倣はざるなりと、

雨無正

浩浩昊天。不駿其德。降喪饑饉。斬伐四國。旻天疾威。弗慮弗圖。舍彼有罪。既伏其辜。若此無罪。淪胥以鋪。○周宗既滅。靡所止戾。正大夫離居。

莫知我勩。三事大夫。莫肯夙夜。邦君諸侯。莫肯朝夕。庶曰式威。臧出爲惡。○如何昊天。辟言不信。如彼行邁。則靡所臻。凡百君子。各敬爾身。胡不相畏。不畏于天。○戎成不遂。飢成不遂。曾我誓御。憺憺日瘁。凡百君子。莫肯用訊。聽言則答。譖言則退。○哀哉不能言。匪舌是出。維躬是瘁。哿矣能言。巧言如流。俾躬處休。○維曰于仕。孔棘且殆。云不可使。得罪于天子。亦云可使。怨及朋友。○謂爾遷于王都。曰予未有室家。鼠思泣血。無言不疾。昔爾出居。誰從作爾室。

此の詩、古序に大夫刺幽王也とあり、詩の篇に名つくる、皆詩中の文を取れども、此の篇、雨無正の字なし、然るにかく曰ふものは、雨は上より地に下る、猶教令の王より出で、民に下るがごとし、當時王の教令衆多なること、雨の如くなれども、事皆苛酷にして、民を恤むの意なく、政教を爲す所以の道に非ざれば、此の詩を作りて、之れを刺り、名づけて雨無正と曰ふなり、

浩浩昊天。不駿其德。降喪饑饉。斬伐四國。旻天疾威。弗慮弗圖。舍彼有罪。既伏其辜。若此無罪。淪胥以鋪。

浩々は廣大の貌、駿は長なり、穀物の熟せざるを饑と曰ひ、蔬菜の熟せざるを饑と曰ふ、是は冥邈の意、舍は除なり、淪は率なり、胥は相なり、誦は徧なり、言ふことゝるは、浩々たる昊天、其の徳を駿大にせず、王者の徳は、天に繼ぎて下民を長養すべきものなるに、王、天に順ひて之れを行はず、故に天より死喪饑饉の災を降し、四國の人を斬り伐ちて、之れを絶ち滅すなり、天道曼邈なりと雖も、王の又刑罰を用ゐて、天下の民を威し恐れしむるを惡み、其の災、又死喪饑饉より重きものありて、王の身を害せんとすれども、王、少しくも之れを慮らず、圖らず、彼の罪ありて、既に其の事に伏する者を除きて、之れを戮せず、此の罪なき人をして、相率ゐて徧く罪を得せしむとなり、夫れ罪ある者、赦す可らずして、之れを赦せば、則ち惡を爲す者懲るゝ所なく、罪なき者、當に赦すべくして、之れを赦さざれば、則ち善人恃む所なし、王の爲る所、此くの如くなれば、天の怒りに遇ひ、其の國の危亡に陥るや、知るべきなり、

周宗既滅。靡所止戾。正大夫離居。莫知我勸。三事大夫。莫肯朝夕。邦君諸侯。莫肯朝夕。庶曰式臧。覆出爲惡。

戾は定なり、正は長なり、正大夫は六官の長なり、勸は勞なり、三事は三公と爲すの

説あれども、上に正大夫と云ひて、六卿の長を指せば、其中三公を兼ねるを以て、又三事を以て三公と爲すことを得ざるべし、下文又邦君諸侯と云ふを見れば、又三事と大夫とを以て、分ちて二つと爲すべからず、故に三事大夫とは、内に在る卿大夫の總稱にして、下、外に在る邦君諸侯の統稱に對するならん、大夫は丈夫の成名、公卿以下、普通稱すべきなり、言ふことゝるは、周室は天下の宗とする所なり、然るに今其の宗とすべきの道、即ち先王の法、既に滅び、國も亦將に亡びんとし、止まり定まる所なし、長官大夫離散して去り、我れ獨り苦勞すと雖も、我が勞を知る者なし、又卿大夫も早く起き晚く寝ねて、國事を勤むる者なし、國君の諸侯も、背て朝夕公に在りて、王に見え事を爲す者なし、我れ王の過ちを悔い善人を用ゐんことを庶幾ふと雖も、反りて教令を出して、善からざることを爲すなりと、

如何昊天。辟言不信。如彼行邁。則靡所臻。凡百君子。各敬爾身。胡不相畏。不畏于天。

辟は法なり、王の惡を爲すこと、常に樂みて自ら悔ゆることを知らず、故に天を呼びて、之れに告げて曰はく、如何んぞや昊天、身の法度を爲るべき善言を信ぜず、惡

毛

を爲して止まざるや、道を行くの人、到る處を知らず、茫々然として止まり定まる所なきが如し、凡そ百の位に在る人、各汝の身を敬慎し、君臣の禮を正しくすべし、下として上を敬ひ、君として民を憐み、上下互に相畏れざるや、汝自ら畏れざるは、則ち是れ天を畏れざるなりと、

戎成不退。飢成不遂。曾我誓御。僭僭日瘁。凡百君子。莫肯用訊。聽言則答。譖言則退。

戎は兵なり、遂は安なり、誓御は侍御の近臣なり、僭々は憂ふる貌、瘁は病なり、訊は告なり、答の字、漢書賈山の傳、此の詩を引きて對に作るを是とす、爾雅に對は遂なりとあり、遂は進なり、言ふこゝろは、政亂れ國危く、寇賊已に成ると雖も、禦きて之れを退くること能はず、天下の民、饑困に至ると雖も、恤みて之れを安んずること能はず、左右侍御の小臣のみ、僭々として日に病むのみ、凡そ在位の君子、其の危きを知ると雖も、肯て此の事を以て王に告ぐる者なく、王も亦淺近の者を信じ、讒者の言を用ゐ、時ありて淺近の者の言を聞けば、則ち進めて其の人を用ゐ、時ありて又譖毀の言を受くれば、則ち其の人を退くるなり、王の政、此くの如し、國家將に危

詩

亡せんとする所以なり、

哀哉不能言。匪舌是出。維躬是瘁。哿矣能言。巧言如流。俾躬處休。

言ふこゝろは、哀しいかな、我が善言を言ふと能はざるものは、舌より出すことの難きに非ず、舌を動かして、言を出すときは、其の身却つて病ましめらるればなり、世の能く言ふ者は可なるかな、言を巧みにして、水の流れて滞らざるが如く、人の心に忤はざる故、其の身をして休々然安樂の地に居らしむるとなり、

維曰于仕。孔棘且殆。云不可使。得罪于天子。亦云可使。怨及朋友。

于は往なり、棘は急なり、言ふこゝろは、今、朝廷に往きて仕ふと曰はんか、甚だ急進にして且危し、何んとなれば、君の行ひ邪淫にして、爲す所皆不可なるが故なり、我れ正しくして義を守れば、此の人使ふ可らずとありて、天子に罪せられ、我れ若し諂ひて天子の命に従ひ、此の人使ふ可しと云はるとときは、朋友の怨を受くるに及ばん、凡そ朋友は互に善を以て切磋することなるに、我れが行ふ所、不善ならば、朋友必ず之れを怨まん、進退共に不可なるを謂ふなり、

謂爾遷于王都。曰予未有室家。鼠思泣血。無言不疾。昔爾出居。誰從作

毛

詩

爾室。

鼠思は竊に憂ふるなり、凡そ物の畏れて隠るゝもの、鼠に如くはなし、泣は聲なくして涙の出づるなり、血といふものは、涙の目より出づる、猶血の體より出づるがごとくなればなり、言ふこゝろは、大夫去りて朝廷を離るゝ者あり、其の友、朝に在り、之れを呼びて曰はく、爾王都に遷り居るべしと、之れをして朝に還らしめんと欲す、去る者肯かずして曰はく、予れ王都に於て、未だ家室あらずと、是れ心に王政の悪しきを疾み、家室なきを以て辭と爲すなり、其の友、其の己れの言を用ゐざるを以て、又之れを責めて曰はく、我が憂思泣血して、汝の還ることを欲するものは、我れ獨り朝廷に居れば、言ふ所として、小人の爲めに憎まれざることなし、故に汝を思ふなり、汝我が言を距ぎて、室家なしと云ふ、昔爾の從ひて王都に來り、郊外に出で居るの時、誰れか復汝に從ひて、室家を作りしや、本と汝自ら作るなり、今室家なきを以て辭と爲すことなかれとなり、

上篇の末章に、我不敢傲我友自逸と云ひ、此の篇の末章に、友を思ふの事を言ふを見れば、二篇實に一時の事、此の王都に遷らざるの賢者は、即ち上篇の我が友、亦此

毛

詩

の篇の朋友なるべし、

小 旻

旻天疾威。敷于下土。謀猶回遹。何日斯沮。謀臧不從。不臧覆用。我視謀猶。亦孔之邛。○滄滄訛訛。亦孔之哀。謀之其臧。則具是違。謀之不臧。則具是依。我視謀猶。伊于胡底。○我龜既厭。不我告猶。謀夫孔多。是用不集。發言盈庭。誰敢執其咎。如匪行邁謀。是用不得于道。○哀哉爲猶。匪先民是程。匪大猶是經。維邇言是聽。維邇言是爭。如彼築室于道。謀是用不潰于成。○國雖靡止。或聖或否。民雖靡盬。或哲或謀。或肅或艾。如彼泉流。無淪胥以敗。○不敢暴虎。不敢馮河。人知其一。莫知其他。戰戰兢兢。如臨深淵。如履薄冰。

此の詩古序に刺幽王也とあり、小旻とは幽王を指すなり、小旻は猶小明と云ふがごとく、幽王其の明を小にし、其の政事を損して以て亂に至るを謂ふなり、

旻天疾威。敷于下土。謀猶回遹。何日斯沮。謀臧不從。不臧覆用。我視謀猶。亦孔之邛。

毛

詩

敷は布なり、下土は旻天に對して言ふなり、猶は道なり、回は邪なり、遯は辟なり、沮は壞なり、臧は善なり、卬は病なり、言ふこゝろは、旻天の徳は下を憐むなれば、今王刑罰を用ゐて、万民を威し恐れしむることを惡む、王の政教、天下に敷きて、人の知る所なり、王、既に天に惡まるれば、天に順ひて政教を爲し、天の怒りを解くべきに、王の政を爲すや、邪僻のこと多く、旻天の徳に従はざることを甚だし、日ならずして、天下將に敗れんとす、王、之れを悛むるの心なきが故に、謀の善きものは、之れに従はず、其の善からざるものは、反つて之を用ふ、我れ王の政を爲す道を見るに、亦甚だ天下の民を病ましむるものなり、

滄滄誠誠。亦孔之哀。謀之其臧。則具是違。謀之不臧。則具是依。我視謀猶。伊于胡底。

滄々は權勢を専らにするなり、誠々は私の爲めに利を營むなり、于は往なり、底は至なり、言ふこゝろは、小人位に在り、皆滄々と權勢を専らにし、誠々と私利を營み、上の事を思はず、臣下の行ふ所、此くの如く、亦甚だ哀むへし、王、良臣を用ゐず、又職事を廢するが故に、君臣並びに昏亂し、謀の善きものは、君臣共に之れに違ひて、用

ゐず、其の善からざるものは、君臣俱に就きて之れに依る、我れ今君臣謀る所の道を視るに、唯道を行くの人、其の至る所を定めざるが如し、此くの如くなれば、遂に亂に至らんとなり、

我龜既厭。不我告猶。謀夫孔多。是用不集。發言盈庭。誰敢執其咎。如匪行邁謀。是用不得于道。

猶は道なり、集は就なり、匪は彼と通ず、言ふこゝろは、小人徳を尙はずして、好みて龜を灼き、卜を爲して、吉凶を問ふ、然れども、其の卜すること數次に至れば、神靈を瀆すを以て、龜も之れに厭きて、復我れに吉凶を告げず、又朝廷の上、王と共に事を謀るの人、甚だ多けれども、賢者に非ざるが故に、是非を決すること能はずして、其の謀ること終に成らざるなり、諸臣集まりて言を發する者、朝廷に盈つと雖も、其の責任を帶ぶる者なく、事若し成らざれば、誰れか敢て其の咎に任せんや、例へば彼の道を行く者、豫め謀らず、道路に於て謀るが如く、道に於て得る所なきなりと、

哀哉爲猶。匪先民是程。匪大猶是經。維邇言是聽。維邇言是爭。如彼樂室。于道謀。是用不潰于成。

程は法なり、經は常なり、猶は道なり、邇は近なり、濱は遂なり、言ふこゝろは、哀しいかな、幽王政を爲すの道、古人を用ゐて法とするに非ず、大道を用ゐて常とするに非ず、唯其の私意に任ずるのみ、且目前の細務淺近の言にして、國家の要務に非ず、己れの意と同じきものは、之れを聽き用ゐ、其の異なるものは、之れを争ふ、夫れ謀の遠大なるものは、迂濶にして行ひ難きが如く、其の卑近なるものは、切要にして用ゐる易きが如し、故に卑近のものは、小利ありと雖も、其害隨つて至り、遠大なるものは、目前の利を見ずと雖も、終身害なかるべし、聽く者の明かなるに非ざれば、安んぞ能く擇みて之れを用ゐんや、王の爲す所、譬へば彼の家を道の傍に作る者、道を行くの人に就きて、其の爲す所を謀るも、各人の心同じからざれば、此の家の構造遂に成ることを得ざるが如しとなり、

國雖靡止。或聖或否。民雖靡靡。或哲或謀。或肅或艾。如彼泉流。無淪胥以敗。

靡止は小なり、靡は法なり、聖哲謀艾肅は、尙書の洪範に出づ、聖は道明なるを謂ひ、哲は知見の明かなるなり、謀は事を聽きて思慮するの深きなり、肅は恭敬なり、艾

は治まるなり、無は發聲なり、言ふこゝろは、今天下の國小なりと雖も、人或は通聖なる者あり、否らざる者あり、下民法なしと雖も、其の心性、猶哲謀肅艾の者あり、王何ぞ之れを用ゐずして、小人のみを用ゐるや、王の政を爲す、彼の泉水の流れ、滔々と返らざるが如く、知愚賢否を論ぜず、將に相率ゐて敗亡に至らんとするなり、古へより、禍亂の興る、小人に由ると雖も、君子並次に其の禍を蒙る、恐れざるべけんや、

不_レ敢暴虎。不_レ敢馮河。人知其_レ一。莫知其_レ他。戰戰兢兢。如臨深淵。如履薄冰。

暴虎は手を以て虎を搏つこと、馮河は河をかわたりすることなり、戦々は恐なり、兢々は戒なり、言ふこゝろは、手を虚しくして虎を搏ち、舟なくして河を涉れば、其害立ちどころに至る、是れ、人の見易き所なり、故に人敢て之れを爲さず、然れども常人の情、其の一を知りて、其の他を知らず、國を亡し、家を亡すの禍は、明哲の君子に非ざれば、之れを知る者なし、故に我が心の憂、戦々兢々として、深き淵に臨みて、其の墜ちんことを恐れ、薄き氷を履みて、其の陥らんことを恐るゝが如くなり、

と、當時の國勢常人は害なしとすれども、君子は亂の必ず至らんとするを知ればなり、

小宛

宛彼鳴鳩。翰飛戾天。我心憂傷。念昔先人。明發不寐。有懷二人。○人之齊聖。飲酒溫克。彼昏不知。壹醉日富。各敬爾儀。天命不又。○中原有菽。庶民采之。螟蛉有子。蜾蠃負之。教誨爾子。式穀似之。○題彼脊令。載飛載鳴。我日斯邁。而月斯征。夙興夜寐。無忝爾所生。○交交桑扈。率場啄粟。哀我填寡。宜岸宜獄。握粟出卜。自何能穀。○溫溫恭人。如集于木。惴惴小心。如臨于谷。戰戰兢兢。如履薄冰。

此の詩、古序に大夫刺幽王也とあり、今本宣王に作るものあるは誤りなり、

宛彼鳴鳩。翰飛戾天。我心憂傷。念昔先人。明發不寐。有懷二人。

宛は小なる貌、鳴鳩は鶇鶇と注す、山鵲に似て小、尾短く、青黒色、多聲なりと謂ふ、翰は高なり、戾は至なり、明發とは夜より旦に至るまでを謂ふ、先人は文王武王を指すなり、言ふこゝろは、宛然として翅の小なるものは、是れ彼の鳴鳩の鳥なり、而し

て之れをして高く飛びて天に至らしめんとするも、必ず得べからず、猶幽王の小才をして、天下を治め、徳化を施さしめんとするも、得べからざるがごとし、幽王今才智短小にして、將に先祖の業を顛覆せんとす、故に我心之れが爲めに憂ひ傷み、先人文王武王を追思するなり、文武の君業を創め、統を垂れ、此の天下を有つ、今天下將に滅びんとするを以て、之れを懷ふなり、明發不寐の二句は、禮の祭義に之れを引きて、文王之詩也とあるを見れば、詩人先人を思ふと云ふに即きて、舊詩の辭を引きたるなるべし、此の二句は、文王祭りの翌日、夜より旦に至るまで、寐ねずして父母を懷ふことを言へるなり、此の詩に引くものは、先人を念ふこと、猶文王の父母を懷ふがごとしとの意なり、

人之齊聖。飲酒溫克。彼昏不知。壹醉日富。各敬爾儀。天命不又。

齊は正なり、克は勝なり、壹は專壹なり、富は甚なり、言ふこゝろは、中正通知の人は、酒を飲むと雖も、温和にして容れざることなく、能く己れの私心に克ち、其の威儀をも亂さず、然るに彼の昏迷無知の人は、酒を飲めば、醉ふことに専らにして、日に甚だし、今汝君臣、各汝の威儀を慎め、天命は去りて再び來らざるものなりと、酒を

中原有菽。庶民采之。螟蛉有子。蜾蠃負之。教誨爾子。式穀似之。

中原は原中なり、菽は大豆なり、螟蛉は桑に居る青き小蟲なり、蜾蠃は細腰蜂、和名
むかばちと曰ふ、螟蛉は桑虫の子を取りて、己れの巢に入れ、七日の間に化して蜂
の子と爲すと云ふ、式は用なり、穀は善なり、言ふこゝろは、人君の位常なし、原中に
大豆ありて、主なければ、民の力めて之れを采る者、之れを食ふことを得べし、桑虫
子ありと雖も、蜾蠃負うて之れを養ひ、以て己れの子となす、若し聖徳ある者、能く
爾の万民を誨ふるに、善意を以てせば、民亦化して之れが子たらん、幽王苟も其民
を養ふこと能はざれば、亦將に徳ある者、之れを養ひて己れの子と爲すべきなり、

題彼脊令。載飛載鳴。我日斯邁。而月斯征。夙興夜寐。無忝爾所生。

題は視なり、脊令は鳥の名、解棠棣の篇に見ゆ、我は我が王なり、邁、征、皆行くなり、忝
は辱なり、言ふこゝろは、彼の脊令の鳥を視れば、或は飛ひ、或は鳴く、未だ嘗て止ま
り息まず、人の世に處る、其れ自ら舍つべけんや、我が王も亦日に朝を視て、群臣と
政事を決斷し、月々に朔を視て、行ふ所あるべし、朝は早く起き、夜は晩く寐ぬて、庶

交々桑扈。率場啄粟。哀我填寡。宜岸宜獄。握粟出卜。自何能穀。

くは汝の父母を忝かしむること勿れとなり、
交々は小なる貌、桑扈は鳥の名、和名いかるが、又まめまはしと曰ふ、填は盡なり、岸
は訟なり、自は従なり、穀は生なり、言ふこゝろは、交々として小なる桑扈の鳥、自ら
活きんことを求めば、當に肉を食ふべし、今既に肉なければ、場圃に率ひ來り、粟を
啄み、其の天性を失ふ、此れを以て活きんとするも、必ず得べからず、是れ民の貧し
きに喩ふるなり、哀しいかな、我が窮盡して、財寡きの民、濫に牢獄の中に繋がる、牢
獄は我が繋がるべき所に非ず、然るに上に在りては、宜しく此の訟あるべし、宜し
く此の獄あるべしと謂ひ、之れを憐み恤むの心なきを以て、身を救ふに由なく、聊
か一握の粟を以て、出で、卜者に就き、其の勝負を問ふ、卜者の許に行くにも、錢も
なく、僅に神を祀る所の精米を持ち行くほどの貧なれば、此の末、何に従ひて生き
ながらへんとなり、

溫溫恭人。如集于木。惴惴小心。如臨于谷。戰戰兢兢。如履薄冰。

温々は和柔の貌、惴々は恐るゝ貌なり、幽王の時、政事の暴虐なるが爲めに、在朝の

臣皆危ぶみ懼れて自ら安んぜず言ふこゝろは温々たる恭謹の人と雖も常に禍を免れざるの憂を懷き木の上に居りて將に顛れんことを恐るゝが如く又小心惴々として深谷に臨み將に墜ちんことを恐るゝが如く戰々競々として薄き氷を履み將に陥らんことを恐るゝが如し賢人君子衰亂の時に當り恐懼するの甚だしきを言ふなり

小弁

弁彼鷩斯歸飛提提民莫不穀我獨于罹何辜于天我罪伊何心之憂矣云如之何○蹶蹶周道鞠爲茂草我心憂傷惄焉如擣假寐永嘆維憂用老心之憂矣疾如疾首○維桑與梓必恭敬止靡瞻匪父靡依匪母不屬于毛不離于裏天之生我我辰安在○苑彼柳斯鳴啁嚶嚶有濯者淵萑葦淠淠譬彼舟流不知所屆心之憂矣不遑假寐○鹿斯之奔維足伎伎雉之朝雝尙求其雌譬彼壞木疾用無枝心之憂矣寧莫之知○相彼投兔尙或先之行有死人尙或瑾之君子秉心維其忍之心之憂矣涕既隕之○君子信讒如或隲之君子不惠不舒究之伐木

毛 詩

毛

椅矣析薪樵矣舍彼有罪予之佗矣○莫高匪山莫浚匪泉君子無易由言耳屬于垣無逝我梁無發我笱我躬不閱遑恤我後

此の詩古序に刺幽王也とあり幽王申后を娶りて太子宜臼を生む後褒姒を得て其の色に惑ふ褒姒伯服を生み讒言して申后を黜け宜臼を逐ふ宜臼の傅其の罪なきを知り其の逐はるゝを閔み此の詩を作りて王を刺るなり

弁彼鷩斯歸飛提提民莫不穀我獨于罹何辜于天我罪伊何心之憂矣云如之何

弁は弁然翼を拊つことなり鷩は鳥の名鳥に似て反哺せざるものなり斯は助辭なり提々は群がり飛ぶ貌罹は憂なり言ふこゝろは鷩は弁然と翅を拊ち提々として群がり飛ぶ各其の林に歸り曾て巢を顧み反哺することを思はず人の子の親を忘るゝ亦猶此のごとし凡そ人皆親あり故に善からざるることなし而して我れ獨り罪を父母に得是れ天より辜を得るなり我れ何の罪あることを知らず我が罪是れ何ぞ心の憂ひ之れを如何んせん蓋し自ら己れの罪あるを知らざるを怨む身自ら罪なしと爲して天を怨むに非ざるなり

詩

蹶蹶周道。鞠爲茂草。我心憂傷。惄焉如擣。假寐永嘆。維憂用老。心之憂矣。疾如疾首。

毛 詩

蹶々は平易なり、周道は周室の通道なり、鞠は窮なり、道ありて行かざれば、窮り塞がりて草を生ずるなり、惄は思なり、擣は心疾なり、假寐は衣冠を脱かずして寐ぬるを謂ふ、疾は猶病のごとし、疾首は頭痛なり、言ふこゝろは、蹶々として平かなる周室の大道、今や窮り塞りて、茂れる草を生じたりと、以て幽王褒姒の讒を信じ、徳政四方に通ぜざるに喩ふ、夫れ王の太子を逐ふは、褒姒の讒を信すればなり、我が心之れが爲め憂ひ傷み、思うて安からず、物ありて心を擣くが如く、疾ましきなり、又衣冠を脱かずして假寐する中にも、永く此の事を歎くが故に、憂ひて衰老に至るなり、我が心の愛ひ、其の疾しきこと、人の頭を疾みて惱むが如く、少しも忘るゝひまなしとなり、

維桑與梓。必恭敬止。靡瞻匪父。靡依匪母。不属于手。不離于裏。天之生我。我辰安在。

毛は外に在り、父を言ふ、裏は内に在り、母を言ふ、辰は時なり、言ふこゝろは、桑と梓

毛

詩

と父兄の樹えしものなれば、尙或は之れを敬ふ、况んや父母をや、而して父母に容れられず、故に曰はく、人其の父を瞻て法則を取らざるものあらんや、其の母に依りて、長大ならざるものあらんや、我れ獨り父の皮膚の氣を受けざるか、母の胎内に處らざりしか、何に由りて父母の恩愛を受くることを得ざるや、我れ生れて難に遭ふこと此くの如し、天の我れを生ずる、豈値ふ所の時よからざるに由れるかとなり、

菀彼柳斯。鳴啁嘒嘒。有漙者淵。萑葦淠淠。譬彼舟流。不知所届。心之憂矣。不遑假寐。

柳は蟬なり、嘒々は聲なり、漙は深き貌、淠々は衆なり、届は至なり、言ふこゝろは、菀然として茂れるものは柳なり、其の上には鳴く蟬の嘒々たるあり、漙然として深きものは淵なり、其の傍には萑葦の草淠然として茂れり、物皆依る所あり、然るに我れ獨り其の依る所を失ひ、哀み號ぶ所なく、又故郷を離れて根を託するの地なく、萑葦鳴柳にも如かざるなり、之れを譬ふるに、繫がざるの舟、水の流れに隨ひて、至る所を知らざるが如し、蓋し此の時、太子已に申に奔りて、王の怒り未だ息まず、

故に前には假寐することありたれども、今は復假寐するの違もあらざるなり。
鹿斯之奔。維足伎伎。雉之朝雉。尙求其雌。譬彼壞木。疾用無枝。心之憂
矣。寧莫之知。

毛

詩

斯は助辭なり、伎々は舒かなる貌、壞は癩なり、木の瘤腫あるなり、言ふこゝろは、鹿の奔る、其の勢宜しく疾かるべし、今乃ち伎々として徐かに留まるものは、牝鹿の來るを待ちて、俱に行かんとするなり、雄雉の朝に雉くも、猶其の雌雉を求めて、並び飛はんことを欲するが爲めなり、鹿に於けるも、雉に於けるも、猶其の配偶を得て俱に遊ぶに非ずや、今太子の逐はるゝや、其の妃匹を棄て、之れと俱に去ることを得ず、是れ鳥獸にも如かざるなり、彼の内傷あるの木、疾あるが爲めに枝を生ぜざるか如く、太子配偶なきが故に、子を生むことを得ず、故に我が心之れを憂ふれども、曾て之れを知る者なきなりと、
相彼投兔。尙或先之。行有死人。尙或瑾之。君子秉心。維其忍之。心之憂矣。涕既隕之。

相は視なり、瑾は埋なり、君子は幽王を指す、言ふこゝろは、彼の兔の逐はれ、窮迫し

毛

詩

て人に投ずるを見るに、人尙之れを憐み、其の之れを取らんとする者の未だ至らざるに先きだち、助けて之れを脱れしむ、又路に死したる人あり、知りたる人にも非ざれども、人尙或は收めて之れを埋む、人情の忍びざること此くの如し、然るに幽王は讒言を信じて、申后を黜け、太子宜臼を逐ひ、其の心を乗る、何ぞ忍べるの甚だしき、夫の兔を助け、死人を埋むる人にも如かざるなり、我れをして之れを憂ひしめ、涕涙の隕つるを知らざるなりと、

君子信讒。如或隳之。君子不惠。不舒究之。伐木掎矣。析薪柅矣。舍彼有罪。予之佗矣。

讎とは主人の飲みたる爵を客飲みて又返すことなり、惠は愛なり、究は謀なり、掎は繩を木の頭に繫ぎて、之れを引くなり、柅は薪を析くに、其の木理に順ふなり、佗は加なり、言ふこゝろは、幽王の讒言を信ずること、酒を飲むに献酬して受けざることなきが如し、而して慈惠の心なきが故に、讒言を聞けば、舒かに之れを謀らずして、速に之れを處するなり、彼の木を伐る者を見るに、必ず其の頭を繫ぎて、之れを引き、妄りに之れを踏すことを欲せず、又薪を析く者を見るに、必ず其の木理を

觀て其の理に隨ひ、漸く之れを析き、妄りに之れを挫くことを欲せず、今幽王其の子を遇すること、理に循はず、其の意、木を伐り薪を析くの人にも如かず、彼の讒言を縱まゝにして、罪ある褒姒を舍き、罪を我が太子に加ふ、則ち是れ妄りに人に罪を加ふるなりと、

莫高匪山。莫浚匪泉。君子無易由言。耳屬于垣。無逝我梁。無發我筭。我躬不閱。遑恤我後。

浚は深なり、由は用なり、言ふところは高くして山に非ざるはなく、深くして泉に非ざるはなし、山は高く、泉は深し、而して能く之れを究め測る者なし、人の心の險はしきこと、猶夫の山川のごとし、君子苟も其の言を輕易にすること勿れ、人將に耳を壁に屬して、其の言を聞き、其の意を迎へ、讒言を其の間に構ふることあらん、無逝我梁以下四句は、谷風の詩と同じ、但梁に逝き、筭を發くは、已に成るの功を毀つに喩ふ、蓋し太子の立つや久し、彼れ亦必ず知る所の人あらん、亦必ず樹つる所の功績あらん、此の事、宗廟社稷に關するものにして、一己の爲めにするものに非ず、故に之れを墮すことなからんを望むなり、此の時に當りて、一身を保たざれば

詩

毛

も、猶王の言を慎むを欲し、猶王の遠く慮らんことを望む、此れ性情の厚きにして、其の見る所大なり、故に聖人之れを取るなり、

巧言

悠悠昊天。曰父母且無罪無辜。亂如此。憯昊天已威。予慎無罪。昊天泰憯。予慎無辜。○亂之初生。僭始既涵。亂之又生。君子信讒。君子如怒。亂庶遄沮。君子如祉。亂庶遄已。○君子屢盟。亂是用長。君子信盜。亂是用暴。盜言孔甘。亂是用餒。匪其止共。維王之邛。○奕奕寢廟。君子作之。秩秩大猷。聖人莫之。他人有心。予忖度之。躍躍毚兔。遇犬獲之。○荏染柔木。君子樹之。往來行言。心焉數之。蛇蛇碩言。出自口矣。巧言如簧。顏之厚矣。○彼何人斯。居河之麋。無拳無勇。職爲亂階。既微且樞。爾勇伊何。爲猶將多。爾居徒幾何。

此の詩、古序に刺幽王也とあり、大夫亂世に遇ひ、讒言を蒙ることを憂ひて作れるなり、

悠悠昊天。曰父母且無罪無辜。亂如此。憯昊天已威。予慎無罪。昊天泰

毛

詩

憚。予慎無辜。

悠々は思なり、且は諛辭なり、憚は大なり、威は畏なり、慎は誠なり、言ふこゝろは、大
夫諛言に遇ひ、天を呼びて曰はく、悠々として我れ思ふ、昊天よ、王、初め民の父母た
らんと言ひ、自ら許して善政を行はんと言はれしに、今罪なき多くの人を刑殺し
て、政事の亂れたること、此くの如く大なり、又昊天を呼びて曰はく、王、甚だ畏るべ
し、予れ誠に罪なくして罪せらる、王の虐甚だ大なり、予れ誠に罪なくして罪せら
るとなり、

亂之初生。僭始既涵。亂之又生。君子信讒。君子如怒。亂庶遄沮。君子如
祉。亂庶遄已。

僭は諛の借字なり、涵は容なり、遄は疾なり、沮は止なり、祉は福なり、言ふこゝろは、
亂の初めて生ずる所以のものは、事の始めに、讒人の言ふことを悉く受け入るゝ
が故に、讒人は王の眞偽を察せざることを知り、次第に讒言を進むるなり、而して
亂の生ずること益、大なるものは、在朝の君子、又讒言を信ずればなり、王、已に讒言
を察せず、故に讒言、自ら入ることを得、群臣、又之れを信ず、是を以て罪なき者を殺

毛

詩

毛

君子屢盟。亂是用長。君子信盜。亂是用暴。盜言孔甘。亂是用餒。匪其止
共。維王之叩。

盜は讒者を憎みて言ふ、磔石父を指すなるべし、餒は進なり、共の字、韓詩外傳引き
て恭に作るを是とす、叩は勞なり、言ふこゝろは、君子屢、盟ふ、亂是の故に滋々長ず
るなり、盟とは凡そ國に疑ふことあれば、會同して牲を殺し血を献り、神明に告げ
て誓約することなり、蓋し盟は君臣相疑ふより生ずるものなり、君臣相疑ひ、其の
實を察すること能はずして、唯盟誓を爲すは、亂を長ずる所以なり、君子又險盜讒
人の言を信ず、其の亂是を以て暴し、然る所以のものは、此の險盜の人、其の言甚だ
甘く、人をして信じて已まざらしむ、其の亂是を以て日に進むなり、小人好みて讒
言を爲すもの、恭敬を爲すに止まらず、却て王をして勞せしむとなり、
食の甘きもの、人をして嗜みて厭はざらしめ、言の美なるもの、人をして聽きて倦

詩

まごらしむ、故に美言を以て甘と爲すなり、
奕奕寢廟。君子作之。秩秩大猷。聖人莫之。他人有心。予忖度之。躍躍龜兔。遇犬獲之。

毛

奕々は大なる貌、前に在るを廟と曰ひ、後に在るを寢と曰ふ、廟には神主を藏めて、
四時に之れを祀り、寢には先人の衣冠九杖を藏め、時の新物を薦むるなり、秩々は
知に進むなり、莫は謀なり、蹶兔は狡兔と注せり、狡兔は兔の駿なるものなり、言ふ
こゝろは、奕々として廣大なる寢廟は、君子の能く之れを制作する所、秩々として
知に進むの大道は、聖徳の人能く謀りて之れを立つ、彼の他人にして讒佞の心あ
るものは、我れ能く忖度して之れを知る、躍々として跳り走るの狡兔は、捕へ難き
ものなれども、一たびかり犬に遇へば、則ち之れが爲めに獲られて、禍を受くべし
となり、

詩

荏染草木。君子樹之。往來行言。心焉數之。蛇蛇碩言。出自口矣。巧言如
簧。顔之厚矣。

荏染は柔なる意なり、柔木は椅桐梓漆の類、器に作るべき木を謂ふ、行言は行ふべ

毛

きの言なり、數は計なり、蛇々は淺き意、孟子の訕々と同じ、言辭正しからず、人を欺
きて自ら夸る貌なり、碩は大なり、簧は笙の舌なり、言ふこゝろは、荏染たる柔木は、
良材にして、君子の樹うる所なり、宜しく之れを封殖し、牛羊斧斤の患なからしむ
べし、是れ太子宜曰柔弱にして、自立すること能はざれば、王宜しく之れを愛護し、
讒言を聽きて、之れを傷害すること勿るべきに比するなり、按ずるに古語に適子
を以て樹子と爲す、樹の字亦玩味すべし、夫の往くも行ふべく、來るも行ふべき善
言は、宜しく心に計へて之れを識すべし、小人は則ち然らず、蛇々然たる誇大の言、
徒らに口より出で、都べて心に由らず、巧に言語を爲り、虚辭を構へて、人を欺き、
笙中の簧聲相應和するが如く、人を見て慙愧することを知らず、其の顔ばせの厚
きこと甚しきなりと、

詩

太子宜曰申に奔る、彼れ乃ち申を伐ち、太子を殺すを以て事を爲し、口に任せて大
言し、王師の至る所、必ず敢て我れに逆ぶ者なしと爲し、其の巧みに言ふ所、總べて
中心に根せず、笙中の簧の如く、氣に隨ひて轉動し、自ら其の差づ可きことを知ら
ず、蓋し人の臣子と爲り、日に骨肉を離間するを以て事と爲すは、誠に恩に負くの

甚だしき者なり、尙敢て覲然として人に面目を呈せんや、所謂る顔の厚きなり、
彼何人斯。居河之麋。無拳無勇。職爲亂階。既微且廋。爾勇伊何。爲猶孔
多。爾居徒幾何。

毛

何人とは識らずして問ふの辭、此れ已に我れを讒する者なれば、識らざるに非ず、
然るに何人といふものは、賤みて之れを惡むの辭なり、斯は語辭なり、麋は涸に同
じ、水と草とのあはひを謂ふ、拳は力なり、職は主なり、疇瘍を微と曰ふ、疇はひざは
ぎなり、瘍はかさなり、廋は足の腫るゝ疾なり、猶は謀なり、將は大なり、言ふことろ
は、彼れ何人ぞや、河のほとりに居り、既に拳力なく、又勁勇なし、然るに主として禍
亂の起る階梯を爲す、此の人や、下濕の地に居り、微廋の疾あり、爾假令ひ勇ありと
も、誠に能くする所なし、而して此の讒佞の謀を爲すこと大に多し、是れ必ず爾を
助くる者あらん、汝と與に聚り居る所の徒衆幾何ありや、然れども甚だ多きこと
あるべからざれば、王に於て此の人を退けんとならば、容易なるべしとの意なり、
此の詩、悠々昊天を以て端を起し、第五章の巧言を以て、篇の名と爲す、蓋し讒人の
言巧なるに非ざれば、人に入らず、詩を作る者の深く惡む所なり、大夫の讒を蒙る

詩

者、獨り己れの讒に遇ふを憂ふるのみならず、讒言の政を亂るを傷む、故に屢亂を
言ひて、深く君子の察して之れを止めんことを望むなり、

何人斯

彼何人斯。其心孔艱。胡逝我梁。不入我門。伊誰云從。維暴之云。○二人
從行。誰爲此禍。胡逝我梁。不入唁我。始者不如今云。不我可。○彼何人
斯。胡逝我陳。我聞其聲。不見其身。不愧于人。不畏于天。○彼何人斯。其
爲飄風。胡不自北。胡不自南。胡逝我梁。祗攪我心。○爾之安行。亦不違
舍。爾之亟行。遑脂爾車。壹者之來。云何其盱。○爾還而入。我心易也。還
而不入。否難知也。壹者之來。俾我祗也。○伯氏吹篪。仲氏吹箎。及爾如
貫。諒不我知。出此三物。以詛爾斯。○爲鬼爲蜮。則不可得。有覲面目。視
人罔極。作此好歌。以極反側。

毛

詩

此の詩、古序に蘇公刺暴公也とあり、周の時、暴公蘇公といふ畿内の諸侯二人あり、
暴公王の卿士と爲りて、蘇公を讒す、故に蘇公是の詩を作りて、之れを絶つなりと
云ふ。

彼何人斯。其心孔艱。胡逝我梁。不入我門。伊誰云從。維暴之云。

孔は甚なり、艱は難なり、我は蘇公自ら言ふなり、梁は橋なり、蘇公の門外に橋ありなり、云は言なり、此の章第三章と、何人とは、皆蘇公の友、新に暴公に従ふ者を指して言ふなり、言ふこゝろは、彼れ何人ぞや、其の心を持つこと甚だ知り難し、今我が國に過ぎ、何の故に我が門前の橋に之きて、我が門に入らざるや、是れ誰れの云ふ所に従ひてかく疎闊なるや、是必ず暴公の言に従ひしならんとなり、此の人、蘇公の友たりしに、今暴公に従ふを以て、蘇公の門を過ぎ、入りて見ざらんとすれば、舊誼を忘るゝに似たり、又入りて見んとすれば、則ち暴公の意に拂らんことを恐る、故に見ざるの間に遅回せしを以てなり、

二人從行。誰爲此禍。胡逝我梁。不入唁我。始者不如今云。不我可。

二人は暴公と其の友とを謂ふなり、言ふこゝろは、暴公其の友と二人相従ひて行き、誰れか王に見えて、我が此の禍を爲し、王をして我れを責めしむるや、汝暴公に従ひて行く、若し暴公と共に我れを讒せざれば、何の故に我が門外の橋に近づくも、我が門に入りて我れを弔はざるや、汝初め我れと友たるとき、我れに於て甚だ

厚し、今我れを以て可と爲さるるが如くならず、我れ汝に何の不可なる行ひありて、汝更に我れに薄くするやとなり、

彼何人斯。胡逝我陳。我聞其聲。不見其身。不愧于人。不畏于天。

陳は堂より門に至るまでの道なり、言ふこゝろは、彼れ何人ぞや、汝若し我れを讒せざれば、何の故に我が陳に逝き、我れをして其の音聲を聞くことを得しむるも、其の身を見ることが得しめざるや、汝我れを讒するが故に、慙ぢて來り見ざるや、是れ其の心、人に愧ぢざらんや、天を畏れざらんやとなり、

天下豈聲を聞きて身を見ざるものあらんや、聲を聞くとは、蓋し門を過ぎ、問ひを通じ語を留めて、見ることが請はざるなり、

彼何人斯。其爲飄風。胡不自北。胡不自南。胡逝我梁。祇攪我心。

飄風は暴かに起る風なり、祇は適なり、攪は亂なり、言ふこゝろは、彼れ何人ぞや、行き來りて去る、疾きこと飄風の如し、入りて我れを見ることが欲せざれば、何ぞ我が國の南に従ひ、或は我が國の北に従ひて遠ざからざるや、何ぞ近く我が門外の橋に逝きて、適に我が心を亂り、我れをして汝を疑はしむるやとなり、

爾之安行。亦不違舍。爾之亟行。違脂爾車。壹者之來。云何其盱。

亟は疾なり、盱は病なり、言ふこゝろは、汝屢、我が國を過ぐれども、我が家に來らず、我れ汝を以て徐かに行くこと云はんか、亦汝の暇ありて息ひ止ることを見ず、汝を以て急疾に行くものと云はんか、汝間暇にして汝の車に脂さすの違あり、汝の入りて我れを見ざるは、我が疑ふ所なり、向きの日に來り見るとも、我れ汝に於て何の病ましきことあらんとなり、壹とは曇日といふ意なり、

爾還而入。我心易也。還而不入。否難知也。壹者之來。俾我祗也。

易は説なり、否は不なり、祗は病なり、言ふこゝろは、汝行くときに入らざれば、還るときに入りて我れを見ば、我が心説はん、然るに還るときにも入らざるを見れば、汝の心知り難きに非ず、向きの日來りしも、我れを見ることを爲さざるは、是れ我れを説して病ましめしが故ならんとなり、

伯氏吹塤。仲氏吹箎。及爾如貫。諒不我知。出此三物。以詛爾斯。

伯仲は兄弟のことなり、塤箎は樂器の名、塤は土にて作る、大きき鶉鳥の卵の如く、口尖り底平かにして、六の孔あり、手に居えて吹くなり、箎は八つの孔ある横笛な

り、及は與なり、諒は信なり、三物とは豕雞犬なり、詛は神に告げて誓を爲すなり、言ふこゝろは、我れ向きに汝と友たり、其の恩、當に兄弟の如くなるべく、其の情、亦當に塤箎の相和するが如くなるべく、怨み惡むことある可らず、何んとなれば、我れと汝と共に王臣と爲り、細を以て物を貫くが如し、宜しく相應じ相和して、隔つる心なかるべし、汝誠に我れを説せずとならば、則ち此の犬豕雞の三物を出して、神に盟ひ、我れをして、疑はざらしむべきなり、

爲鬼爲蜮。則不可得。有覩面目。視人罔極。作此好歌。以極反側。

蜮は短狐と曰ひ、水中に在りて砂を含み、人の影を射る虫なり、覩は向ひて人を見る貌なり、言ふこゝろは、汝若し鬼たり蜮たらば、則ち誠に得て見る可らず、又我れと盟盟す可らず、然れども今汝覩たる面目あり、乃ち是れ人なり、終に相見るの期なからんや、今來りて見ざるものは、心に愧づる所あり、故に面を見ることを欲せざるならん、必ず相見ることあらば、彼れ將に地の自ら容るゝ所なからんとす、故に我れ此の八章の善歌を作り、爾が反側之情を極め、其の情を得んことを欲するなりと、

巷伯

萋兮斐兮。成是貝錦。彼譖人者。亦已大甚。○哆兮侈兮。成是南箕。彼譖人者。誰適與謀。○緝緝翩翩。謀欲譖人。慎爾言也。謂爾不信。○捷捷幡幡。謀欲譖言。豈不爾受。既其女遷。○驕人好好。勞人草草。蒼天蒼天。視彼譖人。矜此勞人。○彼譖人者。誰適與謀。取彼譖人。投畀豺虎。豺虎不食。投畀有北。有北不受。投畀有昊。○楊園之道。猗于畝丘。寺人孟子。作爲此詩。凡百君子。敬而聽之。

此の詩、古序に巷伯刺幽王也とあり、巷伯は官の名、宮中の事を掌る者なり、

萋兮斐兮。成是貝錦。彼譖人者。亦已大甚。

萋斐は文章相錯はるなり、分は語辭なり、貝は水中の介虫、其の文、錦の如し、貝錦とは、錦の文章貝の如きを謂ふ、言ふこゝろは、貝の文、錦の如く、本自然なるものなり、今衆采を集め、萋然斐然として文章を錯へ、是の貝文を成して、其の錦を爲らしむと、即ち譖人我が多くの過ちを集めて、之れを構成し、過惡をして相積みて是の罪を爲さしむるに比するなり、彼の人を譖する者、徒らに人の罪を責むるのみならず、

毛

詩

ず、重き罪を醸し成すこと甚しとなり、

哆兮侈兮。成是南箕。彼譖人者。誰適與謀。

哆侈皆張大の意なり、侈は物によりて大なるの名なり、箕は二十八宿の中、東方七宿の箕星なり、此の星、南方に見はるゝを以て正體と爲す、故に南箕と曰ふなり、其の形、箕の如く、腫せばくして、舌廣し、故に口舌を以て人の小なる過失を張大にするに比す、彼の人を譖する者、何人を主として此くの如く巧みに人を謀るやとたり、

緝緝翩翩。謀欲譖人。慎爾言也。謂爾不信。

緝は言の借字たるべし、説文に言、聾語也とあり、言の字、口に从ひ、耳に从ふ、耳に附きて語ることなり、翩翩は往來の貌、慎は誠なり、言ふこゝろは、譖人相與に謀りて人を譖せんと欲して曰はく、爾の言ふ所を誠にせば、恐らくは、王爾の言を信ぜずして受けざらんと、蓋し譖人の言ふ所誠ならず、故に巧みに信ぜらるゝなり、若し誠實に過ぐるときは、則ち巧みならず、故に、却りて信ぜられざればなり、

捷捷幡幡。謀欲譖言。豈不爾受。既其女遷。

毛

詩

捷々は多言の貌、幡々は猶闘々のごとし、皆讒言の形容を言ふなり、言ふこゝろは、
讒人相戒めて曰はく、爾若し爾の心を誠にせずして、王の倉卒の間に言はば、一旦
は之れを受けらるゝとも、終には爾の不實なることを知り、或は將に汝を捨て、
他の人に遷らんとなり、

驕人好好。勞人草草。蒼天蒼天。視彼驕人。矜此勞人。

好々は喜ぶなり、草々は心を勞らすなり、讒人詞を巧みにして、王に信用せらるゝ
ときは、心驕りて好々と喜び、又讒に遇ひたる人は、草々として心を勞らすなり、故
に驕人勞人と曰ひ、天を呼びて訴へて曰はく、蒼天蒼天、彼の驕人を視るにつけて
も、此の勞人を矜めよとなり、

彼譖人者。誰適與謀。取彼譖人。投畀豺虎。豺虎不食。投畀有北。有北不
受。投畀有昊。

投は棄なり、豺は狼の類、和名やまいぬと曰ふ、人を貪り食ふこと狼より甚だし、有
北は北方寒涼の地、草木の生ぜざる處を謂ふ、有昊は昊天なり、言ふこゝろは、彼の
人を譖する者、誰れを主として、謀りごとを爲すや、信に惡むべきなり、彼の譖人を

取りて、豺虎に投て畀へん、豺虎も惡みて食はざれば、北方不毛の地に投て畀へん、
北方の地も、亦惡みて受けざれば、即ち之れを如何せん、之れを昊天に付すること
あるのみと、物皆天の生ずる所なれば、天は之れを避くるの理なし、故に昊天に止
まるなり、

楊園之道。猗于畝丘。寺人孟子。作爲此詩。凡百君子。敬而聽之。

楊園は園の名、猗は加なり、畝丘は丘の名、寺人は即ち巷伯なり、言ふこゝろは、楊園
に行かんとする者は、先づ畝丘を歴て行くべし、讒人の大臣を譖せんとするは、先
づ近小の者より始む、寺人字は孟子と曰ふ者、起ちて此の詩を爲るに由り、在位の
諸君子、敬みて之れを聽けど、豫め其の害を防がんことを欲するなり、而して憚る
ことなく、我が字を言ふものは、己れ既に讒に遇ひ、罪定まりて將に刑せられんと
するに由りてなり、

谷風

習習谷風。維風及雨。將恐將懼。維予與女。將安將樂。女轉棄予。○習習
谷風。維風及頽。將恐將懼。實予于懷。將安將樂。棄予如遺。○習習谷風

維山崔嵬無神不死無木不萎忘我大德思我小怨

毛

此れより以下、信南山の詩に至るまで十篇を谷風之什と曰ふ、此の詩古序に刺幽王也とあり、幽王の時、風俗薄くして、恩を棄て故きを忘れ、天下に朋友の道なし、是れ王の政教其の宜しきを得ざるに由る、故に王を刺るなり、

習習谷風維風及雨將恐將懼維予與女將安將樂女轉棄予

習々は和調の貌、谷風は東風なり、將は且なり、習の言たる俗なり、谷の言たる穀なり、穀は生なり、東を君の方とす、風は君より始まるなり、言ふこゝろは、習々と和ける東風あり、能く又雨ふれば、以て万物を潤すの功を成すべし、亦猶朋友の相須ちて切磋し、其の徳を成すべきがごとし、朋友の相須つこと、既に風と雨との如くなれば、困窮の時も、利達の時も、共に相棄つ可らず、然るに患難恐懼せし時に當りては、則ち惟予れと女と二人にて其の愛ひを同じくし、纔に安樂を得るの日に及びては、女何ぞ反りて我れを棄つるや、朋友の義、豈此くの如きものならんやとなり、
習習谷風維風及頽將恐將懼實予于懷將安將樂棄予如遺
頽は風力薄くして上ること能はざるを謂ふ、谷風扶けて之れを上ぐるなり、實

詩

毛

は置なり、言ふこゝろは、谷風の頽を扶けて上る、猶朋友の相須ち相扶け、道德をして益進ましむるがごとし、徳既に朋に依りて成れば、則ち窮達相棄つ可らず、然るに恐懼患難あるの時は、則ち我れを親愛すること、懷ろに入れ置くが如く、今既に安樂の時に至れば、我れを棄つること、人の道路に物を遺れて復顧みざるが如しとなり、

習習谷風維山崔嵬無草不死無木不萎忘我大德思我小怨

崔嵬は山の頂なり、言ふこゝろは、東風の物に及ぶこと山の頂と雖も至らざる所なし、則ち風の徳たる大なり、然れども、一草一木、或は萎み枯れざるものなし、是れ小しく怨む所なり、朋友の間と雖も、豈些少の咎むべきことなからんや、然らば昔し我が切磋せし所の大徳を忘れて、少しの怨みを心に掛くるとあらんやとなり、

蓼 莪

蓼蓼者莪匪莪伊蒿哀哀父母生我劬勞○蓼蓼者莪匪莪伊蔚哀哀父母生我勞瘁○餅之罄矣維鼻之耻鮮民之生不如死之久矣無父何怙無母何恃出則銜恤入則靡至○父兮生我母兮鞠我拊我畜我

長我育我。願我復我。出入腹我。欲報之德。昊天罔極。○南山烈烈。飄風發發。民莫不穀。我獨何害。○南山律律。飄風弗弗。民莫不穀。我獨不卒。

此の詩古序に刺幽王也とあり、幽王の時天下の人征役に勞れ、孝子役に在り、父母病ひありて、將に死せんとすれども、歸りて侍養することを得ざるなり、

蓼蓼者莪。匪莪伊蒿。哀哀父母。生我劬勞。

蓼々は長大の貌、莪蒿共に草の各なり、莪の始めて生ずる、香美にして食ふべし、秋に至り、高大なれば、則ち變じて蒿となり、粗惡にして食ふ可からず、言ふこゝろは、蓼々と生長せしものは、香美の莪に非ずして蒿なり、子の初めて生るゝ、猶是れ美材なりと雖も、其の長大なるに至りては、乃ち是れ無用の子たるが如し、哀々と哀しむべきの甚だしきは、父母我れを生みて劬勞せしも、其の身を終らんとするに臨み、之れを養ひ遂ぐることを能はざりしなりと、

蓼蓼者莪。匪莪維蔚。哀哀父母。生我勞瘁。

蔚は草の名、和名ちとこよもぎと曰ふ、瘁は病なり、詩の意、前の章に同じ、

餅之馨矣。維嚶之耻。鮮民之生。不如死之久矣。無父何怙。無母何恃。出

則銜恤。入則靡至。

餅は小にして、嚶は大なり、共に酒を容るゝ器なり、馨は盡なり、鮮は寡なり、孤寡の意となす、恤は憂なり、靡は無なり、言ふこゝろは、酒を酌む者は、當に多く嚶に酌み、少しく餅に酌むべし、小なる餅をして先づ竭かしむ可らず、然るに今餅の酒既に竭きて、嚶の尙盈てるは、是れを嚶に酌む者の耻と爲す、民の富める者、丁壯多く、貧しき者、寡弱なれば、民を治むる者は、富める者を多く役し、貧しき者をして先づ困ましむ可らず、今貧しき者既に困みて、富める者猶裕かなるは、是れ王の耻なり、今王之れを以て耻と爲さず、偏に貧民を困む、我れ之れが爲めに父母を養ふことを得ざるなり、かく貧しき上に、獨身なる者は、父母を養ひ遂ぐることを能はざれば、死して已に久しき者に如かず、今や家に歸ると雖も、父母已に亡すれば、恃み依る所もなく、門を出づれば、心中に恤ひを含み、歸りて門に入れば、家の中は空しくして、田野に行くが如く、至る所なきなり、

父兮生我。母兮鞠我。拊我畜我。長我育我。願我復我。出入腹我。欲報之德。昊天罔極。

鞠は養なり、畜は起なり、育は覆育なり、顧は旋視なり、復は反復なり、腹は懐抱なり、此の章、父母の我れを生みて劬勞せしことを詳かに分けて言ふなり、言ふこゝろは、父は氣を授けて此の身を生み出だし、母は力を盡して此の身を養ひ、我が身を拊でさすり、起ち居にも心を配り、我が身を育ひて成長せしめ、暫くの間も手を放すことなく、我が身を顧み護り、朝夕にうちかへし、出づるにも入るにも、我れを抱き、心を盡して養はれたり、我れ今父母の劬勞せられし此の恩徳に報いんと欲すれども、其の恩は天の極りなきが如くにして、報ずること能はざるなりと、其の情を天に訴ふるなり、

南山烈烈。飄風發發。民莫不穀。我獨何害。

烈々は至難の義、行路難の意なり、發々は疾き貌なり、穀は養なり、此の章、孝子役に在るの苦みを云ふ、言ふこゝろは、我れ役に従ひて、彼の南山を見れば、烈々たる難處にして、颯風も亦發々と寒く且疾し、人は皆父母を養ふことを得るに、我れ獨り何ぞ此の寒風に苦勞して、害を受くるやとなり、

南山律律。飄風弗弗。民莫不穀。我獨不卒。

律々弗々は猶烈々發々のごとし、卒は終なり、不卒とは父母を養ふことを終らざるなり、詩の意、前の章に同じ、

大東

有饑饉。有棘。周道如砥。其直如矢。君子所履。小人所視。瞻言顧之。潛焉出涕。○小東大東。杼柚其空。糾糾葛屨。可以履霜。佻佻公子。行彼周行。既往既來。使我心疚。○有冽洿泉。無浸穫薪。契契寤歎。哀我憚人。薪是穫薪。尙可載也。哀我憚人。亦可息也。○東人之子。職勞不來。西人之子。粲粲衣服。舟人之子。熊羆是裘。私人之子。百僚是試。○或以其酒。不以其漿。鞞鞞佩璲。不以其長。維天有漢。監亦有光。跂彼織女。終日七襄。○雖則七襄。不成報章。皖彼牽牛。不以服箱。東有啓明。西有長庚。有捄天畢。載施之行。○維南有箕。不可以簸揚。維北有斗。不可以挹酒漿。維南有箕。載翕其舌。維北有斗。西柄之揭。

此の詩、古序に刺亂也とあり、東方諸侯の國、周の賦役繁くして、民力爲めに苦み、國財の竭くるを以て、譚の大夫、是の詩を作り、其の貧困の由を告ぐるなり、大東は極

東の義なり、

有饑籩殮。有掾棘。周道如砥。其直如矢。君子所履。小人所視。瞻言顧之。潛焉出涕。

籩は滿つる貌、籩は黍稷を盛る器なり、殮は熟したる食物なり、掾は長き貌、棘は棘木を用ゐて作る所の匙、鼎の肉を取りて俎に升るものなり、砥は物を磨ぐ石なり、瞻は反顧なり、潜は涕の下る貌なり、幽王の時に當り、東方の國、賦役煩はしくして、民の財力竭くるに苦み、先王の時の盛んなりしことを思ふなり、言ふこゝろは、周の盛んなる時、熟食を諸侯の賓客に饋り、黍稷を籩に盈てたり、又掾然と長きとありて、鼎の肉を取り進め、其の人を待遇するの厚きこと、此くの如く、當時諸侯より取る所の者も、至て公平にして、砥石の平かなるが如く、其の直きこと、矢の如く、位に在るの君子は、則ち履みて之れを行ひ、下に在るの小人は、則ち瞻て之れを視る、往事を顧み思へば、誠に今日の如きに非ず、我れ之が爲めに、潛然として涕を出すとなり、

大東小東。杼柚其空。糾糾葛屨。可以履霜。佻佻公子。行彼周行。既往既

來。使我心疚。

小東大東は東方大小の國なり、杼は機を織るに用ゐる梭なり、柚は縦絲を卷くちざりなり、空は盡なり、糾々は編みめのあらあらしきなり、佻々は獨り行く貌、周行は周の道なり、言ふこゝろは、幽王の賦役を諸侯に徵すること重く、東方大小の國より出す所は、絲と麻となれども、然るに其の絲麻も已に盡き、困窮して、履さへも備はらざれば、夏の日に用ゐる所の編みめあらさき葛の屨を穿きて、霜の上を履み行き、譚國の公子さへも、佻々として獨り道路に奔走し、或は行き、或は來り、勞苦に堪へず、我が心をして疚ましむとなり、

有洌沆泉。無浸穫薪。契契寤歎。哀我憚人。薪是穫薪。尚可載也。哀我憚人。亦可息也。

洌は寒き意、沆泉は傍より流れ出づる泉なり、穫は艾なり、契々は憂ひ苦む貌、憚は勞るゝなり、言ふこゝろは、薪已に刈れり、沆泉を以て之れを浸せば、則ち腐り朽ちて、復用ふ可らず、民今將に勞れたり、賦役を重くして之れを苦めば、則ち困窮して死すべし、故に我れ契々として寝ぬる中にも、憂ひ苦み、東國の劬勞することを歎

毛

詩

毛

詩

息するなり、此の刈りたる薪を用ゐんとせば、尙くは之れを車に載せて歸り、水に浸すことなかるべし、民を牧ふ者、民を憐むの心あらば、尙くは之れをして休息せしめ、重ねて勞らすことなかるべしとなり。

東人之子。職勞不來。西人之子。粲粲衣服。舟人之子。熊羆是裘。私人之子。百僚是試。

東人は譚人なり、職は主なり、來は勤なり、西人は京師の人なり、粲々は鮮かなる貌、私人は陪臣の類、私家の賤しき者なり、言ふことゝろは、譚國の人は、主として勞役すれども、周人の心には勤めたりとも思はず、譚國の公子は、冬の寒きにも、葛屨を穿きて行くにも拘はらず、京師の人は、粲々と鮮かなる衣服を著用して、安んじ樂み、又賤しき舟人の子すらも、富有なるが故に、熊羆の裘を著し、私家の賤しき者も、亦百官の列に擧げ用ゐられてありと、蓋し小人志を得て事をを用ゐ、官職治まらざるが故に、賦役の重く、人民の困苦することを言ふなり。

或以其酒。不以其漿。鞞鞞佩璫。不以其長。維天有漢。監亦有光。跂彼織女。終日七襄。

漿は酒の薄きものなり、鞞々玉の貌、璫は瑞玉なり、漢は天の河なり、跂は隅の貌、織女は星の名、襄は反なり、此の章、政事の偏頗なることを言ふ、言ふことゝろは、官に擧げ用ゐて酒に酔はしむるが如き者もあれば、或は任用せられずして、漿をも得ざる者あり、故に官に居る者は、佩びたる玉の鞞々たるのみにして、其の才の長ずるに非ず、天の河は唯光りあるのみにて、明かならずと、是れ玉の賢愚を識別すること能はざるを刺るなり、又隅だちたる織女の星は、且より暮に至るまで、七反するのみにて、織女の名あれども、嘗て機を織りしことあらずと、王の官職を設けあるも、朝廷の位に在るのみにして、何の用をも爲さざるに喩ふるなり。

雖則七襄。不成報章。皖彼牽牛。不以服箱。東有啓明。西有長庚。有捄天畢。載施之行。

報章は機を織るに梭を往來して文章を成すことを謂ふ、皖は星の明かなる貌、牽牛も亦星の名なり、服は駕なり、箱は車の内の物を容るゝ處なり、啓明長庚は星の名、朝に東に見はるれば啓明と曰ひ、夕に西に見はるれば長庚と曰ふ、庚は續なり、俗の明星と曰ふものは是れなり、天畢も亦星の名、捄は畢の貌なり、畢とは元來兔を

取る網なり、星の形似たるを以て名づく、言ふこゝろは、織女の星、七襄すと雖も、機を織りて文章を成すに非ず、又皖然として明かなる牽牛の星あれども、亦名のみにして、我が車箱に駕すること能はず、日の未だ出でざるとき、東に啓明の星あり、日の既に入りてよりは、西に長庚の星あり、啓明長庚、共に日を助くるの名あれども、晝の光りを繼がざれば、名のみにして實なく、又挾たる畢星あれども、鳥獸を取るの用を爲さず、唯天に在りて行列を成すのみなりと、都へて有名無實の義に喩ふるなり、

維南有箕。不可以簸揚。維北有斗。不可以挹酒漿。維南有箕。載翕其舌。維北有斗。西柄之揭。

箕も斗も皆星の名、共に形の似たるを以て名づく、箕は南に在り、斗は北に在り、挹は酌なり、翕は合なり、前の章より星の名を舉げて、有名無實の意を言ひ、此の章は、下の四句、上の四句を承け、申ねて其の用を爲さざる所以を明かにするなり、言ふこゝろは、南に箕星ありて、舌の形を爲せども、米粟を簸揚ぐ可らず、北に斗星ありて、柄あれども、酒を斟むの用を爲さず、箕の舌張ると雖も、其の用を爲さざれば、猶

其の舌を合すがごとし、又斗の物を搯むは、必ず其の柄を平かにして、能く盛る所あり、然るに今其の柄を西にして、高く掲ぐる故に、斗魁傾きて外に注ぐ、是れ酒漿を搯む可らざる所以なりと、

四月

四月維夏。六月徂暑。先祖匪人。胡寧忍我。○秋日淒淒。百卉具腓。亂離瘼矣。爰其適歸。○冬日烈烈。飄風發發。民莫不穀。我獨何害。○山有嘉卉。侯栗侯梅。廢爲殘賊。莫知其尤。○相彼泉水。載清載濁。我日構禍。曷云能穀。○滔滔江漢。南國之紀。盡瘁以仕。寧莫我有。○匪鶉匪鳶。翰飛戾天。匪鱣匪鮪。潛逃于淵。○山有蕨薇。隰有杞棘。君子作歌。維以告哀。

此の詩、古序に、大夫刺幽王也とあり、幽王の時、其の臣下皆暴虐にして、財を貪り、下に在る諸侯、又其の禍を成し、怨を天下に結ぶ、是によりて禍亂並び起る、是れ幽王の政、其の道を得ざればなり、故に之れを刺ると云ふ、然れども詩の意を見れば、亂世に當りて役に行くの詩なり、其の證、左傳文の十三年、及び孔叢子等を見て知るべし、又第三章の文義、藝義の五章と略同じく、征役して外に在ること久しく、家

歸りて祭祀を爲すことを得ざるの詩なり、而して序に其の事を記さざるものは、序は全詩の主旨を言ひ、行役して祭祀の事を思ふは、特に其の一端なるが故なるべし。

四月維夏。六月徂暑。先祖匪人。胡寧忍我。

徂は往なり、寧は猶會と云ふがごとし、言ふこゝろは、四月は維れ立夏にして、暑氣未だ甚だしからず、六月に至れば、乃ち暑盛んに往きて、其の過ぐるを謂ふ、是れ幽王の初めて位に即き、悪しき政を爲すと雖も、未だ甚だしからず、今に至りては、其の酷を極むるに比するなり、行役する人、久しく外に在り、家に歸りて、先祖の祭祀を爲すことを得ず、故に仰ぎて訴へて曰はく、我が先祖人に非ずや、人ならば當に患難を知るべし、何ぞ我れをして此の亂世に當らしむるに忍べるやと、祭祀を爲すこと能はざらしむるの咎は王に在り、然るに先祖を呼ぶものは、詩人如何んどもすること能はざるの語なり。

秋日凄凄。百卉具腓。亂離瘼矣。爰其適歸。

凄々は涼しき風なり、卉は草なり、腓は病なり、離は憂なり、瘼は病なり、言ふこゝろは、秋に當りて、寒涼の風凄々として起り、此の百草をして具に枯れ凋ましむ、是れ幽王の苛政、天下に行はれ、万民之れが爲めに殘はれて、困苦に遭ふに比するなり、王政既に亂れて、國將に憂病あらんとす、此の禍其れ何れに歸せんや、必ず國家の滅亡に歸すべきなりと。

冬日烈烈。飄風發發。民莫不穀。我獨何害。

烈々は猶栗烈と云ふがごとく、烈しく寒きを謂ふなり、發々は風の疾く吹く貌なり、穀は養なり、言ふこゝろは、王の政事を行ふこと暴虐にして、冬の日の寒きに風の烈しく吹くが如し、人の子たる者、誰れも父母を養はざることなきに、とりわけ我れ獨り久しく征役に従ひ、家に歸ること能はずして、此の寒苦の害に遭ふことぞとなり。

山有嘉卉。侯栗侯梅。廢爲殘賊。莫知其尤。

嘉は善なり、侯は維なり、廢は大なり、尤は過なり、言ふこゝろは、山に美善の草ありて、梅又は栗の木の下に生ず、然るに人梅又は栗の實を取らんとして、其の草を踐みそこなひ、之れをして蔑ること能はざらしむ、是れ上の人より民の物を取り立

つること多きが故に、富める人は財物已に盡き、貧しき者は益々困窮するに比するなり、而して當時位に在る人、大に民を殘ひ、財を貪ることを爲せども、自ら其の過ちを知る者なきは、歎くべきことなりと

相彼泉水。載清載濁。我日構禍。曷云能穀。

相は視なり、構は成なり、穀は善なり、言ふことろは、彼の泉の流るゝを見るに、一は則ち清く、一は則ち濁る、是れ諸侯の並に惡を爲して、一の善者なきを嘆くなり、我が諸侯は日に禍亂の行ひを爲す、何れの時か善を爲すことあらんとなり、

滔滔江漢。南國之紀。盡瘁以仕。寧莫我有。

滔々は大水の貌、江漢は二水の名、瘁は病なり、言ふことろは、國は山川を以て主と爲す、滔々たる大水の江漢は、所在の國、當に其の神を祀るべし、江漢の神、以て一方に綱紀として、其の國を守るに足らん、我れ今仕へて王臣と爲り、力を盡して勞瘁すれども、棄てゝ用ゐられず、王者四方を綱紀せば、凡そ臣下の職事に勤勞することを知らざること無かるべし、何ぞ此くの如きことあらんやとなり、

匪鷓匪鳶。翰飛戾天。匪鱣匪鮪。潛逃于淵。

鷓は鷓鴣なり、鴈風魏風等の詩に言へる鷓に非ず、和名くまたかど曰ふものなり、鱣鮪は共に魚の名、鱣は和名ふかど曰ふ、鮪も亦鱣の類、和名しびと訓ずるは、的當ならずと云ふ、言ふことろは、下民深く藏れ高く飛びて、難を免れんと欲すれども、得べからず、鷓にも非ず、鳶にも非ざれば、安んぞ能く羽を振ひ高く飛びて天に至らんや、鱣にも非ず、鮪にも非ざれば、安んぞ能く潜みて深き淵に逃れんやとなり、是れ難の必ず逃るべからざるを謂ふなり、

山有蕨薇。隰有杞桋。君子作歌。維以告哀。

杞は枸杞なり、桋は木の名、未だ詳かならず、此の章草木と雖も、尙各其の所を得たるに、人の反りて其の所を得ざるを傷むなり、言ふことろは、山には蕨薇の菜あり、隰には杞桋の木あり、菜は山に生じ、木は隰に生ず、生ずるに皆其の所を得たり、然るに今天下の民、此の亂世に遇ひ、其の所を得ざるは、草木にも如かざるなり、故に君子此の八章の歌を作り、以て王及び位に在るの人に告げ、天下の民の哀むべきことを言ふなり、詩を作る者、自ら君子と言ふは、君子に非ざれば、詩を作ること能はざればなり、

北山

陟彼北山言采其杞。偕偕士子朝夕從事。王事靡盬憂我父母。○溥天之下莫非王土率土之濱莫非王臣。大夫不均我從事獨賢。○四牡彭彭王事傍傍嘉我未老鮮我方將。旅方方剛經營四方。○或燕燕居息或盡瘁事國或息偃在牀或不已于行。○或不知叫號或慘慘劬勞或棲遲偃仰或王事鞅掌。○或湛樂飲酒或慘慘畏咎或出入風議或靡事不爲。

此の詩古序に大夫刺幽王也とあり、幽王其の臣下を使ふに私ありて均平ならず、北山の大夫のみ久しく役に在りて休息することを得ず、其の他の大夫は未だ必ず然らざるなり、故に父母を養ふことを得ざるを怨みて、此の詩を作るなり、

陟彼北山言采其杞。偕偕士子朝夕從事。王事靡盬憂我父母。

言は我なり、偕々は強壯の貌、士子は官に在る者の通號なり、靡は無なり、盬は堅固ならざるなり、言ふこゝろは彼の北山に陟る者曰はく、我れ杞の葉を采ると、杞の葉食ふ可らず、然るを山に陟りて之れを采るは、宜しきに非ず、大夫の遠く征役に

毛

従ふ者曰はく、我れ其の勞苦の役に従ふなり、而して此の勞役は、賢者の職に非ず、其の事に非ざるに喩ふるなり、王、我れをして此の役に従はしめ、我れを以て偕々として強壯なりとし、朝を以て夕に繼ぎ、王事に従ひて休息することを得ざらむ、王事は堅固ならざる可らず、故に我れをして之れを堅固ならしめ、久しく歸ることを得ざれば、父母をして我が辛勞を思ひて憂ひしむるとなり、

溥天之下莫非王土率土之濱莫非王臣。大夫不均我從事獨賢。

溥は大なり、普く大なるなり、率は循なり、循ひめぐるなり、濱は涯なり、賢は勞なり、言ふこゝろは、王の國土の廣きこと、天下の大なる、王土に非ざることなく、王の臣民の多きこと、地の邊りを回らすの内王臣に非ざる者なし、此くの如くなれば、王の土地廣大にして、臣民も亦多し、何を求めて得ざらんや、何を爲して行はれざらんや、然るに王の爲す所、均平ならず、我れのみ獨り事に従ひて勞苦すとなり、按ずるに呂氏春秋に、溥天率土の四語を以て舜の詩なりと云ふを見れば、此の四句、蓋し古語にして、詩人之れを引きたるものなるべし、

四牡彭彭王事傍傍嘉我未老鮮我方將。旅方方剛經營四方。

詩

毛

詩

彭々は休息を得ざる貌、傍々は已むことを得ざる貌なり、嘉鮮皆善なり、將は壯なり、旅は衆なり、言ふこゝろは、四馬の車に乗りて、諸方に趨き、務め繁きが爲めに、馬も休むことなく、事も亦已むことなし、王に在りては、我が年の未だ老いざるを嘉みし、我が力の壯んなるを善しとし、久しく我れのみを役使用するか、然れども衆大夫の氣力方に剛ければ、亦之れをして四方の事を經營せしむべきなりと、

或燕燕居息。或盡瘁事國。或息偃在牀。或不已于行。

燕々は安息の貌、息偃は仰ぎ臥するなり、以下三章、王の大夫を役使用すること均平ならざるを言ふなり、言ふこゝろは衆大夫の中、或は燕々として休息する者あり、或は盡く病み勞れて、力を盡し國に事ふる者あり、或は牀の上に仰ぎ臥する者あり、或は道路に奔走して已まざる者ありとなり、

或不知叫號。或慘慘劬勞。或棲遲偃仰。或王事鞅掌。

棲遲は休息すること、鞅掌は煩勞の貌なり、言ふこゝろは、或は家に在りて、外にて徵發せられ、叫び號ぶ聲をも聞き知らざる者あり、或は又慘々と憂ひて、王事に苦勞する者あり、或は休息して仰ぎ寝ぬる者あり、或は王事に煩勞する者ありと、

或湛樂飲酒。或慘慘畏咎。或出入風議。或靡事不爲。

言ふこゝろは、或は酒を飲みて樂む者あり、或は慘々として唯其の咎めあらんことを畏るゝ者あり、或は間暇無事なるまゝに時世を風議する者あり、或は事として爲さるることなく、苦勞する者あり、其の均しからざること此くの如く甚だしきなり、此れ大夫の怨を致す所以なり、以上三章、或の字兩々相反して言ふなり、

無將大車

無將大車。祇自塵兮。無思百憂。祇自疚兮。○無將大車。維塵冥冥。無思百憂。不出于穎。○無將大車。維塵雍兮。無思百憂。祇自重兮。

此の詩古序に大夫悔將、小人也とあり、幽王の時、小人多くして、賢者之れと共に事に従ひ、反りて讒言せらるゝが故に、小人と並び立ちて官に居ることを悔ゆるなり、

無將大車。祇自塵兮。無思百憂。祇自疚兮。

大車は牛車なり、小人にして重きものを負ふに比す、疚は病なり、言ふこゝろは、大車は賤しき者の力を助けて進むものなれば、君子たる者之れを助くれば、其の

毛

詩

毛

勞苦に堪へずして、自ら己れを汚さん、是れ大夫にして小人を擧げ用るれば、祇に自ら憂ひを爲すに喩ふるなり、又もろくの憂ひを思ふこと勿れ、もろくの憂ひを思へば禍之れに及ぶ、亦猶小人と事を共にす可らざるがごとし、苟くも小人と事を共にすれば、即ち難其の身に及び、適に自ら病まんのみとなり、

無將大車。維塵冥冥。無思百憂。不出于頰。

冥々は暗きなり、塵の立ちて目を蔽ふなり、小人を擧げ用るれば己れの徳を蔽ひ傷ふに喩ふ、頰は光りなり、不出于頰とは、人の心を味まして光明の道に出づることなきを謂ふなり、詩の意、前の章に同じ、

無將大車。維塵雍兮。無思百憂。祇自重兮。

雍も亦蔽なり、重は猶累といふがごとし、詩の意、前の章に同じ、

小 明

明明上天。照臨下土。我征徂西。至于芄野。二月初吉。載離寒暑。心之憂矣。其毒太苦。念彼共人。涕零如雨。豈不懷歸。畏此罪罟。○昔我往矣。日月方除。曷云其還。歲聿云莫。念我獨兮。我事孔庶。心之憂矣。憚我不暇。

毛

念彼共人。睠睠懷顧。豈不懷歸。畏此譴怒。○昔我往矣。日月方輿。曷云其還。政事愈蹙。歲聿云莫。采蕭穫菽。心之憂矣。自詒伊戚。念彼共人。輿言出宿。豈不懷歸。畏此反覆。○嗟爾君子。無恒安處。靖共爾位。正直是与。神之聽之。式穀以女。○嗟爾君子。無恒安息。靖共爾位。好是正直。神之聽之。介爾景福。

此の詩古序に大夫悔仕於亂世也とあり、

明明上天。照臨下土。我征徂西。至于芄野。二月初吉。載離寒暑。心之憂矣。其毒太苦。念彼共人。涕零如雨。豈不懷歸。畏此罪罟。

芄野は遠荒の地なり、初吉は朔日なり、共人は僚友なり、罟は網なり、言ふこと、ろは上天の明、察せざる所なし、今大夫亂世に仕へて苦勞すと雖も、上天何ぞ察せざるや、我れ西方遠荒の地に往き、二月の朔日に芄野に至れり、今や夏の暑さと冬の寒さを経て、尙歸ることを得ず、行役の遠き、日を歴るの久しきこと、此くの如し、天何ぞ之れを察せざるや、我が心の憂ひ、毒藥を受くるが如く、極めて苦し、而して己れの征役に在る、固より勞苦すと雖も、僚友の朝に在る者、亦豈樂しきことあらん

や、故に之れを思へば、涙の零つること雨の如きに至る、我れ豈此の役を畢りて早く歸ることを懷はざらんや、然れども今世の亂れたるを以て、刑罰の羅網に罹らんことを畏る、故に歸ることを得ざるなりと、

昔我往矣。日月方除。曷云其還。歲聿云莫。念我獨兮。我事孔庶。心之憂矣。憚我不暇。念彼共人。惓惓懷顧。豈不懷歸。畏此譴怒。

除は故きを除き、新たなるを生ずるなり、憚は勞なり、言ふことろは、昔し我が家を出で、往きしは、正月の初めにして、舊き歳を除き、新たなる歳を生ぜしときなり、家を出づるに臨みては、何れの日か歸ることを得べきと、早く歸らんことを望みしに、今や是の歳も將に暮れんとして、未だ歸ることを得ず、念ふに我が身獨りにして、王事甚だ多く、我れを勞らせり、我れ此の亂世に仕へしことを悔い、彼の同僚の朝に在る者、或は未だ仕へざる者を顧み思ひ、心に歸らんと欲すと雖も、亦王の嚴酷なるを以て、其の怒りに遭はんことを畏れ、未だ敢て歸らずとなり、

昔我往矣。日月方與。曷云其還。政事愈蹙。歲聿云莫。采蕭穫菽。心之憂矣。自詒伊戚。念彼共人。興言出宿。豈不懷歸。畏此反覆。

與は暖なり、蹙は促なり、蕭は香草なり、祭りに用ゐるものなり、戚は憂なり、言ふことろは、昔し我が家を出で、往きしは、正月の頃にて、春風の吹き初め、暖氣を覺ゆるときなり、家を出づるに臨みては、何れの日か歸ることを得べきと、早く歸らんことを望みたりしに、政治も愈、促りて急がはしく、歳も亦將に暮れんとし、蕭を采りて蓄へ、菽を刈り取るも、尙歸ることを得ず、心の憂ひ、此くの如くなれども、我れ亂世を冒して仕へたることなれば、自ら吾が身に此の憂ひを貽りたるにて、復如何とも爲す可らざるなり、彼の同僚の君子を思ひ、敢て心を安んぜず、興き出で、外に宿ることもあり、我れ豈歸ることを思はざらんや、時政の反覆を畏るゝが故に、未だ敢て歸らざるなりと、

嗟爾君子。無恒安處。靖共爾位。正直是與。神之聽之。式穀以女。

君子は其の友の未だ仕へざる者を指す、靖共は安靜恭敬の意なり、言ふことろは、嗟爾未だ仕へざるの君子、人の世に居る、常に安樂の處なし、仕官を以て安しと爲すことを要せず、但汝安靜にして恭敬し、正道の人を求めて之れを友とし、仕官を求むるに汲々たること勿れ、然るときは、神明黙して之れを聽き、汝に與ふるに言

祥の事を以てし、明君ありて女を用ゐることあるべしとなり、神は明君に喩へ、己れ亂世に仕ふるを悔い、又朋友の仕へて己れと悔を同じくせんことを恐れ、深く之れを戒むるなり、

嗟爾君子。無恒安息。靖共爾位。好是正直。神之聽之。介爾景福。

息は猶處といふがごとし、介景皆大なり、詩の意、前の章に同じ、

鼓 鐘

鼓鐘將將。淮水湯湯。憂心且傷。淑人君子。懷允不忘。○鼓鐘喑喑。淮水涓涓。憂心且悲。淑人君子。其德不回。○鼓鐘伐鼗。淮有三洲。憂心且妯。淑人君子。其德不猶。○鼓鐘欽欽。鼓瑟鼓琴。笙磬同音。以雅以南。以箎不僭。

此の詩古序に刺幽王也とあり、幽王諸侯を淮水のほとりに集め、樂を爲して之れに示す、故に詩人之れを刺るなり、

鼓鐘將將。淮水湯湯。憂心且傷。淑人君子。懷允不忘。

將々は鐘の聲、湯々は水の盛んなる貌なり、言ふこゝろは、幽王諸侯を集め、樂を爲

す、其の鐘を鼓するの聲將々として、其の傍らなる淮水の流れは湯々と盛んなり、先王の樂は、宗廟朝廷に於てすべきものにして、野外に於てすべきに非ず、而して幽王の樂を爲すこと、其の徳と比せず、故に賢者之れを憂ひ、又樂を爲すの其の所得ざることを傷み、古の淑人君子禮樂を用ゐることの宜しきを得るを思ひ、之れを懷うて、信に忘れずと、古へを懷ひて今の然らざるを傷むなり、

鼓鐘喑喑。淮水涓涓。憂心且悲。淑人君子。其德不回。

喑々は猶將々といふがごとし、涓々は猶湯々といふがごとし、回は邪なり、其の徳邪ならず、正しきに由り忘れざるなり、詩の意、前の章に同じ、

鼓鐘伐鼗。淮有三洲。憂心且妯。淑人君子。其德不猶。

鼗は鼓の大なるものなり、三洲は三つのうきすなり、妯は動なり、憂ひに由りて心の動くなり、猶は若なり、不猶とは、古への君子の徳は、此くの如くならずとの意なり、詩の意、前の章に同じ、

鼓鐘欽欽。鼓瑟鼓琴。笙磬同音。以雅以南。以箎不僭。

欽々は人をして進むことを樂しましむるなり、磬は樂器なり、雅は雅樂なり、南は

南夷の樂なり、王者四夷の樂を制し、徳の廣く及ぶことを示すなり、籥は笛なり、不
僭とは相和して亂れざるを謂ふなり、此の章古樂の僭はざるを言ふ、言ふこゝろ
は、淑人君子の樂を爲す、其の鐘を鼓すれば、則ち其の聲欽々然として、之れを聞く
者、其の善に進むことを樂む、又其の瑟と琴とを鼓し、又其の堂下の笙磬を擊てば、
則ち四方に懸くる所の樂、皆其の音聲を和同するなり、而して正樂を奏し、又南夷
の樂を奏し、籥を以て起ちて舞ふ、皆相和して僭ふことあらざるなりと、

楚茨

楚楚者茨。言抽其棘。自昔何爲。我藝黍稷。我黍與與。我稷翼翼。我倉既
盈。我庾維億。以爲酒食。以享以祀。以妥以侑。以介景福。○濟濟跄跄。絜
爾牛羊。以往蒸嘗。或剝或享。或肆或將。祀事孔明。先祖是皇。
神保是饗。孝孫有慶。報以介福。萬壽無疆。○執爨踖踖。爲俎孔碩。或燔
或炙。君婦莫莫。爲豆孔庶。爲賓爲客。獻醕交錯。禮儀卒度。笑語卒獲。神
保是格。報以介福。萬壽攸酢。○我孔熯矣。式禮莫愆。工祝致告。徂賚孝
孫。苾芬孝祀。神嗜飲食。卜爾百福。如幾如式。既齊既稷。既匡既勅。永錫

爾極。時萬時億。○禮儀既備。鐘鼓既戒。孝孫徂位。工祝致告。神具醉止。
皇尸載起。鼓鐘送尸。神保聿歸。諸宰君婦。廢徹不遲。諸父兄弟。備言燕
私。○樂具入奏。以綏後祿。爾殽既將。莫怨具慶。既醉既飽。小大稽首。神
嗜飲食。使君壽考。孔惠孔時。維其盡之。子子孫孫。勿替引之。

此の詩、古序に刺幽王也とあり、幽王の時、政令煩はしくして、民に取ること重く、民
の財を傷ひ、民の力を奪ひたれば、民耕作を爲すこと能はず、田地も荒れたる上に
又饑饉の災ありし故、人民皆流亡し、神も依る所を失ひたれば、祭祀を爲すと雖も
神亦之れを饗せず、故に古の事を思ひて、之れを刺るなり、

楚楚者茨。言抽其棘。自昔何爲。我藝黍稷。我黍與與。我稷翼翼。我倉既
盈。我庾維億。以爲酒食。以享以祀。

楚々は茨棘の貌、茨は蒺藜なり、和名はまびしと曰ふ、棘は草木の刺あるものを謂
ふ、與々翼翼は、黍稷の茂りて盛んなる貌、倉は穀物を納るゝ處、庾は穀物を露はし
て積みおくことなり、妥は安坐なり、侑は勸なり、言ふこゝろは、昔し明王の時、民皆
茨棘を切り除きたり、昔しより人の勤苦して、此くの如くするは何の故ぞと云ふ

に、黍稷を藝えんが爲めなり、茨の楚々たるを見れば、棘も亦楚々たることを知るべし、然るに棘を抽くと云ふものは、辭を互にして、茨も亦之れを抽くなり、而して已に黍稷を藝えしより、陰陽和し、風雨順なれば、万物茂り、其の黍は與々、其の稷は翼々と豊盛に、倉庾共に盈ちたり、明王乃ち黍稷を以て酒と食とを爲り、其の先祖に享し、又尸を室に請じて安坐せしむ、祝者主人に代りて食を尸に侑め、祭祀に因りて、大なる福を得るとなり、

濟濟踴踴。絜爾牛羊。以往烝嘗。或剝或亨。或肆或將。祝祭于祊。祀事孔明。先祖是皇。神保是饗。孝孫有慶。報以介福。萬壽無疆。

濟々踴々は容の盛んなるなり、冬の祭りを烝と曰ひ、秋の祭りを嘗と曰ふ、祝は祭りを掌るものなり、祊は門内なり、皇は大なり、保は安なり、此れより以下、皆祭祀の事を言ふ、言ふころは、古への明王、其の祭りを助くるの士大夫、事を執り行ふに濟々踴々と其の容儀を慎み、其の祀りに用ゐる牛羊の牲を潔くし、以て往きて冬烝秋嘗の祭りを爲す、凡そ牛羊の性、剥ぎて後骨體を割き、煮て鼎に移し、廟前に陳ぬ、之れを俎に登けて、神位に進むるなり、故に祭に與る者、各其の職事あり、或は其

の皮を剥ぐ者あり、或は之れを煮る者あり、或は之れを俎に陳ぬる者あり、或は之れを奉じて進むる者あり、此の時に於て、孝子祝をして神を廟門の西、主人賓客を待つ所の所に求めしむ、死に事ふること生に事ふるが如く、其の禮甚だ明かなり、故に先祖大に來り臨み、神安んじて之れを饗し、孝孫をして慶事あらしめ、之れに報ゆるに大福を以てし、万年に至るまで疆りなきの壽を受けしむとなり、

執爨踏踏。爲俎孔碩。或燔或炙。君婦莫莫。爲豆孔庶。爲賓爲客。獻醑交錯。禮儀卒度。笑語卒獲。神保是格。報以介福。萬壽攸酢。

爨は竈なり、肉を煮るを饗爨と曰ひ、米を炊ぐを糜爨と曰ふ、踏々は事を敬みて容儀あるなり、俎は牲體を載するつくえなり、爲は盛りたつることなり、碩は肉の肥えて美なるなり、燔は肉を火に近く焼きたるなり、炙は肉を串に貫き、遠き火にて焼きたるなり、君婦は后なり、莫々は清靜にして恭敬の至れるなり、豆は内羞庶羞を謂ふ、内羞は房中のすゝめもの、庶羞は多くのすゝめものなり、天子の庶羞は百二十品あり、内羞は右に在り、陰なり、庶羞は左に在り、陽なり、主人始め賓に酌むを獻と爲し、賓既に主人に酢し、主人自ら飲みて又賓に酌むを醑と曰ふ、交錯は交り

錯ひにする義なり、主人と賓との衆、東西に對して居並び、向ひ合せて盃を交ふるを交と曰ひ、斜に盃を交ふるを錯と曰ふ、こゝろは、諸臣の饗を執る者、肉を烹、米を炊くに、踏々と敬みて容儀あり、俎に盛る所の肉は甚だ肥え、或は燻きたるあり、或は炙りたるあり、君婦莫々として恭敬なるが故に、豆を爲くこと甚だ多し、若し恭敬ならざれば能はざるなり、祭りを助くるの賓客あれば、尸に獻ずるの後、徧く賓客に飲ましめ、獻辭交錯して、其の禮文容儀悉く法度に合ひ、其の笑ひ語る事皆其の宜しきを得たり、是に於て先祖の神靈保んじて茲に格り、其の祭りを享け、孝子に酢ゆるに大なる福を以てし、萬年の壽を賜ふとなり、

我孔熯矣。式禮莫愆。工祝致告。徂賚孝孫。苾芬孝祀。神嗜飲食。卜爾百福。如幾如式。既齊既稷。既匡既勅。永錫爾極。時萬時億。

熯は敬なり、工とは其の事を善くするを以て言ふ、賚は予なり、苾芬は馨ばしきなり、卜は予なり、幾は期なり、式は法なり、齊は疾なり、稷は速なり、匡は正なり、勅は飭なり、上三章、既に孝子及び祭りを助くるの人、皆禮儀其の法に合ひ、神之れを受けて、報ゆるに介福を以てすることを言ふ、此の章、上を承けて之れを結ぶなり、言ふ

詩

毛

毛

詩

こゝろは、我れ甚だ恭敬し、祭祀と禮儀との法に於て、過ち差ふことなし、工祝是に於て神の意を致し、以て主人に告げ、主人をして獻辭を受けしむ、工祝乃ち孝孫の祭位に往きて、其の獻辭を傳ふるなり、獻辭に曰はく、孝孫孝敬を以て享祀する所、苾々芬々として馨ばしく、鬼神悦びて、汝の飲食を飲け嗜むなり、爾に百種の福を予へて、其の福の來る早晚、期節あるが如く、其の福の多少、法度あるが如し、孝孫の事を執ること、既に疾く既に速かにして怠らず、既に正しくして邪なく、既に勅うて謹まざることなく、爾の孝敬盡さる所なし、故に神爾に中和の福を賚ひ、是れ萬是れ億にして限りなからんと、是れ報ゆるに介福を以てするの事なり、今幽王に在りては然ること能はず、故に古へを言ひて之れを刺るなり、

禮儀既備。鐘鼓既戒。孝孫徂位。工祝致告。神具醉止。皇尸載起。鼓鐘送尸。神保聿歸。諸宰君婦。廢徹不遲。諸父兄弟。備言燕私。

具は皆なり、皇は大なり、載は則なり、宰は膳夫なり、諸宰は膳夫と其の屬官とを謂ふ、此の章、祭禮既に畢りし時の事を言ふ、言ふこゝろは、祭祀の禮既に畢く備はり、鐘鼓を擊ちて、祭りの畢りしことを廟中の人に告ぐ、主人孝孫堂下に徂き、西面し

毛 詩

て立つ、工祝孝孫の意を致して、尸に告ぐるに供養の禮已に成ることを以てす、是に於て神酔ひ尸起つなり、神には形なきを以て、尸の起つを神の酔ふときとするなり、其の時鐘鼓を鳴らして、尸を送り、肆夏の樂を奏す、神保んじて聿に天に歸る、乃ち諸宰と君婦と速に神饌を取りさぐるなり、諸宰は諸の供へたるものを取り下げ、君婦は唯籩豆のみを下ぐるなり、之れを速かにするものは、神饌を敬して早く受けんが爲めなり、是れより伯叔父等の諸父、及び等輩の親族兄弟、殘らず集りて、後の酒宴を爲すなり、私とは異姓の賓客に對して言ふ、牲體の俎をば先づ賓客に送り、其餘を親族に分つなり、是れ賓客を尊び骨肉を親しむの義なり、今幽王然ること能はず、故に古へを言ひて之れを刺るなり、

樂具入奏。以綏後祿。爾穀既將。莫怨具慶。既醉既飽。小大稽首。神嗜飲食。使君壽考。孔惠孔時。維其盡之。子子孫孫。勿替引之。

綏は安なり、將は行なり、小大は老少を謂ふ、替首は首を地につくるなり、惠は順なり、替は廢なり、引は長なり、此の章、燕私の事を言ふなり、凡そ廟の制は、前に廟ありて後に寢あり、廟に祭りて寢に宴するなり、故に燕私の時は、廟に祭りを勤めたる

毛

樂人皆寢に入りて樂を奏し、神より受けたる福祿の永く後に傳はらんことを願ふ、蓋し親族集りて燕私し、相樂めば、家道安くして福祿永く傳はるべし、神饌の下りたるを徧く頒ち行へば、一人も怨む者なくして、具に君を慶するなり、是に於て何れも既に酒に酔ひ、既に食に飽き、老少皆替首し、祝頌の辭を主人に致す、其の辭に曰はく、神靈既に君の明德を馨しと爲し、君の飲食を嗜み享けられ、君に報ゆるに壽考の福を以てす、君の祭ること、禮に順ひて分を踰えず、又其の時を得たり、願はくは君の子孫に至るまで、世々此の禮を廢することなく、長く之れを行ひ、常に福祿を得んことを欲すと、今幽王然ること能はず、故に古へを言ひて之れを刺るなり、

信南山

詩

信彼南山。維禹甸之。酌酌原隰。曾孫田之。我疆我理。南東其畝。○上天同雲。雨雪雰雰。益之以霡霂。既優既渥。既霑既足。生我百穀。○疆場翼翼。黍稷彧彧。曾孫之穡。以爲酒食。界我尸賓。壽考萬年。○中田有廬。疆場有瓜。是剝是蕓。獻之皇祖。曾孫壽考。受天之祜。○祭以清酒。從以騂騂。

牲享于祖考。執其鸞刀。以啓其毛。取其血膋。○是烝是享。苾苾芬芬。祀事孔明。先祖是皇。報以介福。萬壽無疆。

此の詩、古序に刺幽王也とあり、昔し大禹水土を治め、九州の疆域を定め、其の後、成王天下の田畝を疆界分理し、民をして稼穡を務めしめ、大禹の功を繼ぎて之れを行はれしに、今幽王に至りては、祖先の業を繼ぎて之れを行ふこと能はず、故に君子古へを思ひて之れを刺るなり、

信彼南山。維禹甸之。酌酌原隰。曾孫田之。我疆我理。南東其畝。

信彼南山は節彼南山と曰へると、文法正に同じ、信の字通じて伸に作る、信とは山の蜿蜒たる貌、即ち山の前後左右に亘りて廣大なるを謂ふなり、南山は終南山にして王畿の内に入り、天子の田なり、甸は治なり、酌々は土地を耕し開く貌、曾孫は成王を謂ふ、曾は重なる義なり、代々の遠孫を指して、曾曾孫と曰ふことを得るなり、疆は經界を定むるなり、理は地理を分つなり、言ふこゝろは、信なる彼の南山、本大禹の水を平らげし時に治められし處なり、禹の功、獨り南山のみならず、れども、獨り南山と言ふものは、一處を指して之れを表し、通じて天下に及ぶの意なり、猶

詩

毛

毛

詩

奕奕梁山。維禹甸之。と云ふがごとし、而して周の曾孫成王、其の地を耕やし、草萊を切り開きて田と爲し、疆界を定め、土地の宜しきを見て其の種うべきもの、便に隨ひ、或は其の畝を南にし、或は其畝を東にせしなり、今幽王之れを修むること能はず、故に之れを刺るなり、

上天同雲。雨雪雰雰。益之以霡霂。既優既渥。既霑既足。生我百穀。

上天は冬のそらなり、同雲は一色にして將に雪ふらんとするの候なり、雰々は雪ふる貌なり、霡霂は小雨なり、言ふこゝろは、豊年の冬は必ず積雪あり、成王の時、陰陽和し、風雨時に順ひ、百穀豊熟し、冬の日上天を見れば、雲氣一色にして、雪ふること雰々と盛んなり、春に至りては、又霡霂の小雨あり、土地を潤ほすこと、既に優かにして餘りあり、既に渥くして入らざる所なし、既に霑ひ、既に足り、我が多くの米穀を生ぜしなり、今王の徳、此くの如くならざる故、古へを言ひて之れを刺るなり、

疆場翼翼。黍稷彳彳。曾孫之穡。以爲酒食。界我尸賓。壽考萬年。

場は田の畔なり、翼翼は畔を讓るなり、或々は茂り盛んなる貌、穡は税を斂むるを謂ふ、言ふこゝろは、疆場の上は、耕す者皆翼翼として畔を讓り、黍稷は則ち或々

して盛んなり、成王則ち其の税を斂めて酒食を爲り、以て宗廟を祭り、戸と賓とに賜ふ、神既に王の敬する所と爲る、故に王をして壽考万年の福を得せしむるなり

毛

中田有廬。疆場有瓜。是剝是菹。獻之皇祖。曾孫壽考。受天之祜。

中田は田中なり、廬は田舎なり、田中に廬を作りて、農作の時、田で、之れに居るなり、言ふところは、田中に廬舎あり、又田の畔には瓜を種え、瓜熟すれば、之れを天子に獻ず、天子皮を削り、漬けて菹と爲し、之れを先祖に獻せば、物微なりと雖も、民の力存する所、曾孫先祖の恵みを受け、壽考にして永く天の祜を受けんと、下民其の君を愛して之れを祝するの辭なり、今幽王に在りては、此くの如きあらず、故に之れを刺るなり、

詩

祭以清酒。從以騂牡。享于祖考。執其鸞刀。以啓其毛。取其血膋。

清酒は鬱鬯の酒なり、くろきひを醸して酒となし、鬱金香草の汁を雜へたるものなり、騂牡は赤毛の牡牛なり、祖は先祖、考は父なり、鸞は鈴なり、鸞刀は刀に鈴を附けたるなり、膋は腸の間にある脂なり、祭りの初め、清酒を地に洒ぎ、其の臭を淵泉

毛

に達して、神を陰に求むるなり、然る後牲を引き入れ、先祖と先考とを享するなり、天子の祭りには、天子親ら牲の繩を執り、廟庭に引き入れ、碑石に繋ぐ、卿大夫鸞刀を取りて、先づ牛耳の旁の毛を抜き取り、之を神に薦め、毛色の純にしてまじりなきことを告げ、又刺して血を出だし、之れを薦めて新たに牲を殺すことを告げ、然る後牛を引き出して殺さしむるなり、膋を取るは此の時なるべし、此の章、牲を殺すの式を言ふなり、

是烝是享。苾苾芬芬。祀事孔明。先祖是皇。報以介福。萬壽無疆。

烝は進なり、言ふところは、既に牲の進むべきありて之れを享す、苾々芬々として其の香遠く聞え、祀りの禮、是に於て甚だ明かなり、先祖則ち皇然として、之れに臨み、報ゆるに大なる福を以てし、天子は萬年疆りなきの壽を受けんとなり、莫大の福を受けて、其の君安寧壽考の樂みあるは、此れ天下極治の時なり、而して其の本、倉廩の盈てる、原隰の治まる、田廬の修まる、雨雪の時を得るに出で、然る後禮樂祭祀の事に及ぶなり、蓋し衣食下に足らざれば、則ち禮樂上に備はらず、禮樂廢するときは、則ち亂隨ひて起る、唯田事備はれば、則ち衣食豊かなり、衣食豊かに

詩

して禮樂備はる、禮樂備はりて和平興り、和平興りて人君福祿壽考の盛んなるあり、此れ詩人深く其の本を探り、其の終りを要して、之を言ふものなり。

甫田

俶彼甫田。歲取十千。我取其陳。食我農人。自古有年。今適南畝。或耘或耔。黍稷薿薿。攸介攸止。烝我髦士。○以我齊明。與我犧羊。以社以方。我田既臧。農夫之慶。琴瑟擊鼓。以御田祖。以祈甘雨。以介我稷黍。以穀我士女。○曾孫來止。以其婦子。饁彼南畝。田峻至喜。攘其左右。嘗其旨否。禾易長畝。終善且有。曾孫不怒。農夫克敏。○曾孫之稼。如茨如梁。曾孫之庾。如坻如京。乃求千斯倉。乃求萬斯箱。黍稷稻粱。農夫之慶。報以介福。萬壽無疆。

此れより以下、賓之初筵に至るまで十篇を甫田之什と曰ふ、此の詩、古序に刺幽王也とあり、幽王奢侈を好み、金錢を無用の事に費消し、倉廩も隨ひて空しければ、種々の法を設けて、租税を取ること重く、農民之れが爲めに耕作すること能はずして、四方に離散する者あり、故に君子古への事を思ひ、此の詩を賦して、今の然らざることを傷むなり。

俶彼甫田。歲取十千。我取其陳。食我農人。自古有年。或耘或耔。黍稷薿薿。攸介攸止。烝我髦士。

俶は明かなる貌、甫田は天下の田を謂ふなり、十千は多きを言ふなり、我は詩人自ら言ふなり、陳は古きなり、耘は草を除くなり、耔は土をつくなり、薿々は茂り盛んなる貌、介は舍なり、止は止息なり、烝は進なり、髦は俊なり、言ふこゝろは、公田と私田と俶然として明かなるものは、古へ太平の時、天下の大田なり、當時天下皆豊作なりしを以て、税を收むるにも、井田の法に繋げず、斗斛を以て量るに非ず、多くの其の收むる所を取りたり、十千とは大數を擧ぐるなり、故に我が積み置きたる米穀餘りあれば、其の古きを出だして、農人に食はしめたり、一家の内、尊長は新らしきを食ひ、卑幼は古きを食ふは、是れ老壯の別、孝養の義なり、古へより太平にして豊年の時、其の法此くの如し、今成王の時、亦其の法を奉して之れを脩む、万民彼の南畝に適き、或は草を除き、或は其の根に培ひ、力を耕作に盡すが故に、黍稷は薿々として茂り盛んなり、然れば、收穫已に多くして、國家の用度此に足り、又民の耕作す

る者、閑暇あれば田中の廬舎に宿り、止息して互に學業を修む、故に我が民人を進めて人に勝れたる俊秀の士と爲すことを得るなりと、

以我齊明。與我犧羊。以社以方。我田既臧。農夫之慶。琴瑟擊鼓。以御田祖。以祈甘雨。以介我稷黍。以穀我士女。

齊は黍と通ず、黍は六穀なり、傳に器實曰齊とあり、器に容るゝ所の六穀の總名を齊と曰ふなり、明は潔きことなり、犧羊とは牲に用ゐる所の羊毛色の純なるを謂ふ、社は后土、即ち地の神なり、方は四方の氣を郊に迎ふるなり、臧は善なり、慶は慶賜なり、田祖は先裔と曰ひて田の神なり、穀は善なり、言ふこゝろは、秋に至り、禾穀を納むるときは、我が明かに潔き黍盛と純色の羊とを以て、地神の社を祭り、及び四方の氣を郊に迎へて之れを祭り、其の能く五穀を成熟せし功に報ゆるなり、五穀の成熟するは、我が田事の善きなれば、農夫を勞はりて休息せしめ、之れに酒食を賜ふなり、又孟春に耕作を始むるときは、琴瑟を鼓し、鼓を撃ちて田祖の神を迎へ、之れを祭りて、農夫の爲めに甘雨を祈り、我が稷黍を介け、我が子女を善くせんとなり、黍稷熟すれば、人皆脩飾すればなり、所謂る倉廩實ちて而して禮節を知る

詩

毛

の意なり、

曾孫來止。以其婦子。饁彼南畝。田峻至喜。攘其左右。嘗其旨否。禾易長畝。終善且有。曾孫不怒。農夫克敏。

曾孫は成王を謂ふ、止は語辭なり、饁は田野に食物を持ち運ぶことなり、田峻は農事を司ぐる官人なり、攘は卻け除く意なり、易は治なり、言ふこゝろは、成王民の爲めに豊年を祈るのみに非ず、亦親しく田野を巡りて、民の耘耔するさまを見らるゝなり、農夫田に在りて勤むれば、其の妻子は並びに來りて食物を送り、一家歡び樂む、君既に之れを上を勸め、民亦之れを下に勤む、而して田峻は又巡り來りて、民の農事を勤むるを喜び、左右の従者を攘ひ除きて、農夫の所に至り、親しく農夫の食物を嘗め味ひ、其の旨きや否やを試む、是れ上下相親しむの甚だしきを言ふなり、然れば作物は治まりて畝を終るまでに能く成熟し、收穫も亦大なり、成王は固より、農夫を怒りて督責することあざざれども、農夫の敏く勤むること、此くの如し、今幽王然ること能はざるを刺るなり、

曾孫之稼。如茨如梁。曾孫之庾。如坻如京。乃求千斯倉。乃求萬斯箱。黍

毛

詩

稷稻梁。農夫之慶。報以介福。萬壽無疆。

稷は田に在る禾なり、茨は積なり、屋を葺きたるが如きを謂ふ、梁は車梁なり、橋の廣さ車を容るゝを謂ふ、京は高き丘なり、庚は穀物を露はして積むなり、坻は水中の高地なり、箱は車箱なり、上章は成王の親しく田野を巡りて、民の勤勞を察せらるゝことを言ひ、此の章は收税の多きことを言ふ、言ふこゝろは成王の禾の實のりて盛んなること、高き所より望み見れば、大なる屋を葺きたるが如く、又車梁の如く、其米粟の積みたるを見れば、堆くして水中の坻の如く、又高き丘の如し、成王既に其の此くの如きを以て、千の倉を求めて、其の庚を處き、万の車箱を求めて、其の稼を載するなり、蓋し古への税法、都に近き地は、摠を納ると云ひて、稻に穗のつきたるまゝを納め、遠き地は、粟を納ると云ひて、もみにて納むるなり、其の收入の多きこと、前年よりも優るを以て、倉庫車箱を求めて、之れを處き、之れを載す、既に黍稷あり、又稻梁あり、有らざる所なし、故に農夫の勤勞を思ひ、之れをして各其の慶を受けしむ、何を以て之れに報いんや、唯之れに報ゆるに介福を以てし、之れを祝するに万壽を以てして疆りなからしめんとなり、

毛

詩

大田

大田多稼。既種既戒。既備乃事。以我覃耜。俶載南畝。播厥百穀。既庭且碩。曾孫是若。○既方既皂。既堅既好。不稂不莠。去其螟螣。及其蟊賊。無害我田穰。田祖有神。秉畀炎火。○有渰萋萋。興雨祁祁。雨我公田。遂及我私。彼有不穫穉。此有不斂穧。彼有遺秉。此有滯穗。伊寡婦之利。○曾孫來止。以其婦子。饁彼南畝。田峻至喜。來方禋祀。以其騂黑。與其黍稷。以享以祀。以介景福。

此の詩、古序に刺幽王也とあり、幽王の時、萬民困窮し、矜寡孤獨の者、生活すること能はず、時の大臣、古へを思ひて、之れを刺るなり、

大田多稼。既種既戒。既備乃事。以我覃耜。俶載南畝。播厥百穀。既庭且碩。曾孫是若。

覃は利なり、俶の字、讀みて熾と爲す、熾は植と同じ、植又置と爲す、庭は直なり、碩は大なり、若は順なり、言ふこゝろは、古へ成王の時、大なる田の土地肥えて、開き耕へし稼を爲すべきもの多し、故に之れを民に授けたれば、民は既に冬の内より穀物

毛

詩

の種を選びて貯へ置き、耕作の器具を備へ、春に至りて農事に従ふなり、乃ち覃然と利き耜を以て、南畝の地に植て、深く耕へし、而して百穀の種を播くなり、而して其の穀の生ずるや、盡く直く、長じて又大なり、是れ曾係成王、民を役すること、を止め、耕作の時を奪はず、民をして農事に順ひ、力を盡さしむればなり、今幽王然ること能はず、故に之れを刺るなり、

既方既阜。既堅既好。不稂不莠。去其螟螣。及其蟊賊。無害我田穉。田祖有神。秉畀炎火。

方とは實の既に生じて其の口未だ合はざるもの、阜とは實の未だ堅からざるものなり、稂は莠に似たる草なり、螟螣蟊賊は皆いなむしなり、心を食むを螟と曰ひ、葉を食むを螣と曰ひ、根を食むを蟊と曰ひ、節を食むを賊と曰ふ、穉は小稻なり、言ふことゝろは、衆穀已に秀で、穂に出で、其の口の合はざるもの、其の實の堅からざるもの、既に堅く既に好くして、皆實のらざることなく、復稂莠の野草あらず、五穀大に熟せり、然ることを得るものは、明王能く自ら己れを正し、螟螣蟊賊の四蟲を去り、我が田中の穉禾を害することなきに由る、明君の政を爲す、其の徳靈なるを

以ての故に、祗田祖の神、此の四蟲を乗りて、之れを炎火に付するなりと云ふ、而して今幽王然ること能はず、故に之れを刺るなり、
有滄萋萋。興雨祁祁。雨我公田。遂及我私。彼有不穫穉。此有不斂穧。彼有遺秉。此有滯穗。伊寡婦之利。

滄は雲の興る貌、萋々は雲の行く貌なり、祁々は徐なり、穉は後に種えたる稻なり、穧は禾の束につかねたるを謂ふ、秉は束を合せたるなり、言ふことゝろは、太平の時、滄然として起り、萋々として行くものは、雨を興すの雲なり、此雲、雨と爲り、祁々として降り、暴疾ならず、人民雲の興り、雨の行くを見て、之を君に歸して曰はく、此の雨、本我が公田を潤ほすものなり、而して其の餘惠、遂に我が私田に及ぶと、農夫の心公を先きにして私を後にすることを見るべし、此くの如くにして、五穀豊熟するが故に、收め穧るに、其の力足らずして、彼こに穧らざる晩稻の残れるあり、此に取り入れざる穧の束ねあり、又彼こに遺せし秉あり、此に滯りたる稻の穂あり、此れ皆主あれども、多くして取るに暇あらず、捨て置きたるものなれば、寡婦の貧しき者拾ひ取りて己れの利益と爲す所なり、今の時は然ること能はず、矜寡の民

資る所なきを刺るなり。

曾孫來止。以其婦子。饁彼南畝。田峻至喜。來方禋祀。以其騂黑。與其黍稷。以享以祀。以介景福。

毛

禋祀は精誠に敬みて祀ることなり、騂は赤色の牛、黒は黒色の羊なり、言ふこゝろは曾孫成王、田野を巡りて、禾穀を斂むるさまを見らる、農夫の婦子は、田に居る者に食物を運び來り、田峻も亦巡り來り、農夫の勤勞に由りて、收穫の多きを喜ぶ、成王の來るや、精誠に敬みて四方の神を祀り、赤色の牛、黒色の羊を以て、之に供へ、來歲も亦豊熟ならんことを祈り、大なる福を致し、なりと、都て古へ太平の時の事を言ひ、今の然らざることを刺るなり。

瞻彼洛矣

瞻彼洛矣。維水泱泱。君子至止。福祿如茨。韎韐有奭。以作六師。○瞻彼洛矣。維水泱泱。君子至止。韎韐有珌。君子萬年。保其家室。○瞻彼洛矣。維水泱泱。君子至止。福祿既同。君子萬年。保其家邦。

詩

此の詩、古序に刺幽王也とあり、古への明王、能く諸侯に爵命を授け、賞罰の正しかりしことを思ひ、幽王の此くの如くならざるを刺るなり。

瞻彼洛矣。維水泱泱。君子至止。福祿如茨。韎韐有奭。以作六師。

毛 詩

洛は洛邑の川の名、泱々は深く廣き貌、君子は明王を指す、止は語辭也、茨は茅茨の積めるなり、韎韐は天子の戎服なり、奭は赤なり、六師は六軍なり、天子は六軍なり、一軍は一万二千五百人、六軍は七万五千人なり、言ふこゝろは、昔し我が先王、洛邑を東都に營みて、諸侯の朝せしより、彼の洛水を瞻れば、泱々として深く廣し、時を以て田地に灌ぎ、浸潤して嘉穀を成す、是れ明王の恩澤、天下に加はるに比して言ふなり、思ふ、昔し明王の此に至るや、諸侯皆玉帛を以て之れに奉じ、天子諸侯を慶賞して、爵命を賜ふ、福祿の盛んなること、茅茨の積むが如し、其の事あるに當りては、天子親ら韎韐の戎服を服し、奭然として赤く、以て六軍を作し、不逞の者を征伐す、是れ天下道あれば、禮樂征伐、天子より出づるものなり。

瞻彼洛矣。維水泱泱。君子至止。韎韐有珌。君子萬年。保其家室。

韐は刀の鞘なり、珌は鞘口の飾り、珌は鞘の末の飾りなり、天子は玉を以て飾るなり、言ふこゝろは、彼の洛水を瞻れば、泱々として深く廣し、思ふ、昔し君子の至る、武

備森嚴にして、其の佩刀を盛るに鞞を以てし、鞞口に琇を飾り、鞞末に瓊を飾り、戎服を御せられて、武事を演習す、万年の久しきに至るまで、雄武にして侮りを禦ぎ、其の家室を保たんとなり、

瞻彼洛矣。維水泱泱。君子至止。福祿既同。君子萬年。保其家邦。

福祿既同とは、諸侯と之れを共にするなり、萬年の久しき、四方の國を安んじて、其の家邦を保たんとの意なり、

裳裳者華

裳裳者華。其葉湑兮。我覯之子。我心寫兮。我心寫兮。是以有譽處兮。○
裳裳者華。芸其黃矣。我覯之子。維其有章矣。維其有章矣。是以有慶矣。
○裳裳者華。或黃或白。我覯之子。乘其四駟。乘其四駟。六轡沃若。○左之左之。君子宜之。右之右之。君子有之。維其有之。是以似之。

此の詩古序に刺幽王也とあり、昔し周公の訓へに、故舊大故なければ、則ち棄てずとありて、子孫賢なれば官を世し、不賢なれば祿を世す、是れ周の道なり、然るに幽王の世、女謁盛んにして、小人賢を蔽ひ、君子皆擧げ用ゐられず、世家の子孫、或は人

の傾き服する所にして、安處を得ず、文章ありて福慶を得ず、小人位に在りて、功臣の祿を奪ひ、賢者の後を棄つ、故に此の詩末章、先臣の功德を頌して、其の子孫の克く之れに似たることを言ひ、王の用ゐる所、其の人に非ざることを諷するなり、且つ全詩極めて賢者の德行才藝、其の先人に似たるを言ひ、之を棄つ可らざるの意を見ゆす、而して幽王を刺るの意、自ら言外に在るなり、

裳裳者華。其葉湑兮。我覯之子。我心寫兮。我心寫兮。是以有譽處兮。

裳々は猶堂々のごとし、光り明かなる貌なり、湑は盛んなる貌、之子は賢者功臣の子孫を指して言ふ、寫は心を傾くるなり、言ふこゝろは、功臣の美盛なること、華の裳々として光り明かなるが如く、其の子孫の繁盛なるは、其の葉の湑然として盛んなるが如し、我れ之の子を覯れば、其の先人の賢者に似たるを以て、我が心をして此の人に傾け瀉がしむ、之の子、宜く譽樂を享けて爵位に處るべきなり、

裳裳者華。芸其黃矣。我覯之子。維其有章矣。維其有章矣。是以有慶矣。

芸は黄色の盛んなる貌、詩の意、前章の如く、我れ之の子を覯れば、文章英華にして、功臣の子孫たるに愧ぢず、宜しく爵位を襲ぎて福慶あるべきなりと、

裳裳者華。或黃或白。我覲之子。乘其四駱。乘其四駱。六轡沃若。

駱は白馬にして鬣の黒きを謂ふ。沃若は濡ふが如きを謂ふ。詩の意前章に同じく、我れ之の子を見れば、宜しく四駱の馬に駕し、六轡馬を御して沃若たるべしとなり。

左之左之。君子宜之。右之右之。君子有之。維其有之。是以似之。

左は陽の道なり、朝廷に在ると祭祀の事となり、右は陰の道なり、喪の事と軍旅の事なり、言ふこゝろは、爾の先君子、先朝に功ありて、才徳全く備はり、之れを左りすれば則ち宜しからざるなく、之れを右すれば則ち有らざるなく、唯其の功德あるを以て、慶後世に及び、子孫克く之れに似たりとなり。

按ずるに、荀子不苟篇に此の詩を引き、君子能く義を以て屈信變應するが故なりと云へり、又韓詩外傳に云ふ、孔子曰はく、昔し周公文王に事へ、行ひ専らに制することなく、事己れに繇ることなし、身衣に勝へざるが如く、言、口より出でざるが如く、前に捧持することあれば、洞々として將に之れを失はんとするが如し、子たりと謂ふべし、武王崩じて、成王幼し、周公文武の業を成し、天子の位を履み、天子の政

毛

詩

毛

詩

桑扈

交交桑扈。有鶯其羽。君子樂胥。受天之祜。○交交桑扈。有鶯其領。君子樂胥。萬邦之屏。○之屏之翰。百辟爲憲。不戢不難。受福不那。○兕觥其觶。旨酒思柔。彼交匪敖。萬福來求。

此の詩、古序に刺幽王也とあり、幽王の時、君臣の舉動皆禮儀なし、故に詩人古への禮文あることを陳べて之れを刺るなり。

交交桑扈。有鶯其羽。君子樂胥。受天之祜。

交々は飛びて往來する貌なり、桑扈の解、小宛の詩に見ゆ、鶯は羽に文采ある貌なり、君子は王者を指す、胥は皆なり、言ふこゝろは、交々と飛びて往來するものは、桑

扈の鳥にして、其の羽に鶯然たる文章あり、故に人皆見て之れを愛す、是れ古へ臣下の舉動、禮文あるに喩へ、王者臣下と皆相共に樂まば、天の祐を受く可しとなり、其の所謂る樂むとは、民の愛ひを愛ひ、民の樂みを樂むの謂ひにして、情に任せて流連するものに非ず、蓋し法度の其の間に存するあるなり、

交交桑扈。有鶯其領。君子樂胥。萬邦之屏。

領は頸なり、屏は蔽なり、墻を築きて衛護するなり、詩の意、前の章と同じく、王者天下と共に樂まば、則ち万邦の屏と爲り、天下皆其の樂みを得て、侵伐を蒙るの患ひなからんとなり、

之屏之翰。百辟爲憲。不戢不難。受福不那。

翰は幹なり、墻を築くとき、墻の兩邊に當て、土を障ふるものなり、辟は君なり、憲は法なり、三の不の字、語詞なり、戢は其の心を聚め斂むるの意なり、難は難なり、柔順の意なり、那は多なり、言ふこゝろは、王者の徳、外能く四方の患難を防ぎて、國の屏障と爲り、内能く功業を建て、諸侯の楨幹と爲れば、百辟の卿士、皆其の職を修めて、之れに法らざることなし、王誠に此くの如くならば、天下の民心、聚りて之れ

に歸し、柔にして之れに順ひ、福を受くこと多からんとなり、

兕觥其觶。旨酒思柔。彼交匪敖。萬福來求。

兕觥は兕の角にて作りたる爵の名、爵爵に用ふ、其思の二字は語辭なり、觶は曲りたる貌、彼は匪なり、交は絞なり、絞は傲なり、敖は傲なり、來は語辭なり、言ふこゝろは、古への王者、群臣と燕飲するも、禮義を失ふもの者なく、罰爵に用ふる所の兕觥は、觶然として陳ぬあるのみ、唯美酒を飲みて柔順なるに過ぎず、此くの如くなるが故に、交際に於けるも、人の陰私を微ふことおらず、又傲り慢ることおらず、福を求めずして、福自ら來るとなり、

鴛鴦

鴛鴦于飛。畢之羅之。君子萬年。福祿宜之。○鴛鴦在梁。戢其左翼。君子萬年。宜其遐福。○乘馬在廐。摧之秣之。君子萬年。福祿艾之。○乘馬在廐。秣之摧之。君子萬年。福祿綏之。

此の詩、古序に刺幽王也とあり、幽王暴虐にして、水陸の鳥獸に於けるも、取らざる所なく、民の財力共に竭くるが故に、詩人古への明王、万物の性に忤はずして、其の

之れを用ふるにも道あることを思ひ、其の事を陳べて之れを刺るなり、

鴛鴦于飛。畢之羅之。君子萬年。福祿宜之。

鴛鴦は鳥の名形をしどりに似たりと云ふをしどりと爲すは誤りなり、畢は柄の長き網なり、羅は張り置きて鳥を取る罟なり、言ふこゝろは、古へ太平の時、万物の性に従ひ、之れをして長養することを得せしむ、之れを取るに道あり、鳥獸蟲魚に至るまで、其の幼小なるものを殺さず、例へば鴛鴦を取らんとするも、必ず其の成長するを待ち、其の能く飛ぶに至りて、畢にて掩ひ、又は羅を張りて之れを取る、君子の仁恩、飛鳥に及ぶ、其の萬年の福祿を享くること、亦宜ならずやとなり、

鴛鴦在梁。戢其左翼。君子萬年。宜其遐福。

戢は斂なり、遐は久なり、言ふこゝろは、鴛鴦を取るには、其の飛ぶを待ちて後に之れを取る、故に今鴛鴦魚を取る梁の上に在りて、左の翼をかきあさめ、右の翼にて之れを掩ひ、自若として休息し、恐るゝの容なしと、詩の意、前の章に同じ、

乘馬在廐。摧之秣之。君子萬年。福祿艾之。

乘馬は天子車に駕する所の馬なり、廐はうまやなり、摧は草を剉みて馬に飼ふな

り、秣は粟を飼ふなり、艾は養なり、言ふこゝろは、天子の馬なれば、之れを飼ふこと宜しく厚かるべし、然るに今其の廐に在るや、之れを用ふることなきときは、草を剉みて之れに飼ひ、用ふることあるときは、粟を以て之れに飼ふ、明王の國用を節して、妄りに費さず、民の力を養ふこと、此の如くなれば、万年の久しき福祿に養はれんとなり、

乘馬在廐。秣之摧之。君子萬年。福祿綏之。

綏は安なり、詩の意、前の章に同じ、

古へ明王民を愛するの餘澤、万物に及び、其の之れを取るも、其の類を傷らさず、其の之れを用ふるも、其の節を過さず、故に鳥獸も猶其の所を得たり、况んや民に於けるをや、万年福祿を言ふものは、明王を頌するの辭、思ふ所遠くして、悲む所深しと謂ふべし、之れ刺ることなくして刺る所以なり、

頰 弁

有頰者弁。實維伊何。爾酒既旨。爾殽既嘉。豈伊異人。兄弟匪他。薦與女蘿。施于松柏。未見君子。憂心奕奕。既見君子。庶幾說懌。○有頰者弁。實

維何期爾酒既旨爾殺既時豈伊異人兄弟具來。蔦與女蘿施于松上。未見君子憂心忉忉既見君子庶幾有臧。○有頍者弁實維在首爾酒既旨爾殺既阜豈伊異人兄弟甥舅如彼雨雪先集維霰死喪無日無幾相見樂酒今夕君子維宴。

此の詩古序に諸公刺幽王也とあり諸公とは同姓の親なり此の詩當に後の賓之初筵と合せ觀るべし賓之初筵の序に幽王小人を近づけ酒を飲むこと度なく君臣上下酒に沈湎することを言へり此の詩は幽王燕樂せざるに非ざれども同姓を宴樂し九族を睦しくすること能はず兄弟を見ることが猶路人のごとし故に親族も自ら疎くして王を親しむ者なく國家將に危亡に至らんとするを悲むなり有頍者弁實維伊何爾酒既旨爾殺既嘉豈伊異人兄弟匪他蔦與女蘿施于松柏未見君子憂心奕奕既見君子庶幾說懌。

頍は冠りを戴きて額を掩ふ貌弁は皮弁なり蔦は寄生即ちやどりぎなり女蘿は兎絲なり木にあるを松蘿と曰ひ草に在るを女蘿と曰ふ君子は幽王を指す奕々は憂ふる貌なり言ふこゝろは頍然たる皮弁は實に是れ何ぞや宜しく首に在り

て飾りと爲すべきものなり是れ天子は尊き者なれば上に在りて綱紀を正しくすべきに比するなり爾此の皮弁を服する者にして既に美酒嘉穀あらば何ぞ親族と燕飲せざるや王の燕飲すべき者は豈伊れ異なる疎遠の人ならんや皆是れ兄弟にして他人に非ざる最も親しきものなり然るに何ぞ之れと親みを厚くして輔けと爲さざるや蔦と女蘿どのやどりきは松柏の上に高く蔓りたる是れ己れの根あるに非ず松柏の根に依るなれば松柏存して茂ることを得れども松柏枯るときは俱に枯るゝなり我が同姓九族の人皆王に依りて榮ゆるものなれば王の政事明かなれば榮え王の政事衰ふれば亦隨ひて衰ふるなり王久しく諸公と宴せざるが故に諸公未だ王を見ざるの間は憂ふる心奕々たれども若し王を見て之れを諫め正し王をして其の心を改めしむることを得ば我が心悅ばんとなり。

有頍者弁實維何期爾酒既旨爾殺既時豈伊異人兄弟具來蔦與女蘿施于松上未見君子憂心忉忉既見君子庶幾有臧。

期は語辭なり時は善なり忉々は憂の盛んに滿つるなり臧は善なり詩の意前の

毛

詩

章に同じ

有類者弁。實維在首。爾酒既旨。爾殺既阜。豈伊異人。兄弟甥舅。如彼雨雪。先集維霰。死喪無日。無幾相見。樂酒今夕。君子維宴。

阜は多なり、甥舅は母の兄弟と姉妹の子とを謂ふ、霰はあられなり、詩の意、前と同じく、大雪の將に降らんとするときには、其の初め、霰先つ降りて、後に大雪となるなり、王の惡を爲すも、小よりして大に至る、王の滅亡すること、遠きに非ざるべし、然るときは、我れも借に亡ぶることなれば、復王の燕に與ることなからん、故に今夕酒を飲みて樂み、王の燕に與りしこと、思はんのみと、王の將に亡びんとするを悲み傷むなり、

國家の亡ぶるは、必ず九族の離るゝに由る、孟子曰はく、助け多きの至り、天下之れに順ひ、助け寡きの至り、親戚之れに叛くと、紂王の亡ぶるとき、其の親しき、微子に若くはなし、然れども、微子は祭器を抱きて周に入れり、項羽の亡ぶるや、其の親しき、項伯に若くはなし、然れども、項伯は其の謀を泄らして漢を助く、所謂る親戚の叛くものなり、夫れ親戚の叛く、亦必ず之れを致すものあり、幽王今九族を睦しく

すること能はず、其の危亡に至るや宜べなり、

車 牽

間關車之牽兮。思變季女逝兮。匪飢匪渴。德音來括。雖無好友。式燕且喜。○依彼平林。有集維鷦。辰彼碩女。令德來教。式燕且譽。好爾無射。○雖無旨酒。式飲庶幾。雖無嘉穀。式食庶幾。雖無德與女。式歌且舞。○陟彼高岡。析其柞薪。析其柞薪。其葉湑兮。鮮我覯爾。我心寫兮。○高山仰止。景行行止。四牡騤騤。六轡如琴。覯爾新昏。以慰我心。

此の詩、古序に太夫刺幽王也とあり、此の時、褒姒嫉妬にして寵を専らにし、賢者ありと雖も、忠諫の路なく、讒人國を亂り、德澤民に下らず、故に大夫賢妃を得て王に配し、内助たらしめ、褒姒を去らんことを思ひ、此の詩を作りて、王に教ふるなり、

間關車之牽兮。思變季女逝兮。匪飢匪渴。德音來括。雖無好友。式燕且喜。

間關は牽を設くるなり、變は美なる貌、季女は少女なり、括は會なり、好友は猶嘉耦と曰ふがごとし、言ふこゝろは、間關と車に牽して、美しく行儀正しき少女の許に

毛

詩

行き之れを迎へ來りて、王に配せんことを欲す、我が行くや、飢えたりと雖も飢と爲さず、渴せりと雖も渴すと爲さず、然る所以のものは、德音ある季女を迎へ來りて、王を助けしめ、王をして德澤を民に施し、既に離散せし民を會集せしめんことを欲するなり、若し賢女にして來るあらば、王は賢女に配するの好友に非ずと雖も、内助と爲りて、共に燕し且喜ばんことを望むとなり、

依彼平林。有集維鵲。辰彼碩女。令德來教。式燕且譽。好爾無射。

依は木の茂る貌、鵲は雉なり、辰は時なり、射は厭なり、言ふころは、依然として茂れるものは、彼の平林の木にして、往きて之れに集まるものは、維れ雉なり、雉の集まるは、平林の茂れるに由る、王の身、美德あらば、碩大の賢女、來りて之れに配すべし、是れ美德ありて、能く碩女を致すなり、故に王若し美德あらば、即ち其の時、彼の賢女來りて王を教へ、王をして令德を修めしむることあらん、我れ是れを以て宴して酒を飲み、王の譽れを稱美し、王を愛し好みて、厭ひ倦むことなからんとなり、

雖無旨酒。式飲庶幾。雖無嘉穀。式食庶幾。雖無德與女。式歌且舞。

此の章、正に賢女、令德の實を言ふなり、言ふころは、此の令德あるの碩女を得て、

王に配せば、美酒嘉穀なしと雖も、一飲一食、節儉を以て王を風すべく、吾が王の徳、碩女に配することなしと雖も、碩女にありては、歌ひ舞ひて王を喜ばしめ、是れを以て王を輔け、王の行ひを改めしめんことを願ふとなり、

陟彼高岡。析其柞薪。析其柞薪。其葉湑兮。鮮我覲爾。我心寫兮。

陟は登なり、柞は木の名、和名は、そと曰ふ、湑は盛なり、鮮は善なり、覲は見なり、薪を析くは婚姻を指すなり、言ふころは、高き岡に登り、柞木を析きて薪と爲し、併せて其の葉を取れば、湑然として盛んなり、善きかな、我れ賢女を見ることが得ば、則ち我が心の愛ひを除き去るなり、今王賢女を求めんと欲せば、斧を以て薪を析くが如く、亦當に其の道あるべしとなり、

高山仰止。景行行止。四牡騤騤。六轡如琴。覲爾新昏。以慰我心。

景は大なり、止は語辭なり、騤々は行きて止まらざる貌、慰は安なり、高山、景行は賢女に喩へ、仰ぎ行ふは之れを思ひ慕ふに比す、言ふころは、高き山は、人皆仰ぎて之れを見る、大なる行ひは、人皆慕ひて之れを行ふ、賢女を得ること難しと雖も、之れを求めて已まざれば、將に之れを得ることあらんとす、四牡、騤々として止まる

ことなく、六つの轡和して調ふこと、琴瑟の如く、車馬を以て往きて之れを迎へ、我れをして汝が新たに婚姻する季女を見ることを得せしめば、我が愛ひを去り、心を安んぜんとなり此の章、四牡駢々と云ふものは、首章の間關車之羣に應ずるなり。

青 蠅

營營青蠅。止于樊。豈弟君子。無信讒言。○營營青蠅。止于棘。讒人罔極。交亂四國。○營營青蠅。止于榛。讒人罔極。構我二人。

此の詩、古序に大夫刺幽王也とあり、幽王の讒言を信ずることを刺るなり。

營營青蠅。止于樊。豈弟君子。無信讒言。

營々は往來の貌、樊は藩なり、言ふことろは、營々として往來するものは、青蠅の蟲なり、此の蟲、白きものを汗がして黒からしめ、黒きものを汗がして白からしめ、白黒を變亂するものなれば、宜しく之れを近つかしむべからず、之れをして藩籬の外に止まらしめ、宮室の中に入らしむ可らず、彼の讒佞の人は、善を以て惡と爲し、惡を以て善と爲し、善惡を變亂するものなれば、之れを親しむ可らず、宜しく之れ

を荒野の外に棄て、朝廷の上に居らしむべからざるに喩へ、讒人の害を爲すこと、此くの如くなれば、樂易の君子、即ち當今の王者、此の讒人の言を信用することなかるべしとなり。

營營青蠅。止于棘。讒人罔極。交亂四國。

棘は木の刺あるもの、藩と爲すべし、極は猶已のごとし、詩の意、前の章に同じく、王者讒人の言を信ずるときは、讒者日に至りて已むことなく、四方を亂りて至らざる所なしとなり。

營營青蠅。止于榛。讒人罔極。構我二人。

構は合なり、君臣父子の間を離間して、禍を構せ成すなり、詩の意、前の章に同じ。

賓之初筵

賓之初筵。左右秩秩。籩豆有楚。設核維旅。酒既和旨。飲酒孔偕。鐘鼓既設。舉嘯逸逸。大侯既抗。弓矢斯張。射夫既同。獻爾發功。發彼有的。以祈爾爵。○籥舞笙鼓。樂既和奏。烝衍烈祖。以洽百禮。百禮既至。有壬有林。錫爾純嘏。子孫其湛。其湛曰樂。各奏爾能。賓載手仇。室人入又。酌彼康

爵以奏爾時。○賓之初筵。溫溫其恭。其未醉止。威儀反反。曰既醉止。威儀幡幡。舍其坐遷。屢舞僊僊。其未醉止。威儀抑抑。曰既醉止。威儀怱怱。是日既醉。不知其秩。○賓既醉止。載號載呶。亂我籩豆。屢舞僊僊。是日既醉。不知其郵。側弁之俄。屢舞僊僊。既醉而出。並受其福。醉而不出。是謂伐德。飲酒孔嘉。維其令儀。○凡此飲酒。或醉或否。既立之監。或佐之史。彼醉不臧。不醉反耻。式勿從謂。無俾大怠。匪言勿言。匪由勿語。由醉之言。俾出童羖。三爵不識。矧敢多又。

此の詩、古序に衛武公刺時也とあり、幽王の政教荒み亂れ、小人を近づけて、之れと酒を飲み、節度なければ、天下の人皆此の風に化し、君臣上下皆傲ひて酒に沈湎す、武公王の卿士と爲り、此の詩を作りて之れを刺る、上二章は古への事を陳べ、下三章は今の事を刺るなり、

賓之初筵。左右秩秩。籩豆有楚。殽核維旅。酒既和旨。飲酒孔偕。鐘鼓既設。舉觴逸逸。大侯既抗。弓矢斯張。射夫既同。獻爾發功。發彼有的。以祈爾爵。

秩々は肅敬の貌、楚は列なる貌、殽は肉にして、豆に實つるもの、核は桃實梅實の類にして、籩に實つるものなり、凡そ肉に非ずして食ふものを殽と曰ふ、逸々は往來の次第あるを謂ふなり、侯は的なり、大侯は君の侯なり、抗は擧なり、射夫は其の時の射手なり、獻は猶奏のごとし、射禮に大射、賓射、燕射あり、此の章は燕射を行はんとして、先づ燕禮を行ふことを言ふなり、筵とは射禮の席にして、燕射は君、群臣を賓として、宴を設け、射禮を行ひ、賓を樂しましむるなり、其の賓の初め門に入りて、筵に升るに至るまで、周旋揖讓するに、其の左右に隨ふ者、威儀甚だ肅敬し、秩々として禮を失はず、筵には則ち王の籩豆楚然として陳列し、又殽核は籩豆の上に列なれり、王の酒も亦既に能く調ひて旨く、衆賓の酒を飲む者、威儀齊一にして、甚だ禮儀に順へり、其の將に射んとするに及びては、鐘鼓を改め設け、醕を擧ぐるなり、醕とは主人の飲みて、賓に獻じたるを、賓飲みて主人に酢し、主人飲みて、又賓に酌むを謂ふ、逸々として、獻酬順序あり、然る後、射事を行ふ、君の射る所の大侯を擧げて之れを張り、衆射の弓矢も又之れを張り、射手齊しく堂に登りて、射位に在り、各四矢を發ち、其の的に中る者は、其の功を獻じ、中りて勝ちたる者は、負けたる者に

飲ましむることを求むるなり。

簫舞笙鼓。樂既和奏。烝衍烈祖。以洽百禮。百禮既至。有壬有林。錫爾純嘏。子孫其湛。其湛曰樂。各奏爾能。賓載手仇。室人入又。酌彼康爵。以奏爾時。

毛

烝は進なり、衍は樂なり、烈は美なり、洽は合なり、壬は大なり、林は盛なり、純は大なり、仇は匹なり、室人は主人なり、康爵は體を安んずるの爵なり、酒は病ひを養ひ、老を養ふ所以なればなり、時は中なり、古への燕禮を行ふや、樂を爲して樂心を助け、樂人をして簫を乗りて舞はしむ、笙を吹き、鼓を撃ちて、音節相和し、奏する所の音聲甚だ其の所を得、賓主禮あり、八音和樂して、徳神明に當り、功業あるの先祖を進めて樂ましめ、是に於て禮文禮物の備はりたる百禮を合はす、百禮既に備はり、至りて大なることあり、盛んなることあり、乃ち先祖より子孫に大なる福を賜ふとの辭あり、子孫之れを樂み、各獻酬して能を奏す、而して後將に射んとすれば、賓載ち匹耦の矢を手にして、之れを發ち、室に居るの主人、亦次に入り、弓矢を取り、射て以て賓に耦するなり、賓主射畢りて勝負あれば、則ち勝つ者を進め、彼の康爵に酒

詩

を酌みて、中らざる者に飲ましめ、以て罰を行ふなり、之れ古への燕射の正禮なれども、今行はれざるなり、

賓之初筵。溫溫其恭。其未醉止。威儀反反。曰既醉止。威儀幡幡。舍其坐遷。屢舞僂僂。其未醉止。威儀抑抑。曰既醉止。威儀怱怱。是曰既醉。不知其秩。

毛

温々は柔和なり、反々は慎むなり、幡々は威儀を失ふなり、僂々は所を失ふなり、抑々は慎密なり、愒々は嫺れ慢るなり、秩は常なり、此れより以下、今の事を刺るが故に、重ねて賓之初筵と云ひ、燕飲の失を著はすなり、幽王既に古への禮の如くすること能はず、故の其の禮の失を陳ぶ、賓の初めて門に入り、筵に登るの時、尙温々として、其の貌和らぎ敬へり、酒を飲むに至りても、其の未だ酔はざるの時、威儀猶反々として慎めり、然れども旅酬とて衆賓と獻酬して、既に酔ふに及びては、威儀幡々として、其の所を失ひ、又其の本坐を捨て、他處に遷り、屢、起ちて舞ひ、僂々として所を失ふなり、此れ賓たる者、既に王の敬する所と爲り、而して威儀を失ふこと此くの如し、故に武公之れを疾み、又重ねて言て曰はく、其の未だ酔はざる、威儀

詩

毛

を守りて、抑々ど慎密なれども、既に醉へば、慄々として人を慢り、其の甚だしく醉ふに至りては、自ら其の常の禮を知らずと、其の昏亂の甚だしきを言ふなり。
賓既醉止。載號載呶。亂我籩豆。屢舞傲傲。是日既醉。不知其郵。側弁之俄。屢舞傴傴。既醉而出。竝受其福。醉而不出。是謂伐德。飲酒孔嘉。維其令儀。

號呶はさけびて喧しきなり、傲々は舞うて正しきこと能はざるなり、傴々は止まざるなり、郵は尤と通ず、過ちなり、俄は傾く貌なり、前の章は、燕の初及び旅酬の事を言ひ、此の章は、算爵なきの後を陳ぶるなり、言ふころは、爵の行ること算なく、賓既に酒に酔へば、則ち號び呼び、騒がしくして籩豆の行列を亂り、屢起ちて舞ひ、其の舞ふ客も傲々として正しからず、故に武公又疾みて、重ね言つて曰はく、賓既に醉へば、自ら其の過ちを知らず、其の冠りを傾けて、俄然たらしめ、屢起ちて舞ひ、傴々として舞ひて止まざるなり、此くの如く酒に亂れて、禮儀を失ふときは、天下を亂るなり、乃ち賓と爲るの禮を述べて曰はく、賓若し既に酔ひて、其の席を出で去れば、則ち賓と主人と竝に其の禮を得るの福を受け、賓は則ち禮を知る者と爲

詩

毛

り、主は則ち用ふること其の人を得ると爲す、是れ竝びに福を受くるなり、若し酔うて出でざるに至りては、是れを德を取ると謂ふ、酔ふの前、過ちなきを有徳と爲す、既に酔ひて愆ちを爲すは、是れ徳を取るなり、王若し酒を飲み、誠に能く嘉善の賓を得、之れと燕樂せば、維れ其の禮に於て令儀あるなり、王何ぞ擇みて之れを賓とせざるや。
凡此飲酒或醉或否。既立之監。或佐之史。彼醉不臧。不醉反恥。式勿從謂。無俾大怠。匪言勿言。匪由勿語。由醉之言。俾出童殺。三爵不識。矧敢多又。

凡そ人の聚まりて酒を飲む、或は酔ふ者あり、或は酔はざる者あり、故に監を立て、又之れを佐くる史あり、監は儀法を察して戒め、史は其の事を記す、酔ふ者の失態は、酔ふ者自ら知らず、酔はざる者は之れを耻づ、凡そ人酔ふ者を見れば、多くは其の意に従ひて、之れを是と云ふ、故に酔ふ者をして、益、放逸にして大に怠らしむ、之を以て之れを戒め、式て従ひ謂ふ勿れ、大に怠らしむる無れと云ふ、當に言ふべからずして之れを言ふ勿れ、當に従ふべからずして之れと語る勿れ、酔ふ者は善く

詩

聲嘒嘒。載駮載駟。君子所屆。○赤芾在股。邪幅在下。彼交匪紆。天子所
予。樂只君子。天子命之。樂只君子。福祿申之。○維柞之枝。其葉蓬蓬。樂
只君子。殿天子之邦。樂只君子。萬福攸同。平平左右。亦是率從。○汎汎
楊舟。紼纜維之。樂只君子。天子葵之。樂只君子。福祿膺之。優哉游哉。亦
是戾矣。

此の詩、古序に刺幽王也とあり、古への明王は、諸侯を敬愛し、諸侯來朝すれば、必ず
之れを饗し、又車馬衣服を賜ふことあり、然るに幽王は諸侯を慢り、褒姒の笑はん
ことを欲して、故なきに燧燧を挙げ、諸侯を召し集め、諸侯至れども寇の至ること
なきが故に、是より後は、數々燧燧を擧ぐれども、諸侯一人も至る者なし、此くの如
くなれば、固より古へ明王の禮義を以て諸侯を待つが如きことなし、故に古への
事を陳べて今を刺るなり、
采菽采菽。筐之筥之。君子來朝。何錫予之。雖無予之。路車乘馬。又何予
之。玄衮及黼。

車は官車なり、黄金にて飾りたるを金路と曰ひ、象牙にて飾りたるを象路と曰ふ、
同姓の諸侯には金路を賜ひ、異姓の諸侯には象路を賜ふなり、乘馬は車に駕する
四匹の馬なり、衮は龍の狀なり、玄衮とは玄衣に衮龍を繪がけるを謂ふ、黼とは斧
の形を裳に繡したるを謂ふ、言ふこゝろは、古への明王、諸侯を待つに禮あり、諸侯
の將に來朝せんとする、豫め之れが備を爲し、人をして菽を采り、之れを筐に盛り、
或は筥に盛りて、羹の用に供するなり、又此の君子なる諸侯の來朝するあらば、何
物を以て之れに錫ひ予ふべきや、之に錫ふべき物なしと雖も、尙ほ之れに路車及
ひ乗る所の駟馬を與へん、而して其の車馬の外、又何物を以て之れに予へんや、衮
龍を畫きたるの玄衣と、黼を繡せる裳とを以てせんと、此の章、先王諸侯に賜ふ所
の至りて厚きを思ふなり、
溥沸檻泉。言采其芹。君子來朝。言觀其旂。其旂淠淠。鸞聲嘒嘒。載駮載
駟。君子所屆。

溥沸は泉の出づる貌、檻泉は下より正しく沸き出づる泉なり、芹は菜なり、溥沸は
動くなり、嘒々は車馬の鸞聲節に中るなり、駮は兩側の馬、駟は四馬を總へて言ふ、

届は至なり言ふころは明王此の盛沸たる檻泉の中に於て斧を采り諸侯を供ずるの用に備ふ諸侯將に朝せんとするや遠く其の旂を觀れば王出で之れを門に迎ふ始め其の旂の湮々として動くを觀繼ぎて其の車馬の鸞聲嚙々たるを聞き繼ぎて其の馬の數を見て後に其の人至るなり此の章古へ諸侯來朝の儀式を思ふなり

赤芾在股邪幅在下彼交匪紆天子所予樂只君子天子命之樂只君子福祿申之

赤芾は赤きなめしがはの膝おほひにして股の上にかくるものなり邪幅は跗より脛の間を巻く絹なり彼は匪なり交は絞なり紆は緩なり言ふころは古への諸侯直に其の旂と鸞聲の禮あるのみに非す又赤芾を服して股に在り又邪幅を著けて股の下に在り其の身軀を偪束すること此くの如くなれば微ふに匪す怠り緩くするの心あるに非ず故に天子其の儲ふる所の車馬衣服を以て之れに賜ふなり樂しめる君子此の恭敬の美あれば則ち天子之れに命じて諸侯と爲して之れに申ぬるに福祿を以てするなりと之れに命じて之れに申ぬるは皆所予の字

毛

詩

より出づるなり此の章古へ來朝する諸侯の恭敬を思ふなり古へ天子の諸侯を禮して之れに賜予するは皆諸侯の忠敬なるを以てなり天子より分外の恩賜あるに非す况んや之れを侮ることを得んや

維柞之枝其葉蓬蓬樂只君子殿天子之邦樂只君子萬福攸同平平左右亦是率從

柞は木の名和名はそと曰ふ蓬々は盛んなる貌殿は鎮なり平々は治なり言ふころは柞木の枝ありて葉を生じ蓬々として茂り盛んなる新なる葉將に生ぜんとすれば故きもの乃ち落ち葉を以て相承く諸侯の先祖子孫ありて世々相繼ぎ才智ありて盛んなる亦猶此のごとし樂しめる君子王家の屏と爲りて天子の邦を鎮め安んず明君良臣際會し万福皆聚りて之れに歸す而して其の諸侯に連屬する左右の國も亦禮儀に習ひ相與に従ひて來朝するなり此の章從ふ者の禮あるを思ふなり

毛

詩

汎汎楊舟緋纒維之樂只君子天子葵之樂只君子福祿膍之優哉游哉亦是戾矣

汎々は浮べる貌、縛は竹にて作れる大索なり、舟を繋ぐに用ふ、縑維皆繋なり、莢は
揆なり、臍は厚なり、戻は至なり、言ふこゝろは、汎々として水上に浮ぶものは、楊木
の舟なり、舟人、縛繩を以て、繋ぎて之れを維持し、東西することを得ざらしむ、諸侯
の天子に於ける、天子道あれば、則ち來朝し、道なければ、則ち離散す、故に明王の諸
侯を御する、禮法を以て之れを約し、違ひ叛くことを得ざらしむるなり、是れを以
て天子は諸侯の徳を揆りて、厚く之れに賜ふに福祿を以てせり、明王の徳は優游
と水の自然に流るゝが如く、從容として、思案工夫を用ゐず、善美の至れるものな
りと云ふなり、

角弓

駢駢角弓。翩其反矣。兄弟昏姻。無胥遠矣。○爾之遠矣。民胥然矣。爾之
教矣。民胥傲矣。○此令兄弟。綽綽有裕。不令兄弟。交相爲瘡。○民之無
良。相怨一方。受爵不讓。至于已斯亡。○老馬反爲駒。不顧其後。如食宜
餼。如酌孔取。○毋教猱升木。如塗塗附。君子有徽猷。小人與屬。○雨雪
瀟瀟。見睍日消。莫肯下遺。式居婁驕。○雨雪浮浮。見睍日流。如蠻如髦。

我是用憂

此の詩、古序に父兄刺幽王也とあり、父兄は幽王の宗族なり、幽王九族を親まざし
て、讒佞の人を好み、親族をして相怨ましむるに至るなり、

駢駢角弓。翩其反矣。兄弟昏姻。無胥遠矣。

駢駢は調和する貌なり、翩はそりかへるなり、胥は相なり、言ふこゝろは、駢々と調
和せる角弓も、一たび弛むるときは、翩然と外に向ひて反るなり、九族に於けるも、
我れ之れを親しめば、則ち彼れ皆我れに付き、我れ若し之れを疎んずれば、則ち彼
れ皆離散す、亦角弓の翩として反るが如し、故に兄弟昏姻、即ち骨肉の中は、疎遠に
す可らざるなりと、

爾之遠矣。民胥然矣。爾之教矣。民胥傲矣。

爾は幽王を指す、胥は皆なり、言ふこゝろは、爾己に親族を疎遠にするときは、獨り
爾のみに非ず、天下の民、皆爾の爲る所に倣ひて然らん、上の爲す所は、下皆之れに
倣ふものなれば、爾の教ふる所は、善となく、悪となく、民皆之れに倣はんとなり、

此令兄弟。綽綽有裕。不令兄弟。交相爲瘡。

綽々は寛なり、裕は饒なり、餘りある意なり、瘡は病なり、言ふこゝろは、兄弟の中にも亦令善なる者あり、王、之れを待つこと薄しと雖も、彼れ綽々として餘裕あり、王に對すること甚だ厚し、然れども其の不善なる者は、王の薄きに倣ひ、亦薄きを以て王に報じ、互に逆ひて病ましきを爲すなりと。

民之無良。相怨一方。受爵不讓。至于已斯亡。

良は善なり、言ふこゝろは、民の善からざるは、何故ぞと、已れに省みて我が身を責むべきことなるに、善心なき人は、已れを省ることを知らず、一方にのみ向ひて怨み怒るなり、故に爵禄を受けても、互に讓ることを知らず、此れに由りて人の怨みを受け、終に己れの身を亡ぼすに至るとなり。

老馬反爲駒。不顧其後。如食宜餌。如酌孔取。

此の章、王の老人を侮ることを言ふ、言ふこゝろは、彼の老馬を見るに、少き時より力を盡せしものなれば、老いたりと雖も、猶之れを憐むべし、况んや父兄の衰老せるもの、王宜しく之れを優待すべし、然るに之れを侮りて恤まざるは、老馬を以て反つて駒と爲すものなり、王も亦後日衰老の至ることを顧みざるや、王若し老人

母教。猥升木。如塗塗附。君子有微猷。小人與屬。

猥は猿なり、母は禁止の詞、塗は泥なり、微は美なり、猷は道なり、此の章第二章を承けて言ふ、言ふこゝろは、無良の民、本と教ふるを待たずして惡し、然るに王亦善からざることを以て之れに示す、猶猥に木に升ることを教へ、塗を以て塗に附くるがごとし、王若し美善の道あらば、則ち小人與に連なりて王に附くことを喜び、何んの遠ざかることあらんとなり。

雨雪濛濛。見睨日消。莫肯下遺。式居婁驕。

濛々は盛んなる貌、睨は日の氣なり、雪の盛んなるは、王の惡虐なるに喩へ、眼を見て消ゆるは、義心の起るに喩ふ、言ふこゝろは、雪ふること濛々として盛んなれども、日の將に出でんとするや、忽ち消ゆるなり、王若し親睦の心を起さば、則ち九族の疑ひ盡く釋けん、今王の恩禮肯て下し墮すことなく、其の驕りたかぶるを見る

のみと、

雨雪浮浮。見睨日流。如蠻如髦。我是用憂。

蠻は南蠻なり、髦は西夷の総名なり、浮々は猶濼々と云ふがごとし、言ふこゝろは、雪ふること浮々として盛んなりと雖も、日を見れば則ち釋けて流る、今王九族の怨みを消すること能はず、殘忍刻薄にして、南蠻西夷の親みなきが如し、衆人皆叛き、親戚皆離る、我れ是れを以て憂ふるなりと、

苑 柳

有苑者柳。不尙息焉。上帝甚蹈。無自暱焉。俾予靖之。後予極焉。○有苑者柳。不尙惕焉。上帝甚蹈。無自察焉。俾予靖之。後予邁焉。○有鳥高飛。亦傳于天。彼人之心。于何其臻。曷予靖之。居以凶矜。

此の詩、古序に刺幽王也とあり、幽王暴虐にして親みなく、刑罰其の罪に中らず、故に諸侯王に朝せざるなり、

有苑者柳。不尙息焉。上帝甚蹈。無自暱焉。俾予靖之。後予極焉。

苑は木の茂れるなり、不は語辭なり、蹈は動なり、暱は近なり、靖は治なり、極は至なり

り言ふこゝろは、苑然として茂れる柳あれば道を行くの人皆其の陰に就きて休息することを願ふなり、王若し盛徳あらば天下の諸侯皆往きて朝せんことを願ふべし、然るに上帝なる我が王は、甚だ變動して、其の心恒ならず、妄りに人を刑罰して暴虐なれば、汝諸侯自ら往きて之れに親近すること勿れ、其の罪を得んことを恐る、王若し我れをじて其の國家を靖んじ治めしむるとならば、然る後我れ往きて力を盡し忠を盡すべきなりと、

有苑者柳。不尙惕焉。上帝甚蹈。無自察焉。俾予靖之。後予邁兮。

惕も亦息なり、察は病なり、邁は行なり、察とは王に朝するときは、予が身を病ましむるを謂ふ、詩の意、前の章に同じ、

有鳥高飛。亦傳于天。彼人之心。于何其臻。曷予靖之。居以凶矜。

傳も臻も皆至るなり、矜は危なり、言ふこゝろは、鳥の飛ぶこと高しと雖も、亦必ず天に至りて止まる、彼の幽王の心常なくして、何くに往きて止まるや、其の至る所を知らざるなり、我れ若し王に朝せば、王我れをして事を治めしめ、尋ぎて又我れを罪し、我れを處するに凶危の道を以てせんとなり、

都人士

彼都人士。狐裘黃黃。其容不改。出言有章。行歸于周。萬民所望。○彼都人士。臺笠緇撮。彼君子女。綢直如髮。我不見兮。我心不說。○彼都人士。充耳琇實。彼君子女。謂之尹吉。我不見兮。我心苑結。○彼都人士。垂帶而厲。彼君子女。卷髮如蠶。我不見兮。言從之邁兮。○匪伊垂之。帶則有餘。匪伊卷之。髮則有旃。我不見兮。云何盱矣。

此の詩古序に周人刺衣服無常也とあり、周人とは京師畿内の人を謂ひ、衣服無常とは定めぬ如くせざるを謂ふなり、夫の衣服は身の章にして、先王民の俗を齊くし、等威を辨する所以なり、京畿は四方の模範と爲る所、然るに幽王の時、都人の衣服常なし、是れ詩人の刺りを作す所なり、

彼都人士。狐裘黃黃。其容不改。出言有章。行歸于周。萬民所望。

彼は明王を指して言ふ、都は人の聚り居る所、王城の在る所を謂ふ、士は男子の通稱、周は忠信なり、言ふこゝろは、思ふ、昔し明王の時、都邑の人士、狐の裘を服し、黄々として禮法の服なり、其の動作容儀、常ありて改めず、言妄りに口より出さず、出だ

せば必ず文章ありて賤しからず、其の行ふ所、一に忠信に歸す、四方の民、皆仰き望む所なりと、

彼都人士。臺笠緇撮。彼君子女。綢直如髮。我不見兮。我心不說。

臺は夫須なり、和名すげと曰ふ、臺笠はすげの笠なり、緇撮は黒き布にて作りたる小冠なり、緇は密なり、上章の狐裘は、上に在るの人を言ひ、此の章の臺笠緇撮は、下に在るの人を言ふ、古へ明王の時、都人の下に在る者、臺笠緇撮するを見れば、其の節儉なること知るべし、下に在る者の言行、一々得て而して詳かにす可らず、唯其の服飾を見れば、則ち其の俗亦知るべし、又彼の都人の家女を見れば、首に在るの髮、稠密にして直く、飾りをも施さざるなり、我れ今復此くの如き士女の德行を見ることが得ず、心之れを思うて悦ばざるなりと、

彼都人士。充耳琇實。彼君子女。謂之尹吉。我不見兮。我心苑結。

琇は美石なり、尹は正なり、苑は猶屈のごとし、言ふこゝろは、古へ明王の時、都邑の貴人、琇の美石を以て耳に充て、君子の徳あり、又其の家女は、操行正直にして善なり、我れ今復此くの如きの士女を見ず、故に我が心苑然と盤屈し、繩の結びて解け

ざるが如しとなり。

彼都人士。垂帶而厲。彼君子女。卷髮如蠶。我不見兮。言從之邁。

厲は裂の字の假借なり、裂は縉の餘りなり、蠶は人を整す蟲の名、其の尾曲りて末揚がりたり、言ふこゝろは、古へ明王の時、彼の都邑の人士、縉を以て帶と爲し、其の餘りを垂れ、服の飾り常あり、又其の女子は、髮を巻きて末の曲がりたること、蠶の尾の如く、容儀法あり、今の士女、衣服容儀の常なきが如くならず、我れ今復古への士女の儀飾を見ることが得ず、苟も之れを見ることが得ば、之れに従ひ行かんことを願ふなり。

匪伊垂之。帶則有餘。匪伊卷之。髮則有旗。我不見兮。云何盱矣。

旗は揚なり、盱は病なり、言ふこゝろは、古への人士、故らに此の帶を垂るゝに非ず、禮に於て帶自ら餘りあるのみ、女故らに此の髮を巻くに非ず、皆其の自然に因る、今衣服の常なきは、亦徳行の常なきを以てなり、我れ今復古への服飾を爲す者を見ざれば、我が心をして病ましむとなり。

毛 詩

采 綠

終朝采綠。不盈一匊。予髮曲局。薄言歸沐。○終朝采藍。不盈一襜。五日爲期。六日不詹。○之子于狩。言韞其弓。之子于釣。言綸之繩。○其釣維何。維魴及鱖。維魴及鱖。薄言觀者。

此の詩、古序に刺怨曠也とあり、怨曠とは、内に怨女なく、外に曠夫なしの義にて、怨女曠夫あるを刺るなり、幽王人を使ふこと道なし、故に詩人、閨怨に託して之れを刺る、古へ民の力を用ゐること、歳に三日に過ぎず、新たに昏姻する者は、三月の間、政に従はず、其の私を恤むなり、然るに今、其の室家をして久しく睽き離れ、婦人をして怨みを衒ましむ、故に聖人、此の詩を録し、王道は人情に本づくことを明かにするなり。

終朝采綠。不盈一匊。予髮曲局。薄言歸沐。

終朝は、且より食時までの間を謂ふ、綠は草なり、和名かりやすと曰ふ、一匊は、兩手にて採る所を謂ふ、曲局は、まがるなり、言ふこゝろは、終朝此の綠葉を採りて、其の一匊に滿つること能はざる者あり、是れ此の人、志、他に在るなり、婦人終日家事を

毛

詩

務めんとして、其の一事を成すこと能はざる者あり、此れ婦人の志、夫を念ふが故なり、是れを以て我が愛ひの甚だしき、容飾を爲すに暇あらざれば、其の髪をも洗はず、徒らに曲局するのみ、今我が夫の將に歸らんとするを知る、髪を洗ひて之れを待たんとなり、

終朝采藍。不盈一擔。五日爲期。六日不詹。

藍は染草に用ゐるものなり、詹は至なり、詩の意、前章に同じく、我が夫五日にして歸るべしと云ひしも、六日に至り、未だ歸り來らずとなり、之子于狩。言韋其弓。之子于釣。言綸之繩。

婦人既に夫を思ひて見ることを得ず、之れに隨ひて行かざりしことを悔ゆるなり、言ふことゝろは、我が夫往きて狩りせば、我れ當に之れか爲めに其の弓を韋にし、是れ射訖りて弓を弛べ、之れを韋中に納むるなり、我が夫往きて釣りせば、我れ當に之れに従ひ、絲を釣竿に繫ぐべきなり、我が之れに隨ひて行かざりしことを悔ゆるとなり、

其釣維何。維魴及鱖。維魴及鱖。薄言觀者。

魴鱖のこと前に出づ、魴はまながつをの類、鱖はさけの類なり、此の章、我が夫の技藝あることを陳ぶるなり、釣を言ひて狩りのことを兼ねたり、夫の釣るときは、必ず魴鱖を得ん、魴か鱖か、聊か之れを観ることを得ば、少しく我が心を慰めんとなり、

黍苗

芄芄黍苗。陰雨膏之。悠悠南行。召伯勞之。○我任我輦。我車我牛。我行既集。蓋云歸哉。○我徒我御。我師我旅。我行既集。蓋云歸處。○肅肅謝功。召伯營之。烈烈征師。召伯成之。○原隰既平。泉流既清。召伯有成。王心則寧。

此の詩、古序に刺幽王也とあり、幽王不仁にして、天の陰雨を以て萬物を潤すが如く、下民を恤むこと能はず、其の下の卿士も、召伯の如く、職を務むること能はざるを刺るなり、召伯は召康公の後、召穆公なり、

芄芄黍苗。陰雨膏之。悠悠南行。召伯勞之。

芄々は長大の貌、言ふことゝろは、芄々たる長大のものは、是れ黍の苗なり、此の苗の

我任我輦。我車我牛。我行既集。蓋云歸哉。

任は負ひ荷ふなり、輦は人の挽く車なり、蓋は皆なり、言ふことゝるは、召伯の南方に
行くに當りて曰はく、凡そ我が任を負ふ者、我が車を挽く者、我が車を將くる者、我
が牛を牽く者、是の行に於て、謝の營築既に成らば、皆歸るべし、久しく汝を勞する
ことを爲さずとなり、今王民をば用て休止することなきを刺るなり。

我徒我御。我師我旅。我行既集。蓋云歸處。

徒は歩行する者、御は車に乗る者、五百人を旅と曰ひ、五旅を師と曰ふ、諸侯の行く
ときは師従ひ、卿行くときは旅従ふ、召伯は天子の卿なるが故に、人數諸侯に同じ、
詩の意、前の章に同じ。

肅肅謝功。召伯營之。烈烈征師。召伯成之。

肅々は嚴正の貌、謝は邑の名、烈々は威武の貌、營は治なり、征は行なり、言ふことゝる
は、肅々として整へる謝邑の城郭宮室は、召伯之れを營し、民を勞せずして之れを
治め、烈々と武勇なる征師を以て疆域を治むることは、召伯能く其の功を成就し
たりとなり。

原隰既平。泉流既清。召伯有成。王心則寧。

土の治まるを平と曰ひ、水の治まるを清と曰ふ、召伯謝邑を治め作り、原の高き、隰
の卑き、各之れを平かにし、水利を修めて、流るゝ泉を田に灌ぎ、其の功既に成りて、
宣王の心則ち寧しとなり、是れ今の君臣、其の功なくして位に安んずるを刺るな
り。

隰桑

隰桑有阿。其葉有難。既見君子。其樂如何。○隰桑有阿。其葉有沃。既見
君子。云何不樂。○隰桑有阿。其葉有幽。既見君子。德音孔膠。○心乎愛
矣。遐不謂矣。中心藏之。何日忘之。

此の詩古序に刺幽王也となり幽王の時小人用ゐられて位に在り君子は退けられて山林に在るが故に若し君子に遇ふことを得ば心を盡して之れに事へんとを願ふなり

隰桑有阿其葉有難既見君子其樂如何

阿は美はしき貌難は盛んなる貌言ふころは隰中に在る桑の枝阿然として美はしく其の葉は則ち難然として盛んなり其の下以て日を蔽ふべく往きて息ふ者暑を避けて涼を得べし是れ野に在るの君子美德ありて人を覆ひ養ふ可ければ之れに事ふる者其の利を蒙むるに比するなり隰中の桑は盛んなること此くの如しと雖も原上の桑は則ち然ること能はず猶野中の君子徳此くの如しと雖も位に在るの小人は人を養ふこと能はざるがごとし故に今野に在るの君子を得て之れに事へんことを思ふ若し此の野に在るの君子を位に置くことを得ば其の樂み如何ぞやと其の樂みの甚だしきを謂ふなり

隰桑有阿其葉有沃既見君子云何不樂

沃は柔なり詩の意前の章に同じ

隰桑有阿其葉有幽既見君子德音孔膠

幽は黒色緑りの色の深きを謂ふなり膠は固なり君子位に在れば諸民之れに歸し其の教令の行はるゝこと堅固なるを言ふ詩の意前の章に同じ

心乎愛矣遐不謂矣中心藏之何日忘之

遐は胡なり謂は猶告のごとし藏は善なり蓋し古へ唯臧の字あり後人始めて卿を加ふるなり言ふころは心に君子を慕ひ愛せば何ぞ之れに告げざらんや中心に之れを臧しとせば何れの尸か之れを忘れん忘るゝ日はあるまじとなり

白華

白華菅兮白茅束兮之子之遠俾我獨兮○英英白雲露彼菅茅天步艱難之子不猶○澎池北流浸彼稻田嘯歌傷懷念彼碩人○樵彼桑薪印烘于熤維彼碩人實勞我心○鼓鐘于宮聲聞于外念子懔懔見我邁邁○有鶯在梁有鶴在林維彼碩人實勞我心○鴛鴦在梁戢其左翼之子無良○二三其德○有扁斯石履之卑兮之子之遠俾我疚兮

此の詩古序に周人刺幽后也とあり然れども漢書の註に此の序を引きて周人刺

毛

幽王廢申后也。に作る。然れば序文必ず脱誤あるべし。幽王初め申國の女を娶りて

后と爲す。後に褒姒を得て其の色に溺れ申后を黜けたり。故に下國の諸侯皆之れに倣ひ、妾を以て妻と爲し、庶子を以て嫡子に代ふるものあり。然れども王治めて之れを正すこと能はず。周人爲めに此の詩を作りて之れを刺るなり。

白華菅兮。白茅束兮。之子之遠。俾我獨兮。

白華は草の名。茅の類なり。水に漚せるを菅と爲す。之れは幽王を指す。言ふこゝろは、人あり、白華を刈り、漚して菅と爲し、又白茅を取りて之れを束ねたり。二つの者、潔白を以て束ねて用を爲すを以て、婦人徳あるを以て、納れて妻と爲し、又禮を以て之れを束ね、二つの者、恩禮を以て成るに喩ふ。今幽王我れを遠ざけ、我れをして獨りならしむ。菅て草菅にも如かざるなり。

英英白雲。露彼菅茅。天步艱難。之子不猶。

英々は白雲の貌。歩は行なり。猶は可なり。言ふこゝろは、英々たる白雲は露と爲りて降り、彼の菅と茅とを潤はし、之れをして長成することを得せしむ。天地の氣は、微なる物と雖も覆ひ養はざることなし。然るに天何ぞ獨り艱難を我が申后に行

詩

毛

滂池北流。浸彼稻田。嘯歌傷懷。念彼碩人。

ひ、幽王をして申后を黜け、覆ひ養はるゝことを得ざらしむるやとなり。

滂は流るゝ貌。嘯歌は口をすぼめて歌ふなり。言ふこゝろは、滂然たる細き流れも北方に流れ、能く稻田を浸し潤し、其の稻をして生殖せしむ。王の申后に恩惠なきは、滂池の水にも如かざるなり。故に嘯き歌ひ傷み懷うて、彼の申后を思ふなり。碩人を以て褒姒と爲すは非なり。

樵彼桑薪。叩烘于熤。維彼碩人。實勞我心。

叩は我なり。烘は燎なり。盛んに火を焚くなり。熤は釜なきの竈。即ち火爐なり。言ふこゝろは、人あり、彼の桑の薪を取りて、米を炊き肉を煮るの用に供せず。徒らに火爐に焚き捨つるは、其の所を失ふなり。幽王彼の申國の女を納れて后と爲さず、反つて之れを黜け、卑賤の事を爲さしむ。申后の徳ある、宜しく王后の位に居るべくして、今反つて卑賤に居る、其の宜しきに非ざるなり。維れ彼の碩人、即ち申后の爲めに我が心を勞すとたり。

鼓鐘於宮。聲聞于外。念子懔懔。視我邁邁。

懐々は愛ふるなり、適々は説ばざるなり、言ふこゝろは、人あり、鐘を宮中に撃ち鳴らしせば、其の聲、必ず外に聞ゆ可し、鐘を撃ちて其の聲の外に聞えざるを欲するも、得可らず、王既に宮中に在りて、申后を黜けたれば、其の風、天下に流れ、天下の人をして王に倣はざらしめんとするも、亦得可らざるなり、而して申后は、幽王を念ふこと懐々として、之れを諫め正さんと欲すと雖も、王に在りては、申后を視ること適々とした、何ぞ其の言ふ所を説びざるやとなり、

有鴛在梁。有鶴在林。維彼碩人。實勞我心。

鴛は秃鴛と曰ふ、鶴に似て大なり、鴛の性は貪りて、鶴の性は潔し、言ふこゝろは、今鴛は梁に在りて魚にあき、鶴は林に在りて餌に飢えたり、幽王褒姒を寵愛して申后を飢やすに比す、維れ我が申后の爲めに心を勞する所以なりと、

鴛鴦在梁。戢其左翼。之子無良。二三其德。

鴛鴦の解前に見ゆ、戢は斂なり、鳥の雌雄を知らんと欲せば、右の翼を以て左りを掩ふは雄鳥にして、左りの翼を以て右を掩ふは雌鳥なり、陰は陽に下り、陽は陰に下る、夫婦の道も亦禮義を以て相下り、以て家道を成すなり、今幽王何ぞ申后に下

りて夫婦の義を爲さざるや、幽王は我が申后の善意に答ふることなく、其の心を變易し、其の行ひを二三にして、鴛鴦にも及ばずとなり、

有扁斯石。履之卑兮。之子之遠。俾我疢兮。

扁は乗石の貌、王の車に乗るとき、此の石を履みて乗るなり、疢は病なり、詩人王の申后を黜くるを以ての故に、其の昔し乗る所の石を見て、之れを傷みて曰はく、此の石や、申后嘗て之れを履む、今忽然と黜けられて卑く、復此の石を履むことを得ず、幽王の我が申后を遠ざくるは、我れをして疢ましむる所以なりと、

黃鳥

綿蠻黃鳥。止于丘阿。道之云遠。我勞如何。飲之食之。教之誨之。命彼後車。謂之載之。○綿蠻黃鳥。止于丘隅。豈敢憚行。畏不能趨。飲之食之。教之誨之。命彼後車。謂之載之。○綿蠻黃鳥。止于丘側。豈敢憚行。畏不能極。飲之食之。教之誨之。命彼後車。謂之載之。

此の詩、古序に微臣刺亂也とあり、當時の大臣卿大夫、皆仁愛の心なく、多く微賤の臣下を忘れ、之れと共に行くに至りても、道に在りて飲食を與へず、事あれども教

へず、疲るれども車に載せず、大は小を思はず、尊き者は賤しき者を憐まず、是れ國政昏亂の致す所なれば之れを刺るなり、

縣蠻黃鳥。止于丘阿。道之云遠。我勞如何。飲之食之。教之誨之。命彼後車。謂之載之。

縣蠻は黃鳥の貌、丘阿は丘の曲りたる内を謂ふ、言ふこゝろは、縣蠻として小なるものは、彼の黃鳥なり、黃鳥の飛び行くや、丘阜の曲れる處に止まりて自ら託せり、我が微賤なる小臣、亦當に大臣の仁厚なる者を撰みて、自ら之れに依るべきなり、而して大臣の使ひするときは、未介と爲りて從ひ行く、其の道亦遠し、我れ疲勞するあらば、則ち卿大夫の恩、宜しく如何すべきや、渴すれば則ち之れに飲ましむべく、飢うれば則ち之れに食はしむべく、事未だ至らざれば、則ち之れを教へ、事に臨みては、則ち之れを誨へ、車敗るれば、則ち後車に命じて之れに乗らしむべし、大臣の小臣に於ける、其の義當に然るべし、今大臣何ぞ我れを遺れて、此くの如くせざるやとなり、

縣蠻黃鳥。止于丘隅。豈敢憚行。畏不能趨。飲之食之。教之誨之。命彼後

毛

詩

車。謂之載之。

丘隅は丘の角なり、言ふこゝろは、長途を歴て勞るゝとも、行くことを憚り難んずるに非ず、唯時に及びて早く趨り至ること能はざるを畏るゝなりと、餘は前の章に同じ、

縣蠻黃鳥。止于丘側。豈敢憚行。畏不能極。飲之食之。教之誨之。命彼後車。謂之載之。

極は至なり、詩の意前の章に同じ、

瓠葉

幡幡瓠葉。采之亨之。君子有酒。酌言嘗之。○有兎斯首。炮之燔之。君子有酒。酌言獻之。○有兎斯首。燔之炙之。君子有酒。酌言醑之。○有兎斯首。燔之炮之。君子有酒。酌言醕之。

此の詩、古序に大夫刺幽王也とあり、幽王賓客の禮を棄て、行ふこと能はず、賓客を饗するが爲めに畜ふ所の牛羊ありと雖も、之れを用ゐず、故に詩人古への人微薄の物と雖も、禮を廢せざることを思ひて、之れを刺るなり、

毛

詩

幡幡瓠葉。采之亨之。君子有酒。酌言嘗之。

幡々は瓠葉の貌。瓠はふくべなり。瓠葉は庶人の用ある菜にして、有位の人の菜に非ず。亨は熟するなり。君子は庶人の中にて賢行ある者を謂ふ。言ふことろは、幡々たる瓠葉あれば、人をして之れを取らしめ、又之れを烹て以て酒を飲むの、藎と爲し、農事畢りて酒あれば、父兄室人と共に之れを飲む、是れ相親愛する所以にして、微薄なるが故に禮を廢せざるなり。嘗とは主人未だ賓に獻せずして、先づ自ら之れを嘗むるなり。

有兔斯首。炮之燔之。君子有酒。酌言獻之。

毛のまゝに焼くを炮と曰ひ、火に入れて焼くを燔と曰ふ。言ふことろは、一首の兔あれば、此の物微なりと雖も、或は炮し、或は燔し、之れを以て肴と爲し、酒あれば酌みて賓客に獻すとなり。

有兔斯首。燔之炙之。君子有酒。酌言酢之。

炙は串に貫きて炙るなり。酢は賓より主人に酬ゆるなり。詩の意、前の章に同じ。有兔斯首。燔之炮之。君子有酒。酌言醢之。

醢は主人賓の酢する爵を舉げて又自ら飲み、再び賓に與ふるを謂ふ。詩の意、前の章に同じ。

漸漸之石

漸漸之石。維其高矣。山川悠遠。維其勞矣。武人東征。不皇朝矣。○漸漸之石。維其卒矣。山川悠遠。曷其没矣。武人東征。不皇出矣。○有豕白蹢。烝涉波矣。月離于畢。俾滂沱矣。武人東征。不皇他矣。

此の詩、古序に下國刺幽王也とあり、幽王無道なるが爲めに、西戎北狄共に之れに叛き、荆舒の貢又至らず、困りて大將に命じて征伐せしむ、士卒久しく外に在り、苦み怨みて此の詩を作るなり。

漸漸之石。維其高矣。山川悠遠。維其勞矣。武人東征。不皇朝矣。

漸々は山の石高く峻しき貌、皇は暇なり、言ふことろは、今天子の命を受けて、戎狄を征伐する道すがら、漸々と山の石險峻にして又高大なり、且山と川との間、遙に隔たりて遠きに由り、勞苦に勝へず、又其の武人將帥、士卒を率ゐて、東の方、荆舒の國を征伐し、軍役に疲れて病み、朝夕の暇もあらざるなりと。

漸漸之石。維其卒矣。山川悠遠。曷其沒矣。武人東征。不皇出矣。

卒は竟なり、没は盡なり、漸々たる石は、はてもなく、山川の間は盡きざるを謂ふなり、出は險阻を出づるの義なり、詩の意、前の章に同じ、

有豕白蹄。烝涉波矣。月離于畢。俾滂沱矣。武人東征。不皇他矣。

蹄は蹄なり、烝は進なり、離は月の宿る處を謂ふ、畢は星の名、滂沱は大雨を謂ふ、言ふこゝろは、豕の進みて波を涉り、月の畢宿に離るは、皆將に大雨あらんとするの徵なり、此の徵候あれば、果して大雨を致し、其の水をして滂沱として盛んならしめん、士卒外に在りて久しく勞るゝのみならず、又大雨に遇ふ、甚だ困むを言ふなり、且武人將帥、東征して病めるが故に、他事を爲すに暇あらざるなりと、

茗之華

茗之華。芸其黃矣。心之憂矣。維其傷矣。○茗之華。其葉青青。知我如此。不如無生。○牂羊墳首。三星在罍。人可以食。鮮可以飽。

此の詩、古序に大夫閔時也とあり、幽王の時、四方の戎狄、交々來りて中國を侵すに由り、諸侯に命じ、軍を出して之を防がしめらる、且饑饉ありて、人民困窮するが故

に、君子周の將に亡ひんとするを悲み、己れ此の時に逢ふことを傷みて、是の詩を作るなり、

茗之華。芸其黃矣。心之憂矣。維其傷矣。

茗は草の名、和名のうぜんかつらと曰ふ、芸は黄色の盛んなるなり、言ふこゝろは、茗の華は紫赤にして多かりしが、今に至りては、芸として黄色と爲り、衰へて將に落ちんとす、周室の諸侯は、本、兵強く國盛んなりしに、今師旅衰へて、其力微弱なり、茗の華落つれば、幹のみ残り立ち、諸侯の軍敗るれば、京師孤弱ならん、國の日に侵し削らるゝを見て、心に憂ひ傷むとなり、

茗之華。其葉青青。知我如此。不如無生。

言ふこゝろは、茗の華、己に落つれば、其の葉のみ青々たり、諸侯微弱にして、王臣當に出づべきに喩ふ、我が王政の此くの如きを知らば、生けることなきに如かずと、今世の難に遇ふを憂ふるの甚だしきなり、

牂羊墳首。三星在罍。人可以食。鮮可以飽。

牂羊は牝羊なり、墳は大なり、三星は心星なり、罍は魚を取る梁なり、言ふこゝろは、

毛

今群羊にして首の大なる者を求めんとするも、必ずある可らず、三星の光り、魚鬪の中に在りと雖も、須臾にして去る可く、久しきこと能はざるなり、群羊墳首は、周の既に衰ふる、其の大に興らんとを求むるも、此の理なきに喩へ、三星在鬪は、周の亡ぶること久しからざるに喩ふるなり、國の治まる日は少く、亂る日は多し、治世は豊かに食ひて飽き、亂世は食に乏くして飢う、故に人食を得べしと雖も、飽くべきこと少きなりと、

何草不黃

何草不黃。何日不行。何人不將。經營四方。○何草不玄。何人不矜。哀我征夫。獨爲匪民。○匪兕匪虎。率彼曠野。哀我征夫。朝夕不暇。○有芃者狐。率彼幽草。有棧之車。行彼周道。

此の詩、古序に下國刺幽王也とあり、幽王の時、兵亂息まずして、民の苦み甚だし、幽王之れを恤ひず、民を視ること禽獸の如し、君子之れを憂ひて、此の詩を作るなり

何草不黃。何日不行。何人不將。經營四方。

言ふこゝろは、兵亂止まざるに由り、歳の初め、草の生ずる時より、征役に従ひ、歳の

詩

毛

終り、草の葉の黃なる時に至りても、未だ家に歸ること能はず、日として行かざることなく、又何人と雖も、征役に従はざる者なく、人として戦争の苦みを免るゝ者なし、此の如きものは、幽王四方を經營するが爲めなりと、

何草不玄。何人不矜。哀我征夫。獨爲匪民。

玄は赤黒色なり、矜は驕なり、妻なきを謂ふ、言ふこゝろは、草黃なるの時、既に歸ることを得ず、又明年の春に至る、衆草將に生ぜんとして玄なり、而して軍に従ふ者、時を過ぎて皆歸ることを得ず、故に之れを矜と謂ふ、久しく夫婦の道を失ふを以てなり、哀しいかな、我が征行の夫、豈獨り民に非ずとせんや、若し是れ民ならば、上に在る者、之れを仁愛して、必ず久しく役使用するに至らざるべしとなり、

匪兕匪虎。率彼曠野。哀我征夫。朝夕不暇。

言ふこゝろは、兕虎ならば、彼の空しき野原に居るべきなれども、人をして何ぞ久しく曠野の中に居らしむるや、王の民を視ること禽獸の如きなり、哀しいかな、我が征行の夫、朝夕驅り使はれて、少しの暇もなしとなり、

有芃者狐。率彼幽草。有棧之車。行彼周道。

芄は小獸の貌、棧車は役車と曰ひて、貨物を載する車なり、言ふこゝろは、芄たる狐は、本、是れ草中の獸なれば、彼の幽草に循ふべし、今我れ棧の役車あり、以て周道の上を行き、常に外野に在り、禽獸に非ずして、何ぞ狐の幽草に在ると同じきやと之れを傷むなう、

大雅

説小雅に見えたり、

文王

文王在上。於昭于天。周雖舊邦。其命維新。有周不顯。帝命不時。文王陟降。在帝左右。○亶亶文王。令聞不已。陳錫哉。周侯。文王孫子。文王孫子。本支百世。凡周之士。不顯亦世。○世之不顯。厥猶翼翼。思皇多士。生此王國。王國克生。維周之楨。濟濟多士。文王以寧。○穆穆文王。於緝熙敬止。假哉天命。有商孫子。商之孫子。其麗不億。上帝既命。侯于周服。○侯服于周。天命靡常。殷士膚敏。裸將于京。厥作裸將。常服黼冔。王之蓋臣。無念爾祖。○無念爾祖。聿脩厥德。永言配命。自求多福。殷之未喪師。克

配上帝。宜鑒于殷。駿命不易。○命之不易。無遏爾躬。宣昭義問。有虞殷自天。上天之載。無聲無臭。儀刑文王。萬邦作孚。

是れより、以下、文王有聲に至るまで十篇を文王之什と爲す、内、文王より靈臺に至る八篇を文王の詩と爲し、下、武文王有聲の二篇を武王の詩と爲す、此の詩、古序に文王受命作周也とあり、命を受けて西伯と爲るを謂ふなり、古序、文王以下の諸詩、俱に未だ何人の作たることを言はず、唯、呂氏春秋、此れを引き、周公の詩と爲す、今其の辭旨を味ふに、精融醇粹、文王の徳を述べて、以て後人に示すもの、孔子之れを刪定して、以て大雅の首とす、真に周公の制作なるべし、

文王在上。於昭于天。周雖舊邦。其命維新。有周不顯。帝命不時。文王陟降。在帝左右。

在上は民の上に在るなり、於は嘆辭なり、昭は見なり、不顯は顯なり、不時は時なり、時は是なり、言ふこゝろは、文王初めて西伯たりしとき、民の上に在りて、美道を施し行ひ、民に功ありしに由り、其の徳、天に見はれ、天の嘉みする所と爲りて、天命を得たり、周は大王より以來、此の地に居りて、舊き邦なりと雖も、文王に至り、天命を

毛

受けて、新たなる國と爲るなり、文王天子と爲らずと雖も、天下を三分して、其の二を有ち、以て殷に服事す、天の周家に命ずるは、實に文王の時に肇まり、其命維新とは、周の王業、文王に始まるを謂ふなり、天已に文王に命ず、有周の徳顯かなるが故に、天帝是れに命ずるなり、而して文王俯仰の間、常に天帝の左右に在るが如く、文王の爲す所皆天意に當るを見るなり、蓋し天と人と遠きが如しと雖も、實は相通ず、文王の徳、純一にして常に帝の其の側に臨むが如くなれば、天の文王に命ずること、亦影の形に従ひ、響の聲に應ずるが如きなり、

亶亶文王。令聞不已。陳錫哉周。侯文王孫子。文王孫子。本支百世。凡周之士。不顯亦世。

亶々とは勉むるなり、裁は裁なり、裁は植なり、侯は維なり、本は宗子なり、支は庶子なり、言ふこゝろは、文王天の徳を敬ひ、勉めて倦まず、故に令善の聲譽ありて、日に人に稱せられ、已むときあらず、文王又大利を敷き陳ねて、子孫に賜ひ、周の國を植て、是れを以て徳澤後世に流れ、文王の孫と子と、皆受けて之を行ひ、宗子は則ち百世天子と爲り、庶子は則ち百世諸侯と爲り、管に子孫此くの如くなるのみならず、

詩

凡そ周の士たる者、即ち文王輔佐する者、みな光顯にして、亦其の祿を世すととなり、世祿は乃ち文王岐を治むるの法、周公既に此の詩を作りて、以て成王に告げ、亦併せて在位の人に曉すなり、

世之不顯。厥猶翼翼。思皇多士。生此王國。王國克生。維周之楨。濟濟多士。文王以寧。

毛

翼翼は恭敬の貌、思は語辭なり、皇は天なり、楨は幹なり、濟々は威儀多きなり、言ふこゝろは、此の世祿の臣、世々光明の徳ありて、其の道たる、翼翼と忠誠にして恭敬なり、此の臣あることを得る者は、天より周徳の盛んなるを以て、群賢をして之れを佐けしめんことを欲し、此の賢士を多くし、之れをして我が周國に生れしむ、我が周王の國、能く此の賢人を生じ、收めて之れを用ゐれば、則ち我が國家の楨幹と爲る、臣能く事に幹たれば、則ち國安し、此の濟々として威儀多きの衆士あり、文王此の臣の力に頼りて安寧なりと、

穆穆文王。於緝熙敬止。假哉天命。有商孫子。商之孫子。其麗不億。上帝既命。侯于周服。

詩

穆々は美なり、於にはほむる詞、緝熙は光明なり、假は固なり、麗は敷なり、言ふこゝろは、穆々として美なる者は文王なり、既に天子の容あり、於美なるかな、又光明の徳を敬し、其敬する所、甚だ堅固なり、是れ文王容止の間に見はるゝもの、敬に非ざるなきを言ふなり、故に天之れに命じ、商の孫子を有ちて般に代らしむ、商の孫子至りて多く、其の數徒に、一億に止まらず、億に過ぐるの數ありと雖も、紂の惡を爲すを以ての故に、上帝既に文王の後に命じ、商の孫子をして、周に歸して臣服せしむとなり、徳の盛んなる者は、衆を以て敵す可らず、文王の徳は衆の敵する所に非ざるなり。

侯服于周。天命靡常。殷士膚敏。裸將于京。厥作裸將。常服黼冔。王之蓋臣。無念爾祖。

膚は美なり、敏は疾なり、裸は濯鬻なり、祭りの初めに、爵鬻の酒を地に濯ぎて神を降すの禮なり、將は行なり、京は大なり、黼は白と黒となり、冔は殷の冠の名、無は助詞なり、蓋は進なり、言ふこゝろは、商の子孫既に衆多にして、今乃ち周に臣服せり、夫の商の族類を以て、變じて周の臣となるを見れば、則ち天命の常なきことを知るべし、周公此の天命の特む可らざるを言ひて、成王と其の在位の臣とを警め、般を以て鑒みと爲さんことを欲するなり、因りて又言ふ、商の子孫既に周の臣と爲りたる者、皆膚敏の才あり、周の京師に來りて、王の祭りを助くれば、則ち周に服して貳心なきこと知るべし、而して其の裸禮を行ふの時、尙般の冠を服す、冔は殷の冠にして、黼は則ち殷周の同じく服する所なり、是れ文王の寛なる所、若し文王疆を以て之れを服せば、當に其の衣冠を改めて、己れに従はしむべし、今乃ち般の冠を服すれば、其自から來り歸するを見るべし、文王徳を以て之を服し、之を以て之れを服せず、王、今臣を進めて之れを用ゐば、乃祖文王の賢俊を用ゐることを思へどなり。

無念爾祖。聿修厥徳。永言配命。自求多福。殷之未喪師。克配上帝。宜鑒于殷。駿命不易。

無は語助なり、聿は述なり、言は我なり、師は衆なり、駿は大なり、言ふこゝろは、王當に乃祖文王臣を進むるの法を念ひ述へて、其の徳を修め行ふべし、是れ永く我が行ひを天命に配合して違はざるに在るなり、又當に庶國に告ぐべし、爾庶國も勤

毛

めて徳教を修め、亦當に自ら多福を求むべしと、又殷を擧げて、戒めを爲して曰はく、殷の先祖成湯より帝乙に至るまで、未だ師衆を喪はざるの日、其の徳皆上帝の命に配して之れを行ふ、紂に至り、天命に配すること能はず、臣民をして叛きて我れに歸せしむ、王宜しく殷を以て鑒となし、其の王の賢愚を見て、以て己れの戒めど爲すべし、天の大命、改易す可らざるなりと、

命之不易。無遏爾躬。宣昭義問。有虞殷自天。上天之載。無聲無臭。儀刑文王。萬邦作孚。

遏は止なり、義は善なり、虞は度なり、載は事なり、刑は法なり、孚は信なり、言ふこゝろは、天の大命既に改易す可らず、故に常に須らく此の事を戒め懼るべし、獨り爾の躬に止まらしむることなく、後世をして長く之れを行はしめんことを欲す、後世をして永く之れを行はしむるは、當に善問を布き明かにし、又殷の興亡天よりすることを得るべし、然るときは、則ち天命を知る、因りて又天の傲ひ難きことを説きて曰はく、天の爲す所は、聲の聞くべきなく、臭の接すべきなく、其の事冥漠にして、傲はんとするに由なし、王之れに順はんと欲せば、則ち近く文王の道に法る

詩

べし、文王は天と徳を合するものなり、主能く文王の道を用るは、則ち天下皆信して之れに順はんとなり、

大明

明明在下。赫赫在上。天難忱斯。不易維王。天位殷適。使不挾四方。○摯仲氏任。自彼殷商。來嫁于周。曰嬪于京。乃及王季。維德之行。大任有身。生此文王。○維此文王。小心翼翼。昭事上帝。事懷多福。厥徳不回。以受方國。○天監在下。有命既集。文王初載。天作之合。在洽之陽。在渭之涘。文王嘉止。大邦有子。○大邦有子。俔天之妹。文定厥祥。親迎于渭。造舟爲梁。不顯其光。○有命自天。命此文王。于周于京。纘女維莘。長子維行。篤生武王。保右命爾。變伐大商。○殷商之旅。其會如林。矢于牧野。維予侯興。上帝臨女。無貳爾心。○牧野洋洋。檀車煌煌。駟驪彭彭。維師尙父。時維鷹揚。涼彼武王。肆伐大商。會朝清明。

此の詩古序に文王有明德、故天復命武王也とあり、文王明德あるにより、天復武王に命して天下の君たらしむるを言ふなり、

毛

詩

按ずるに此の詩二章三章は文王明德ありて天之れに命ずることを言ひ、四章以後は、武王明德ありて天復之れに命ずることを言ふ、父子相繼ぎ、二聖美を濟し、功高く徳顯かなり、故に大明と曰ふ、古序文王に於ては、明德と言ひて、天命と言はず、武王に於ては、天命と言ひて、明德と言はず、互に見はすなり、蓋し周の命、文王至徳を以て之れを凝結し、武王續ぎて之れを承く、文王宜しく王たるべくして王たらず、天の與ふるを固く辭す、至徳たる所以にして、天眷愈篤し、施いて武王に及ぶ、豈能く終に辭せんや、此れ周の天下を有つは、驟かに致すに非ずして、而して序の言ふ所精確なりと謂ふべし。

明明在下。赫赫在上。天難忱斯。不易維王。天位殷適。使不挾四方。

忱は信なり、挾は違なり、言ふこゝろは、文王此の明々の徳を施し行ひて、下に在れば、其の徴應赫々と著はれて、上天に在り、此れに由りて、天の祐くる所と爲り、紂を棄て、之れに命ぜらる、此くの如くなれば、則ち天の意亦信じ難し、王たること亦易からず、紂の居る所は、則ち天位にして、傳ふる所は、則ち殷の正適なれども、其の惡を爲すの故を以て、天より之れを棄て、教令をして四方に通達せさせしめ、四方

共に叛くなり、然らば天命は定まりたることなく、徳ある人に與ふるとなれば、得失は人に在りて、天に在らざるなりと、厚く文王の徳を美するなり。

摯仲氏任。自彼殷商。來嫁于周。曰嬪于京。乃及王季。維德之行。大任有身。生此文王。

此の章、聖人の世に生ずること偶然の數に非ざるを言ふ、摯は國の名、仲氏任とは任姓の中女なり、嬪は婦なり、母の家より言へば來嫁と爲し、夫の家より言へば曰嬪と爲す、互文なり、王季は大王の子、文王の父なり、大任は中任なり、身は懷孕なり、言ふこゝろは、殷商の諸侯摯國の君、任姓の中女、來りて周家に嫁し、王季に配して婦となり、能く婦道を盡し、王季と共に仁義の徳を行ふ、大任懷孕し、終月に至りて、文王を生む、傳へ言ふ、大任胎教あり、目に惡色を視ず、耳に淫聲を聽かず、口に放言を出さずと、信に此くの如くなれば、賢母と謂ふべきなり。

維此文王。小心翼翼。昭事上帝。聿懷多福。厥德不回。以受方國。

翼翼は恭慎の貌也、懷は來なり、回は違なり、方國は四方來附の國なり、言ふこゝろは、文王既に生長するの後、小心にして、慎み翼翼として、明かに上天に事へ、此の道

を述べ行ひ、多福を來さんことを思ひ、徳を修むるの心、未だ嘗て違ふことあらず、故に四方の國來りて之に歸附するを得たり、文王の徳ある、亦父母に由るなり、天監在下。有命既集。文王初載。天作之合。在洽之陽。在謂之涘。文王嘉止。大邦有子。

集は就なり、戴は識なり、合は配なり、洽と涓とは水の名なり、涘は水邊なり、嘉は美なり、言ふことゝろは、天の善惡を下に監みること分明にして、文王の盛徳を見、天命既に周に就る、文王生れて聖瑞あり、記驗する所あり、天之れが爲めに賢配を洽水の陽、渭水の涘に生じ、文王婚姻の嘉禮を議するの時に及び、果して大姫を大國の莘に得たり、是れ天意にして、人の能く爲る所に非ざるなり、

大邦有子。俛天之妹。文定厥祥。親迎于渭。造舟爲梁。不顯其光。

俛は瞻なり、瞻は譬なり、祥は善なり、言ふことゝろは、文王大姫の賢を聞きて之を美し、大邦の賢女あるを以て、猶上天の妹のごとしと爲す、天之妹とは、徳の天に繼ぐ可きを言ふなり、文王既に大姫の徳を以て天に配すべしと爲し、乃ち大姫の文徳あるを以て、此の嘉善の禮を定め、遂ひに親迎の禮を渭水に行ひ、浮橋を造りて大

姫迎をへたり、其の禮盛んにして光顯なりと、

有命自天。命此文王。于周于京。纘女維莘。長子維行。篤生武王。保右命爾。變伐大商。

纘は繼なり、莘は大姫の國なり、長子は長女なり、右は助なり、變は和なり、言ふことゝろは、天文王に周國の京に命じ、善美の匹配を生じ、先姑大任の女事を繼がしむる、維れ莘國に在り、莘國の長女、乃ち文王に配し、共に仁義を周京に行ふ、是を以て、天氣を大姫に降し、遂に厚く聖子武王を生む、武王の生まるゝ、既に美氣の厚きを受け、天より之れを保んじ助け、武王に命じて、大商を伐つ、事を協和せしめ、時を待ちて之れを伐たしむとなり、

殷商之旅。其會如林。矢于牧野。維予侯興。上帝臨女。無貳爾心。

旅は衆なり、矢は陳なり、牧野は地名なり、言ふことゝろは、紂、其の師衆を陳ぬること、林木の盛んなるが如く、牧野に集りて、武王を禦ぐと雖も、天下の人皆殷に叛きて、周に歸せんことを欲するが故に、我れを興して、殷を滅さんとし、紂の用を爲す者なし、直に敵人の意向此くの如くなるに非ず、又上天既に武王を照臨し、之れを保

護するが故に、其の將ある所の衆、皆二心を懐く者あるなし、武王の殷に勝つものは、徳を以てして力を以つてせざることを言ふなり、

牧野洋洋。檀車煌煌。駟騶彭彭。維師尙父。時維鷹揚。涼彼武王。肆伐大商。會朝清明。

毛
洋々は廣なり、檀車は兵車なり、煌々は明なり、騶は駟馬の白腹なるを謂ふ、駟馬とは赤色にして鬣の黒きなり、彭々は強く盛んなる貌なり、師は大師なり、尙父は尙ぶ可く父とす可きを言ふ、鷹揚は鷹の飛揚するが如きなり、涼は佐なり、肆は疾なり、會は甲なり、言ふことゝるは、紂と戦ふの處、牧地の野、洋々として廣く、檀木の兵車を此の廣大の野に陳ね、煌々として皆鮮明なり、又駟騶の牡馬に駕し、彭々として皆強盛なり、維れ師尙父といふ者あり、其の勇略鷹の飛揚するが如く、身大將と爲り、彼の武王を佐く、車馬強盛にして、將帥勇武、以て疾く往きて、彼の大商を伐ち、甲子の朝に値り、此の一朝を終らずして、虐紂を伐ち殺し、天下大に清明にして、復濁亂の政なしとなり、
此の詩、大要商の亡ふる所以、周の興る所以を言ふ、商の亡ふるは、天之れを亡ぼす

なり、周の興るは、天之れを興すなり、天何ぞ商を亡ぼして周を興すに心あらんや、天未だ嘗て商を亡ぼすに心あらず、而して商の任使する所の者、四方の心に合はざれば、則ち商の亡ぶる一日に非ざるなり、天未だ嘗て周を興すに心あらずして、而して文王の天を得る、已に王季文王の時に基づく、則ち周の興ること一日に非ざるなり、詳かに此の詩を味へば、武王よりして王季を言ひ、以て周家積累の久しきを見はし、王季を言ひて大任に及び、文王を言ひて大姒に及び、以て文王の聖人たる所以は、王季を以て父と爲し、大任を以て母となすに由ることを見はす、中庸に武王を論じて曰はく、無憂者、其惟文王乎、以王季爲父、以武王爲子、父作之、子述之、武王纘大王王季文王之緒、一戎衣而有天下、身不失天下之顯名、中庸の言、正に詩の意と合へり、而して此の詩、猶大任大姒の賢に及ぶは、周人家を齊ふるの治、此くの如きの久しきを見めす所以なり、

縣

縣縣瓜瓞。民之初生。自土沮漆。古公亶父。陶復陶穴。未有家室。○古公亶父。來朝走馬。率西水滸。至于岐下。爰及姜女。聿來胥宇。○周原膺膺。

董荼如飴。爰始爰謀。爰契我龜。曰止曰時。築室于茲。○迺慰迺止。迺左迺右。迺疆迺理。迺宣迺啟。自西徂東。周爰執事。○乃召司空。乃召司徒。俾立室家。其繩則直。縮版以載。作廟翼翼。○揀之陜陜。度之薨薨。築之登登。削屢馮馮。百堵皆興。鼙鼓弗勝。○迺立臯門。臯門有伉。迺立應門。應門將將。迺立冢土。戎醜攸行。○肆不殄厥愠。亦不隕厥問。柞械拔矣。行道兌矣。混夷駟矣。維其喙矣。○虞芮質厥成。文王蹶厥生。予曰有疏附。予曰有先後。予曰有奔奏。予曰有禦侮。

此の詩古序に文王之興本由大王也とあり、大王始めて岐山に遷り、人心歸附し、肇めて王迹を基し、文王之れに因りて、以て天命を受くることを言ふなり。

縣縣瓜瓞。民之初生。自土沮漆。古公亶父。陶復陶穴。未有家室。

縣々は絶えざる貌、大なるを瓜と曰ひ、小なるを瓞と曰ふ、沮漆は二水の名、土は居なり、古公は文王の祖大王のことなり、亶父は其の字なり、復の字、説文に窰に作る、窰は地室なり、地上に於て、土を累ねて屋を作る、戸牖ありて棟宇なし、陶穴は土室なり、即ち陶を以て土中に贅し、土氣を防ぎて之れに居るなり、言ふこゝろは、瓜の

生ずる、皆小よりして大に至る、始め瓞なりと雖も、繼ぎて漸く瓜と成る、瓜成りて又復瓞を生し、縣々として絶えず、周の先祖后稷は、帝嚳の後にして、封ぜられて諸侯と爲り、後更に豳國に遷り、中ころ少しく衰微せしも、大王に至りて、其の徳漸く盛んなり、其の民の心を得て、初めて此の王業を生ず、此の事、何れの時に在るや、則ち沮漆二水の旁に居る時よりして然り、而して沮漆の傍に居る者は、何人たりやと云へば、乃ち是れ我が文王の先祖、古公亶父、漆沮の傍に於て、宅舎を作り、纔に陶復陶穴を作りて之に居る、未だ敢て廣大の家室あらざりしなり、孟子曰はく、昔者大王居邠、狄人侵之、事之以皮幣、不得免焉、事之以犬馬、不得免焉、事之以珠玉、不得免焉、乃屬其耆老而告之曰、吾聞之、君子不以其所養人者害人、狄人之所欲者、吾土地也、二三子何患乎無君、我將去之、邑於岐山之下而居焉、と、此の章、陶復陶穴は、古公豳を去り、岐山の下に遷りし時の事なり、岐に遷るの初は、人衆も多からず、草萊を闢きて居ることなれば、理或は然るべし、公劉よりして豳に居り、大王に至りて、已に十世を経れば、古公の時、豳の地に家室なきこと有る可らず、漆沮と渭と、皆岐周の西より流れて東に入るものなり、

古公亶父。來朝走馬。率西水滸。至于岐下。爰及姜女。聿來胥宇。

率は循なり、滸は水のほとりなり、姜は姓なり、姜女は古公の妃大姜なり、胥は相なり、宇は居なり、大王狄の亂を避け、岐山の下に至りてより、土地を相し、人民を居く
の故を以て、早朝より艱難を跋涉し、馬を走らして、西水の滸りに沿ひ、其の妃大姜
と與に土地の居るべきものを相するなり、大王既に人民の心を得、且賢妃の助け
あり、是れを以て克く王業を爲すことを得るなり、此の章を以て、狄を避くるとき
の事と爲すは非なり、大王狄を避くるの時、豳人の之れに従ふ者多し、豈獨り姜女
と行くことあらんや。

周原膺膺。董荼如飴。爰始爰謀。爰契我龜。日止日時。築室于茲。

周は地の名、沮漆の間なり、膺々は土地の肥えて美なる貌、董荼は草の名、契は開な
り、上章居るべきの地を相することを述ぶ、此の章、地を下して民心を定むること
を言ふなり、言ふころは、岐山の南、周原の地、膺々として土地皆肥え、其の地生ず
る所、董荼の草は、性本苦がしと雖も、今甘きこと、飴の如し、大王其の此くの如くな
るを見て、其の民を居くべきことを知り、是に於て之れに居らんと欲し、豳人の已

れに従ふ者、と之れを謀り、又龜を灼きて、其の兆を開き、其の吉凶を卜ふ、卜も亦吉
なり、其の辭に曰はく、止りて此に居るべし、室を此に築くべしと、古への國を建つ
る者は、必ず以て土地の宜を相し、土地既に善ければ、之れを卜筮に替ふ、定之方中
の詩を見るも知るべきなり

迺慰迺止。迺左迺右。迺疆迺理。迺宣迺畝。自西徂東。周爰執事。

慰は安なり、言ふころは、居るべきの地、既に定まるを以て、乃ち己れに従ひ來る
所の衆民を安んじ、止まりて、其の居る所を定めしめ、乃ち左に止まる者あり、乃ち
右に止まる者あり、而して公宮を其の中央に定め、又田地を分ち與ふるに、大界を
疆し、小界を理し、天時既に至れば、耕作に従ひ、其の田畝を治めしめ、自ら國中を巡
りて、西より東に徂き、民の爲すべき所を見て、周く事を執り、之れが爲めに利を興
さしめざる、なきなり、

乃召司空。乃召司徒。俾立室家。其繩則直。縮版以載。作廟翼翼。

司空は造作を掌るの官、司徒は夫役の事を掌るの官なり、繩とは水もりの繩なり、
縮版とは繩にて板をつらぬるなり、翼翼は嚴正の貌なり、言ふころは、民の事既

に定まる是れよりして宗廟宮室を建てざる可らず乃ち司空の官を召し司徒の官を召し之れをして土地の廣狹を見徒役を聚め宮室を建造せしむ繩直なれば則ち地形方正にして平かなり乃ち繩を以て板を束ね次第に築きて此の翼々と嚴正なる宗廟を成せり禮に君子將に宮室を作らんとすれば宗廟を先きと爲すと云へり

抹之陜陜度之薨薨築之登登削屢馮馮百堵皆興馨鼓弗勝

抹は土を盛る籠なり陜々は衆きなり度は居なり薨々は聲なり登々は力を用ゐるなり削は牆を削るなり馮々は聲なり堵は五版を謂ふ版の廣さ二尺にして五版なれば牆の高さ一丈なり馨は太鼓なり役事を起すときに之れを擗つなり言ふこゝろは牆を築くに土を抹に盛りて之れを牆上に送れば牆上の人受けて之れを板中に居く土を送る者は陜々と多く其の土を居く者は薨々として聲あり又築く者は力を用ゐること登々として又其の土を削り平かにするも數次にして馮々と聲あり處々の土功一時に起り役夫皆其の事に勸むを以て之れをして休息せしめんとするも止まず競ひて力を出さんと欲し馨鼓を擗つに勝へざる

なり蓋し人休息せざれば鼓を止むること能はざればなり此れ大王の民心を得るを言ふなり

迺立臯門臯門有伉迺立應門應門將將迺立冢土戎醜攸行

臯門は城郭の外門なり伉は高き貌應門は宮室の正門なり將々は嚴正なり冢は大なり戎は大なり醜は衆なり冢土は大社なり言ふこゝろは大王是の時に於て乃ち其の宮の郭門を立つ後遂に天子の臯門と爲る此の臯門伉然として高大なるあり乃ち其の宮の正門を立つ後遂に天子の應門と爲る此の應門將々然として嚴正なり乃ち其の國の社を立つ後遂に天子の大社と爲る此の社は軍旅の事ありて大衆を動かすときに之れに告げて行く所なり

肆不殄厥愠亦不隕厥問柞械拔矣行道兌矣混夷駟矣維其喙矣

肆は故今なり今は文王の時を指す愠は恚なり隕は墜なり兌は成蹊なり初めて踏み分けて行く道を謂ふ柞械はむらだちて刺ある木なり駟は突なり喙は困なり言ふこゝろは大王社を立つ衆を用ゐるの義あり今文王其の悪人を怨み恚る心を絶たずして無道を征伐せんことを欲す亦其の隣國と交りて安否を問ふの